
不思議な少女と奇妙なデバイス

樹 亜斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不思議な少女と奇妙なデバイス

【Nコード】

N2644Q

【作者名】

樹 亜斗

【あらすじ】

声を失い、記憶が所所抜け落ちている少女が奇妙なデバイスを起動させる時、物語は生まれる……………のか？

一応原作沿いです。更新が不定期で遅いです。ガールズラブとありますが本当にそうなるのか分かりません。

作者は国語が大変苦手なのでおかしい部分があると思います。頑張っておかしな部分が無いようにしますが、もしあったら教えて下さい。初心者なので失礼な事があると思いますが宜しくお願いします。

第0話

森の中、川の岸边に、カレ、がいた

どうやらあの光のせいで何処かの森の中に跳ばされたらしい

だが、カレ、には関係がない

何があっても、カレ、はただ、眠り続けるだけだ

だが、一人の男性に、カレ、は拾われる

その、カレ、を拾った男性は、カレ、に値段を付け、また別の男性へと渡る

そして、カレ、は少年の手へと渡る。少年は、カレ、をととても大切に扱った

少年は大切にしていた、カレ、を少女に渡した

あげたのではなく、また会えた時に返してもらおう為に

カレ、は少女の手に渡り、関わってしまう

あれほど何ものにも関わりたくなかった筈なのに

‘カレ’が少女と関わる時、世界にどのような影響を及ぼすの
だろうか

第1話

森の中に、少年がいた。少年の格好は、どこか異国の民族衣装のような格好をしている。

少年はどこか怪我をしているのか立っているのも辛そうだ。

その少年を見ている目玉が茂みの中に二つ。目玉は赤く、ギラギラと光って少年を見ている。

ついに赤い目玉の持ち主は少年に襲い掛かる。その身体は黒く、モジャモジャとした塊のようで見たこともない生き物だった。

少年は襲い掛かってくる黒い生き物を見据え、赤く丸い宝石を懐から出して唱える。

「たえなる響き光となれ許されざるものを封印の輪に…ジュエルシード、封印！」

少年と黒い生き物の間には魔方陣が現れて、火花が飛び散る。そして黒い生き物はその衝撃で吹っ飛んでいき、黒い生き物は地面を這いずりながらその場を離れていった。

「はあは、逃がしちゃった…追いかけて…なきゃ、誰か…僕の、声を…聞いて、力を…貸して…、まほうの、ち…からを…」

力尽き、その場で倒れる少年はそう云うと、突然と身体が光だし、

小さくなっていく。

少年が倒れた場所にはイタチに似た動物と、傍には赤く、丸い綺麗な宝石が落ちていた。

朝、まだ太陽が昇り始めて間もない頃、とある部屋、ベッドの布団の中でもぞもぞと動く気配があった。

枕元に置いてある携帯の時計を見ると、まだ起きるにはとても早い時間だ。

まだたくさん眠れると思い、瞼を閉じて夢の中に行こうとする。だが、瞼を閉じて暫くしてもいつこうに夢の中に旅立てない。

何故だか目がとても冴えていて眠気が全然やってこないのだ。

たとえ眠れたとして起きる時間になっても起きられなくなり、学校に遅刻する破目になるので起きる事にする。

本当ならまだ眠れる筈なのに、あの妙にリアルで変な夢の所為だと思いながらベッドから下りる事にする。

ベッドから下りてきたのは肩ぐらいの長さの黒い色の髪をした少女だった。

まず少女がベッドから降りて向かった先は洗面所だった。洗面所に着き、鏡を見て吃驚する。髪の毛がいつもよりもボサボサだったからだ。

とりあえず顔を洗った後、自分の寝癖と格闘する。だが、寝癖が頑固な為なかなか上手く直せない。仕方がないので少し髪が跳ねているが諦める事にした。

少し髪が跳ねているが顔も洗い終わったので、パジャマから私服に着替えようと自分の部屋に戻ろうと二階に続く階段に行く。すると、なにやら二階の方が騒がしい。

そして、階段をドタドタと慌しく、大きな荷物を持った一人の男性が下りてきた。

男性が少女の目の前に来る。

「つばさ、おはよう。今日はいつもより早いんだな。父さん、飛行機の時間を間違えたのか今から行かないと間に合いそうにないんだ。本当はもっとゆっくり出来た筈なんだけど。本当にごめんな」

男性はとても申し訳なさそうに少女、つばさに云う。

つばさは男性が気づかないほどの一瞬、寂しそうな顔をした後、につこり笑い口を大きく開いて「おはよう」と声を出さずに云った後、父親に向かって親指を立てて「グッ」とするとニツと笑い、「大丈夫」とまた声を出さずに云った。

いつの間にか玄関に着いていて、父親は靴を履き終わった後につばさと目線が合うようにしゃがみ込む。

「いいかい、なにかあったら近所の人に助けを求めるんだぞ。戸締りの確認もきちつとする事。父さんの連絡先はわかってるよな。わからなかったらリビングの引き出しに一応紙に書いて置いてあるから。あと…」

まだ話が続きそうだったのでつばさは小さく息を吐くと父親の肩をたたき、父親がしている腕時計を指差した。
すると父親は慌てて立ち上がり、荷物を持つ。

「本当にごめんな。今度はゆっくり家にいれると思うから」

もう一度つばさに申し訳なさそうに云う。

つばさはやれやれと云うように首を横に振ると、父親に向かって満面の笑みを浮かべ、「いつてらっしゃい」と声を出さずに云った。

父親はそれを見て少し苦笑をした後、微笑を浮かべ、「いつてきます」と云いながら玄関のドアを開き、出て行った。

父親が出て行った後、私、悠木つばさはこの学校に行くまでの有り余った時間をどうしようかと考える。家でテレビを見る気分でも漫画を読む気分でもない。

まあ、とりあえず服を着替えようと自分の部屋に戻ることにする。

私の家は父子家庭だ。母親は私がうんと小さい時に亡くなったらしい。

父さんは仕事の関係上でよく海外に行くので私は家で一人の時間が多い。

でも私はそれ程寂しくはない。

お隣さん家のシゲじいの所に良くお世話になってるし、叔母のかなえさんもよく家に遊びに来てくれる。それに近所の人は優しいし、友達もいるからそんなに寂しくはない。

ところで私は声が出ない。去年の秋頃かな？その頃から突然と声が出せなくなっていた。その時の事はよく覚えている。

学校の授業中にいきなり声が出なくなったのだ。声が出なくなつて驚いたし、困つたし、何で？と思つた。

声が出なくなつた初めらへんは戸惑つたけど、簡単な言葉は口パクやジェスチャーで分かつてくれる事もあるし、携帯か紙に文字を書いて見せればいい。今では周りの人も慣れたようだ。

こう考えたら本当に私の周りにいる人は良い人達ばかりだなと感じてしまう。なんか「ありがとう！」と叫びたくなつた。

声が出ないのを病院で診て貰うとお医者さんが云うにはストレスが原因らしい。でも私はストレスを感じてないのにも思っているけどどうしても声が出ない。

原因を父さんにどうしてなんだろうね？と聞いてみたら何か知ってるような感じだったんだけど、父さんは話してくれない。

だけど私は楽観的に考えて、まあいつか声は戻るだろうから大丈夫だろう、と思っている。

服を着替え終わって良い考えを思いく。散歩をしよう。

学校に行くついでに、散歩。これは良い時間つぶしかも知れない。朝ご飯はコンビニで何かを買おう。

そう思い私はすぐ、戸締りの確認をして、ランドセルを背負い、ベッドの枕元に置いてあるお気に入りの黒と白が混ざり合っているような模様の丸い宝石のストラップが付いた携帯を取り、そして朝ご飯が入っている財布を取ると玄関に向う。

外に出て、玄関の戸締りをしっかりと空を見上げる。今日もいい天気になるなあと思いき出す。

家から出て最初に会ったのは、ポストから新聞を取り出しているお隣さん家のシゲじいだった。

シゲじいは私がいることに気がついて元気に挨拶をしてきた。

私は携帯を開いて素早くボタンを打って見せる。

「おお！つばさおはよう。今日は早起きだな。もう学校に行くのか？」

「おはよう！今日はなんか早くに目が覚めちゃって。だから散歩した後学校に行こうかなって」

「ほう。散歩のついでに学校か。いいねえ。朝ご飯はもう食ったのかい？」

「まだだよ。どこかのコンビニでなんか買おうと思って」

「そうか。それじゃあ気をつけて、いってらっしゃい」

そうシゲじいは笑いながら見送ってくれて、私は「いってきます」と声に出さず云い、笑いながらシゲじいに向って手を振る。シゲじいも手を振ってくれて、その後家の中に入って行った。

私は朝ご飯を買う為にとりあえずコンビニに行く事にする。

朝ご飯はおにぎりにしようか、それともパンにしようかなと考えながら歩いていると、前の方から三人の人達が走ってくるのが見えてきた。

走ってくる三人はよく見ると知っている人達で、私が近所に住むシゲじいの次くらいにお世話になっている人達だ。

「あ、つばさちゃんだ。おはよう。早いね、もう学校に行くの？」

と聞いてきたのは高町美由紀さん。高町さん家の長女だ。

私はこくと頷き、携帯を取り出しボタンを打ち、見せる。

「おはようございます。今日は早く起きちゃって、暇だから散歩のついでに学校に行こうかと思って」

「つばさちゃんおはよう。散歩か、いいね。でも朝ご飯はもう食べたのかい？」

「まだだよ。コンビニで何か買って食べようと思ってます」

そう聞いてきたのは高町家の大黒柱で三人の子供を持つ父親の土郎さん。でも三人の子供がいるとは思えないほど若々しい。

挨拶をしてそのままこちらを見ているのが長男の恭也さん。父親の土郎さんにそっくりのイケメンで格好いい人だ。

「つばさちゃんそれは身体に悪いよ。そうだ！家で一緒にご飯を食べよう」

「それはいいな。久しぶりに家で一緒にご飯を食べないか？桃子となのはも喜ぶだろうし」

美由紀さんが名案だと云うように云って、士郎さんがそれに賛同した。

私は、まあ暇だし、久しぶりに桃子さんの作った美味しいご飯を食べたいなと少し考えた後、首を縦に振って一緒にご飯を食べると云うことを伝える。

「じゃあ、一緒に行こうか」

士郎さんが云った後、少しの距離だけど一緒に走りながら高町家へと向う。

そして少しの距離を走り高町家に着いた。

私の体力は普通くらいだけど、ちょっと走っただけでは疲れない筈だ。でも三人と同じペースで走っていたらものすごく疲れた。だってものすごくペースが速かったのだからしょうがないよ。それでも私以外の三人はまだたくさん走れそうで、三人はどんな身体してるんだよ。これが常日頃から鍛えている人と普通の人の差か。などと考えながら高町家に入っていく。

恭也さんと美由紀さんはこの後も練習をするみたいで二人は道場の方に行くので二人とは途中で別れた。高町家は御神流か何か忘れただけど剣術をやっていて家の敷地内に道場がある。…なんかすごい

よね。

私は士郎さんの奥さんで三人の子供を持つ桃子さんに私も一緒にご飯を食べると云うこと伝える為に、桃子さんがいるであろうキッチンへと士郎さんと一緒に行く。すると士郎さんの予想ど通りに桃子さんはキッチンにいた。

桃子さんは士郎さんに気がつくのと士郎さんと少し話をした後、私に挨拶をする。

「おはよう、つばさちゃん。早いね、少しはなのはもたまには見習って早起きして欲しいわ」

「おはようございます。でも今日はたまたま早起きしただけだから散歩の途中で士郎さん達に誘われてきました」

「そうなの。でも嬉しいわ。つばさちゃん、お店の方にはよく来てくれるけど、家の方は久しぶりだから…。だからご飯、張り切って作るわね！」

「ごめんなさい。でもありがとうございます！ご飯、楽しみにしますね！」

微笑みながら桃子さんが云ってくれたので、私もニコニコと笑いながら携帯を打ち、それを見る。

士郎さんも微笑みながらこちらを見ていたけど、ふと何か気になったのか私に聞いてくる。

「でも、ご飯ができるまでつばさちゃん暇になっちゃうけど、その間は どうする？」

少し考えた後、桃子さんのお手伝いも良いなとも思ったけど、結構、高町家にはよく遊びに来るけどそういえば剣術の練習とかほとんど見たことがないなと思い、土郎さんに二人の練習を見てみたいと携帯に書いて見せる。

土郎さんも桃子さんも良いと云ってくれたので、土郎さんと一緒に道場の方へと向かう。

土郎さん達は喫茶店を経営している。土郎さんがオーナーで桃子さんがパティシエだ。お店の名前は翠屋と云って結構繁盛しているみたいだ。桃子さんが作るお菓子はとっても美味しいから繁盛するのは当たり前だと思うけど。なかでも私のお勧めは、シュークリームだ。あれを食べたら他のシュークリームを食べられないほど美味しい。でも桃子さんは普通の料理も美味しいから、ご飯が楽しみだなと考えていると恭也さん達が練習している道場に着いた。

道場に着くと美由紀さんが素振りをしていて、恭也さんは美由紀さんの素振りの型を見ていた。

二人は土郎さんと私が来た事に気がついたのか、美由紀さんは素振りを止めて二人はこちらの方を向く。

「恭也、美由紀。つばさちゃんが二人の練習を見てみたいそうだが、いいか？」

「いいよ！つばさちゃんが見てくれるなら、張り切っちゃうよ！」

「ああ、俺も別に良いよ」

士郎さんがここに来た理由を云ってくれて、見学をしても良いと云ってくれた二人に向って、にへらと笑いながらありがとうと携帯で伝えると士郎さんは用事があるのか道場から出て行き、私は二人の邪魔にならないように端の方に行き、未だに背負っていたランドセルを下ろして、その傍に座る。私が座ると恭也さんも木刀を持ち、美由紀さんと向かい合う状態になる。

美由紀さんが恭也さんに向って木刀を振り下ろす。恭也さんはそれを自分の木刀で受け止めて、払い、続けて木刀を振り下ろす。それを美由紀さんは後ろに下がり、避け、そしてまた恭也さん向う。

恭也さんと美由紀さんの打ち合いは続き、木刀同士が打ち合ったびにカッカツと音が鳴る。その二人の打ち合いを私はじっと見ていた。

暫くの間、二人の打ち合いを見ていたら出入り口のドアが開いて、白いワンピースみたいな制服を着た一人の少女が入ってきて声を掛けてきた。

「お兄ちゃん、お姉ちゃん、おはよう。ご飯だよ！」

恭也さんと美由紀さんは打ち合いを止める。

「おはよう、なのは。そっか、わかった」

「なのは、おはよう」

美由紀さん、恭也さんと続き、なのはちゃんに返事をして、なのはちゃんは二人にタオルを投げ渡す。二人は渡されたタオルで汗を拭取り、恭也さんは私の方を向く。

「つばさちゃんのはなのはと先に行つてもいいぞ。後片付けとかするから少し遅くなるし」

「え！つばさちゃんが来てるの？」

なのはちゃんは私が居ることに気が付いたのか恭也さんの目線を追い、私の方を見る。こっちを向いたなのはちゃんに笑いながら小さく手を振り、正座をしていて少しだけビリビリと痺れている足で立ち上がりながらランドセルを持ち、足が痺れていると思われるないうちになんとかなのはちゃんの近くまで行き、携帯を見せる。

「おはよう！今日はちゃんと一人で起きれた？」

「つばさちゃん、おはよう！私はもう一人で起きられるもん」

「そうなんだ。ようやく一人で起きられるようになったんだね。いい子でちゅね、よしよし」

と携帯を見せながらなのはちゃんの頭を撫で回す。するとなのはちゃんは顔を真っ赤にしながら少しだけ抵抗するが嬉しそうだったのでそのままにしておく。

なのはちゃんは母親の桃子さんによく似ていて、将来は絶対に美人さんだ。私と同じ年の小学三年生で、私立小学校に通っているが、私は公立の学校だ。制服は嫌だったし、何より給食が無いので私立には行かなかった。なのはちゃんは私が一緒の学校に行かないと分かった時は大泣きしていた。その時は嬉しかったな、私も一緒に釣られて泣いたけど。

「おい、なのは、つばさちゃん、じゃれてないで早く行くぞ」

「そうだよ、早く行こう。私、もうお腹ペコペコだよ」

後片付けが終わったのか恭也さんと美由紀さんがまだ道場の出入り口の近くで喋っていた私たちに声を掛けてくる。確かにお腹も空いてきて早くご飯が食べたいので三人と一緒に行く事にする。

「やっぱり、桃子の作るご飯は世界一美味しいな」

「ふふふ、本当？嬉しいわ、そう云ってくれて」

「桃子の料理は世界一、いや宇宙一だよ」

「美由紀、リボンが曲がってるぞ」

「え、本当？」

「ちょっと貸してみる」

そんなやり取りを見ながら桃子さんが作ったご飯を食べる。

それにしても久しぶりにこのやり取りを見るとすごいな。土郎さんと桃子さんは相変わらずラブラブ新婚夫婦のだし、恭也さんと美由紀さんはそのやり取りは恋人のような雰囲気だ。でも恭也さんってたしか恋人、いた筈だよね。いいのかな他の人にそういうことしても。

取り残された感じになりながらふと、向かい側のなのはちゃんを見ると私と同じように取り残された感じがあるのか、二組を見て苦笑していた。

なのはちゃんは私が見ていることに気が付いたのかこっちを見る。目が合ったのでなのはちゃんに笑いかけると、なのはちゃんも同じように笑ってくれた。

また私は食べる作業に戻る。

第1話（後書き）

なんか変なところとかあつたら教えて下さい。
次の更新はいつになるか分かりません。

第2話

高町家で朝ご飯を食べた後、なのはちゃんと家を出て途中まで一緒に学校に行く。歩いている間なのはちゃんと学校の事とか色々話をした。話すと云つても私は声が出ないのでほとんどが聞いているだけだったけど。

なのはちゃんの学校は生徒専用の学校行きバスがあるからそのバスになのはちゃんが乗り、別れる。

でもすごいよね、専用のバス。さすが私立の学校だけあるよね。でも楽だろうけど私はいららないな。だって私は酔いやすいから無理、車とかに乗るとすぐ気分が悪くなったりするから。でも電車は大丈夫なだけだな。

暫く歩いているとだんだん、小学生の子供たちが多くなってくる。そのほとんどは数人で固まって歩いているが、徐々にその固まりもバラバラになる。分団登校で決まった班でもやっぱり親しい友達に会えばその友達の所に行きたくなる。だからバラバラになり、また別の固まりになっていく。みんなで楽しそうに喋り、じゃれ合いながら歩いて学校に行く。私はその光景を見ながら歩いて行く。

分団登校の班は私も確かにあるけど集まるところが私の家から遠い、しかも学校より遠ざかっている。だからそこまで行くのが面倒なので大体一人で行く。しかもなぜか私の近所のほとんどの子が私立の学校に行く。公立に行く私は私一人なので大体一人で学校に行くのだ。そんな事を考えて、少し寂しいなと思った。

考え事をしていたからか、前を歩いて友達と楽しそうに話してい

た人の一人の男子にぶつかる。ぶつかった相手は私より大きな身体でたぶん上級生だろう。

「痛いな。何すんだよ！」

ぶつかった相手が振り向いて怒ったように云うが、私の顔を見た瞬間、オドオドし始めた。

私は何でオドオドし始めたのか分からなかったけど、とりあえず携帯でごめんなさいと書いて見せながら頭を下げる。

「ちゃ、ちゃんと気をつけろよ」

ぶつかってしまった人達は何故か、早歩きで校門を通って行く。まるで私から逃げるようだったな、と思っていると後ろから大きな声で挨拶をしてくる人がいた。

私のクラスメイトの川合雫ちゃんだ。性格も明るく、活発でよく私と一緒にいることが多い人だけど私以外にも仲のいい人が沢山いて顔が広い。

「つばさ、おはよう!!」

振り向いて笑いながら声を出さずに挨拶を返す。

「またあの上級生達になんか云われたの？」

何の事が分からずに少しキョトンとするが、そういえばあの上級生達は去年の冬ぐらいに少しだけちょっかいを掛けられたなと思いつく。

けどその時はほとんど何もなかった筈だ。だから今回は私が少しボーとしていたからぶつかった事を携帯で伝える。

「そうなんだ。てっきりまた何か云われているのかと思った」

「心配してくれてありがとう。でも大丈夫だよ？」

「どういたしまして。でもさ、あの上級生達は気をつけたほうがいいわよ。なんか先生達も手を焼いているみたいだし」

「へー、そうなんだ」

「でもさ、この頃は大人しくしてるみたいだぜ。あいつら」

雫ちゃんと話をしているとその間に入ってくる人がいた。

その人は同じクラスの青井和夜くん。和夜くんも雫ちゃんと同じように明るくて友達も沢山居る。大体私はこの二人と一緒にいることが多い。

「あ、そうなの。でも今だけじゃない？大人しくしてるの」

「それもそうじゃないらしいんだ。去年の冬の初め頃から大人しく

なっ たんだつてさ」

「何かあるんじゃないの？今になんかはじめるわよ」

なんかあの上級生達はとてもやんちゃな人達みたいだ。この二人にこんな風に云われているなんて相当やんちゃなんだろうな。

色々話をしている間に学校の中に入り、自分の教室の机に座るが、まだ二人はランドセルを背負ったまま私の机の所で話をしていた。

その頃には話は全く変わっていて、おにぎりの具は何が一番合うかになっていた。おにぎりはやっぱり梅干しだと私は思う。

「みんな、おはよう！ちゃんと自分の席に着いてね。委員長、号令をお願いね」

「起立」

『おはようございます！』

「着席」

担任の先生がやってきてみんな席に着き、いつもの挨拶も終わる。先生が何か話しているが私は今日の給食は何だったかなと考えていて聞いていなかった。

先生の名前は仲居夕菜先生と云って結構歳の若い女性の先生とても面白い人だ。

そしていつもどおり、授業が始まる。私は大抵話をするとき、携帯で話のやり取りをするけど、授業中は携帯が駄目だから紙に書いてみんなと話をしている。

授業が終わり、待望の給食の時間です！今日の給食のメニューはみんな大好き、カレー！！

このクラスでは給食の時間の時、自分の席の近い六人くらいの人達で集まり、机同士をくっつけて一緒にご飯を食べる。でも私は自由でも良いと思うんだけどな。

みんなと喋りながら食べたり、なぜかクラスの男子が早食い競争をし始めたりといつもと変わらない楽しい給食だった。ついでに早食い競争で勝ったのは何故か参加していた雫ちゃんだった。

楽しい給食の時間も終わり、掃除の時間、お昼休みも終わって授業が始まる。五時限目の授業ほど眠い授業はないと思う。……ごめん訂正、他にも眠い授業も沢山あるや。

そして、その眠たい授業も終わると、帰りの会が始まった。

帰りの会では親に渡すプリントも特になく、先生の話が少しだけあって注意して帰りましょう、とこの日は終わった。

よし、帰るかと思い、一緒に雫ちゃんと帰ろうと教室を出ようと

ドアに手を掛けると、先生が私に声を掛けてきた。

「悠木さん、ちょっと良いかしら？」

雫ちゃんには遅くなるなら勝手に帰るように伝えて、私は首を傾げて先生の方に行く。ほとんどの人が教室から出て行って、今は先生と私の二人だけになった。

「つばさちゃん、今日から暫くの間、家に一人って大丈夫なの？」

「大丈夫だよ、夕菜さん。隣のシゲじいの所に行ったりするし、かなえちゃんも確か今日の夕方に来るはずだし、別に一人って訳じゃないよ」

「そうなの？なら良いのだけれど。でも、かなえ先輩が来るなら私もつばさちゃんの家に行ってもいいかしら？」

「別に良いよ。でも明日も学校があるからお酒は駄目だよ」

「分かっています。多分、少し遅くなるけどつばさちゃんの家に行くね」

夕菜さんは心配そうな顔を浮かべながら私に聞いてくるけど、大丈夫だと云う事を伝え、かなえちゃんが来る事を伝えたら急に、目を輝かせながら私の家に行きたいと云ってきた。私は別に来てても大丈夫だったので夕菜さんに良いと伝える。

夕菜先生は私の叔母、かなえちゃんを先輩と云っていて、とても尊敬をしている。でも先輩といっても同じ学校の先輩ではなかったらしい。

夕菜さんにその事を聞いてみると、「かなえ先輩は私の人生の先輩で、本当は先輩じゃなくて先生、いや、神！みたいなものなのだけれど私は先輩と云って尊敬をしているの！」と篤く語ってくれた。

かなえちゃんの趣味は絵を描いたりする事で、よく薄い本を何にかのイベントで出している。夕菜さんはその本をよく買うそうだ。その本は私も見た事があるけどよく出来ているなと思った。

先生と下の名前で呼び合うようになったのはかなえちゃんが本を出しているとあるイベントに遊びに行ったのがきっかけで会った。まだその時は担任の先生じゃなかったけど夕菜さんは普通に綺麗な先生で、有名で知っていた。

だから会った時は驚いたし、夕菜さんも私がいてとっても驚いたらしい。

それ以来、二人の時は下の名前で呼び合っているし、家にも遊びに来てくれる。それに携帯のアドレスとかも交換した。夕菜さんが趣味の事は秘密にして欲しいと云われたからみんなには内緒にしている。

夕菜さんとの話も終わり、一緒に教室を出て、夕菜先生は職員室へ行き、私は家に帰ろうと下駄箱の方に行き別れる。

「おーい、つばさ、一緒に帰ろう！」

下駄箱につくと雫ちゃんが待っていた。待っていた雫ちゃんの所へ少し駆け足で行き、靴を履き替えて一緒に学校を出ると雫ちゃん
は聞いてきた。

「そつえばつばさ、先生は何の用事で呼んでいたの？」

「今日は家に一人だけみたいだけど大丈夫かって聞いてきたんだよ」

「えっ、つばさ今日、家に一人なの！？」

「ただ、父さんが仕事で家にいなくなるだけだから別に家に一人だけって事はないよ。かなえちゃんも家に来るし」

「そつなんだ。一人だけだと思って、びっくりしちゃった」

「心配しすぎだよ。隣のシゲじいの所にも遊びに行ったりするし、一人でも大丈夫なのに」

「いや、心配は普通するよ。…シゲじいの所か今度また一緒に遊びに行っても良いかな？」

「うん、良いよ！シゲじいも喜ぶよ！」

その後は、雫ちゃんが色々な話をしてくて私も楽しかったけど別れ道になったので、雫ちゃんと別れた。

家に着く頃には太陽の日も落ちて来て、道や家とかがオレンジ色に綺麗に染まっていた。

家にランドセルを置くと、さっそくシゲじいの所に行く。シゲじいの家に着き、玄関を開けようと思ってても開かない。どうやらシゲじいは留守らしい。時々シゲじいは突然に家を留守にする。すぐ家に帰ってくる事が多いので今回もすぐ帰ってくるだろう。シゲじいの家の前にいても仕方がないので自分の家に戻る。

家に戻ると私は自分の部屋に行き、本棚から少年漫画を数冊取り出して、ベッドに寝転びながら漫画を読む。一巻目の漫画を読み終わり、近くにある一巻の続きの二巻目を読もうと手を伸ばして手に取る。

手に取った漫画を開くと部屋のドアがバン！と大きな音を立てながら開いた。吃驚してドアの方を見る。

「やー、やー！つばさ！予告どおりに私はやって来た！！」

ドアが開いて部屋に入ってきたのは、大きな声で何か変な事を云ってる、なんかテンションが高いかねえちゃんだった。

私は寝転んでいた身体を上半身だけ起き上がり、笑いながら手を振り、いらっしやいと口パクで伝える。

「つばさ、ちゃんと戸締りをしないと駄目じゃない。鍵が開いてい

「だから勝手に入っちゃったよ」

「かなえちゃんが来るのを知っていたから開けていたんだよ」

「でも駄目だよ、最近は何事もない」

「はい。これからちゃんと気をつけます。そうそう、今日遅くなるけど夕菜さんが来るって」

「へー、そうなの。でも今日の夕飯の材料、二人分しか買って来ないから。…出前を頼もうか。何にする？」

「お寿司が良いです」

「そっか、お寿司ならお酒にもよく合うね」

「お酒はほどほどにしてください。明日も夕菜さんは仕事があるので」

「善処します」

かなえちゃんは善処すると云うが、絶対にお酒、沢山飲むんだろ。うな。そして絶対、夕菜さんにお酒を飲ますのだから。

かなえちゃんはお酒強いし、一応主婦で明日は何も用事がないみたいだからいいけど。夕菜さんはお酒弱いし、明日は仕事もあるから。……明日は大変だろうな夕菜さん。

でもとりあえずお寿司、どれ頼もう。

そして夕飯時くらいに夕菜さんが来て一緒にお寿司を食べた。

案の定、かなえちゃんにお酒を飲まされている。でも夕菜さんはお酒を飲まされるのを分かっていたのだろう。

私の家に着替えとかを持ってきているし、ウコンの力も買ってきている。

別に賑やかになるのはいいけど、お酒臭いのがちょっと嫌だな。なんて事を考えながら自分の部屋に戻ることを二人に伝える。

そう伝えた時には夕菜さんはもう出来上がっていて、お酒臭い夕菜さんに少しだけ引き止められたけどやり過ぎて部屋に戻る。かなえちゃんは酔っ払っている夕菜さんを眺めて、楽しそうにしていた。

自分の部屋に戻り、読みかけだった漫画を読む。漫画を読んでいる途中、いきなり頭の中に声が響く。

（この声が聞こえていますか？…聞こえていたら力を貸して下さい！…もうすぐ、危険が…！）

切羽詰ったような声が頭の中に響いてきて、吃驚した拍子に持つ

ていた漫画を自分の顔に落とした。

漫画が顔に落ちて、少しだけ痛いなと思いながらベッドを降りる。降りて部屋の周りをぐるうっと思渡すが何も無い。気のせいかなと思いい、ベッドに座るが気になって仕方がない。

ふと、窓の方へ行き、窓から外を見ると、なのはちゃんが走りながらどこかへ行く姿があった。何かあったのかなと考えて、少しばかりと窓の外を見ていた。

もしかして、なのはちゃんもあの変な声を聞いたのかな？

そう思ったら、私も外に出て、なのはちゃんが走って行った方へ走っていた。

なのはちゃんの事だから、きっと厄介事に突っ込むんだろうな。そう考えながら走っていると、目の前でピンク色の柱が立った。それを見て、足が止まる。

なんだろう、あれ。そう思いながら、私はピンクの柱が立っていた方へ急いで走る。

ピンクの柱はなくなり、その柱があったであろう場所に着いた。

そこは電柱が倒れ、アスファルトの地面とコンクリートの壁がボロボロに穴が開いている。

そしてなのはちゃんは走っていた時の服とは違い、白いワンピースみたいだけど何か強そうな服になっていた。なのはちゃんの目線の先には、モジャモジャと形容しにくい生き物がいた。

第2話（後書き）

なのはちゃんのバリアジャケットは映画のです。

読みにくかったら云って下さい。

できればどうしたら読みやすくなるのか教えてくれると嬉しいです。

読んでくれてありがとうございました。

第3話

私、悠木つばさはなのはちゃんを追って着いた場所では普通ではありえないような事が起きていました。

そこに着いた時には壁と地面がぼこぼこに穴が開いていて、なのはちゃんは見かけた時とは違い、白いワンピース型の服を着ていて、手には杖のような物を持って、黒い変な生き物と対峙している。

何が起きているのか分からずに、私はジッとその様子を見ていた。

なのはちゃんに黒い変な生き物が襲い掛かるが、なのはちゃんが持っていた杖からピンク色のビームっぽい何かが出て変な生き物に当たると変な生き物がいなくなり、代わりに青い、ひし形の宝石が出てきた。

「それがジュエルシードです。レイジングハートで触れてください」

その言葉になのはちゃんは従い杖で触れると、宝石が杖の先っぽらへんについている赤く丸い玉の中に吸い込まれるように入っていくと、なのはちゃんの身体が光って、窓から見た時と同じ服装に戻っていた。

なのはちゃん、誰かと話していると思ったら、足元にいたイタチと話していたんだ。…あれ？…イタチって喋れたっけ？杖も喋って

いたようだったけど……。

その光景を少しの間見ていたら、イタチは倒れ、なのはちゃんは私がいる事に気がついた。

「つばさちゃん、どうしたのこんな時間に？」

となのはちゃんは首を傾げながら的外れな事を聞いてきて、私は首にぶら下がっていた携帯で文字を打つ。

「変な声が聞こえて、なのはちゃんが走って行くのを見かけたからでも、すぐここを離れた方が良い」

私はぼこぼこになった壁や倒れた電柱を見ながらなのはちゃんに携帯の画面を見せる。するとサイレンの音が聞こえて来た。

「ごめんなさい!!」

なのはちゃんは素早くイタチを抱きかかえ、謝りながら私と一緒にその場所を逃げた。

あの場所から離れた小さな公園に着き、走って逃げたのでなのはちゃんと私は息が切れていた。

私たちはベンチに座り、一休みをしている。するとイタチも意識が戻ったのか、なのはちゃんの膝の上で寝ていたイタチが起き上がる。イタチは私がいる事に驚いたが、申し訳なさそうに話す。

「すみません」

「怪我は大丈夫なの？」

「助けて貰ったおかげで魔力を怪我の方に集中できましたので、もうほとんど大丈夫です」

そうイタチが云うと、身体を震わせ、包帯を取る。

その身体を見るとほとんど傷はなくなっているようだった。

「なんかよく、分からないけどすごいね。そうだ、自己紹介しても良いかな？」

そう云うとなのはちゃんはほんと云うと自己紹介を始めた。

「私、高町なのは。小学3年生、友達や家族とかはなのは、て呼ぶよ」

「僕はユーノ・スクライア、スクライアは部族名だからユーノが名前です」

「そっか可愛い名前だね」

なのはちゃん、可愛いって、多分僕って云っているから雄なんだよ。雄に可愛いは失礼なんじゃないかな？でも、僕っ娘もいるから、雌なのかな？とも思っただけど別に良いか、動物だし。

そんな事を考えていると、ユーノが落ち込んだ様子でなのはちゃんに云う。

「すみません。貴女を巻き込んでしまって」

「なのは、だよ。でも、私は平気だよ。だから大丈夫。…ここじゃ落ち着かないから、私の家に行こうか。つばさちゃんも来るよね？」

なのはちゃんは落ち込んだユーノを励まして、家に帰ろうと云ってきた。

……行きたいけど、家の酔っ払い達が心配だし。主に夕菜さんとか夕菜先生とか。

というか私、忘れられていなかったんだね。私だけ自己紹介してなかったし。……良かった。

なのはちゃんの家に行けない事を伝えようと思ったけど、なのはちゃんを家に送ってからで良いかと思ったので、とりあえずなのはちゃんの家に行く事にした。

私達がなのはちゃんの家に向っている途中、ユーノが聞いてきた。

「そちらの方はなんてお名前なんですか？」

携帯を取り、文字を打とうとするが一度、なのはちゃんの方を見る。

なのはちゃんは何でこっちを見てるのか分からないという顔をしていたが、私が云いたい事が分かったのかユーノに聞いてくれた。

「悠木つばさちゃんていつて私と同じ小学3年生なんだけど、今は喋れないの。いつもは携帯とかで文字を打って云いたいことを伝えるんだけど。……ユーノ君って言葉は分かっているみたいだけど、文字は分かるの？」

「そうなんですか。言葉の方は魔法でなんとか分かっていますが、文字は分からないんです。すみません」

そう云うとユーノはまた落ち込んだ。私はユーノを見て、なのはちゃんに文字を打った携帯を見せ、ユーノに伝えるように云う。

「別に大丈夫だよ、そんなに落ち込まなくても。それに、なのはちゃんを通して私が云いたい事を伝えてもらっから」

なのはちゃんはその言葉をユーノに伝える。するとユーノは何か思い出したように話す。

「そういえば、つばさんはどうしてあの場所に来たんですか？」

「確か、変な声が聞こえたって云ってたよ。でもその声ってユーノ君だよな？」

「はい、そうです。僕の声が聞こえたのなら、なのはさんを介さなくても話すことが出来るかもしれません」

なのはちゃんが私の代わりに答えると、ユーノがもしかしたら話せるかもしれないと云って来た。

そんな事が本当に出来るのか吃驚して、ユーノをじっと見ているとなのはちゃんが聞く。

「本当につばちゃんと話することが出来るの？」

「多分、僕の声が聞こえたのなら、つばさんにも魔力があるのでしょう。なら念話という簡単な魔法が使えるかもしれません」

「どうすれば、その念話っていうのは使えるの？」

「レイジングハートを持って念じてみて下さい」

とりあえず私はなのはちゃんから赤い玉を持って念じてみる。

（あゝ、本日は晴天なり、晴天なり）

「あつ、聞こえたよ！……でも何でそれ？」

（普通でしょ？この言葉）

「そうなの？」

（そうなんです）

とりあえず念話はできた事は分かったけどこの赤い玉、なのはちやんのだしなあ。

（念話ができる事は分かったけど、これがないとできないんじゃない？）
意味ないよ？）

「それもそうだね。……なら無くてもできるようにすればいいよ！」

（ええー、そんな簡単にできるわけないよ）

私がレイジングハートだっけ？が無くてもできるようにすればいいとなのはちゃん云っているけど簡単にできるわけないと云ったらユーノが話しかけてきた。

「大丈夫です。この魔法は比較的簡単ですから、すぐにできると
思います」

「そうだよ！少し頑張ったらつばさちゃん、すぐにできちゃうよ！」

（とりあえず頑張ってはみるけど。…ユーノは話すの止めといった方がいいよ。もうすぐなのはちゃんだし。あとこれ、返しとくね）

三人で色々話しているうちになのはちゃんの家近くに来ていて、ユーノに話すのを止めさせて、レイジングハートを返す。

「本当だ。もう家の近くに来てたんだね。でもまだ話をしていても大丈夫なんじゃ？」

なのはちゃんがそう云ってきて、私はいつもの様に携帯を持ち、ボタンを打って画面を見せる。

「だって、玄関ら辺に美由紀さんと、恭也さんがいると思うから」

「えっ、そうなの!？」

なのはちゃんは吃驚している間に玄関に着く。

すると私が思っていた通りに、二人は玄関の扉の前にいた。

だって、なのはちゃんちの家族って鋭い人ばかりだし、多分内緒で行ったから心配で、玄関の所にいるだろうなと思っていたから。

「おかえり、なのは。つばさちゃん、こんばんは」

「お、お兄ちゃん!？」

「おかえりなのは、つばさちゃんもいらっしやい」

「お、お姉ちゃん!？」

なのはちゃんは美由紀さんと恭也さんがいる事に吃驚していたが、私は小さくコクンとお辞儀をすると携帯でこんばんはと打ち、見せた。

「なのは、こんな時間にどこに行っていたんだ？」

「えっと、あの」

恭也さんは静かになのはちゃんに聞いていたけど、なのはちゃんはうまく言葉を返せないようだ。

確かにイタチの所に行ったら変な生き物と戦って警察から逃げた。なんて云えないもんね。

「あつ、可愛い!でも、なんか弱っているね。なのははこの子が心配だから様子を見に行っただね」

一瞬静かになっていたけど、美由紀さんがなのはちゃんに抱えられていたユーノを見て、云う。

「だとしても、内緒でこんな時間に出かけるのは良くない」

「ごめんなさい」

なのはちゃんは恭也さんの言葉に落ち込み、謝る。

「まあいいじゃん、無事になのはは帰ってきたんだし。なのはは良
い子だからもうこんな事はしないもんね」

「うん。もうしないよ。お兄ちゃん。内緒で出かけて、心配かけて
ごめんなさい」

「うん」

「はい、これで解決」

その様子を見ていた美由紀さんがなのはちゃんに援護をだすと無
事に解決をしたようだった。

なのはちゃんも家に着いたし、私も家に帰ることを伝えたと、三
人は驚き、なのはちゃんちに泊まるように勧める。

だけど私は明日の用意も持ってきてないし、無断で出掛けたから
家にいる人に心配を掛けてると色々いい訳をして誘いを断った。

「つばさちゃん、今度絶対お泊り会しようね!」

「うん、良いよ」

「本当に送って行かなくてもいいの?」

「私の家はすぐ近くだし、大丈夫です。それに走って帰るし」

「そうか。なら気をつけて帰るんだぞ」

なのはちゃんと次のお泊りを約束して私は軽くお辞儀をして少しの距離を走りながら自分の家に帰った。

家に戻り、部屋のドアを開けるとそこでは、べろんべろんに酔って顔が赤く染まった夕菜さんが笑っていたと思っていたら何故か大泣きしていて、夕菜さんほどではないが顔が赤く染まっているかなえちゃんは、夕菜さんのあられもない様子を見ながら笑い、栓を開けた瓶でラッパ飲みをしていた。

……なんなんだろうな、この状況。

それになえちゃん、どれくらいのお酒を夕菜さんに飲ませたんだろう。

そしてかなえちゃん、相当の量のお酒を飲んだんだね。本当に高町家に泊まらなくて正解だったよ。

私はとりあえず、足元に転がっていた空き缶や空き瓶を片付けようとそこらへんにあったビニール袋にゴミを入れて行った。それにしてもお酒臭いな。……換気もしなきゃ。

私が片付けをしているとこの状況を作ったであろうかなえちゃんが絡んできた。

「つばさ、一緒にこれのもつよ」

私は首を横に振り、嫌だと云う事を伝えるとかなえちゃんはその事を云わないでさ」などと云って、私の身体をぐわんぐわんと漫画に擬音語が付きそうなくらい揺らしてきた。

……苦しいし、これ、少し気持ち悪くなるんだね。

私はかなえちゃんの揺らし攻撃からなんとか逃げ出し、ほっと一息吐いていると次は夕菜さんが絡んできた。

「つばさちゃん。私、彼氏が欲しいよ。独り身はさびしいんだよ」

などと云い、大泣きしながら私の足元にすがりつく夕菜さん。

一応私の小学校一の美人教師なのに恋人ができないらしい。

なんとかすがりつく夕菜さんを放そうと、とりあえず一歩後ろにさがったら、かなえちゃんが先ほど飲んでいた瓶に足を取られ、転んだ。

第3話（後書き）

変な部分がありましたら教えて下さい。

読んでくれてありがとうございます。

第4話

とても大きくて綺麗な広場があり、その広場にはこれもまた綺麗で大きな噴水がある。噴水では毎日決まった時間に音楽が鳴り、それに合わせて踊るように水が出てきたりする。

噴水の周りには数十本の木々があり、他にはベンチが何個か置いてあるだけの単純なつくりだ。

広場にやってくるひと達の大体は噴水のショーを見るためにやってくる。

しかし噴水ショーが無くてもこの広場は沢山のひと達が訪れる。

この広場はひとびとの憩いの場であるからだ。

その広場の中でも一際大きな木がある。

その木の傍にはベンチがあるがベンチに座らず、木の根元に寝転んでいる黒髪の男性がいた。

その寝転んでいる男性に近づく青年が一人、その青年の容姿は真っ白の腰まで伸びた髪に真っ黒の瞳だった。

「おい、何呑気に寝てるんだよ！ちゃんと仕事をやれ！」

寝転んでいた男性は起き上がり、青年に云う。

「僕は寝てないよ。ただ寝転んでいただけさ」

「そんなことはどうでもいいから、さっさと仕事をしろ!!」

「別にそんなに怒鳴らなくてもいいじゃないか。そんなに怒っていたらいつかハゲるよ?」

「つつ、ハゲたらあんたのせいだろうが!! いいからさっさと仕事しろ!溜まってるんだから! あんたが引き継いだ国の事だろうが!!」

青年はまた大声で怒鳴りながら云うと男性は仕方ないと呟きながら立ち上がり、そして男性は笑いながら云う。

「大丈夫だよ。そんなに心配をしなくても。他の皆が優秀だし、国の皆も良い人達だから分かってくれるさ」

「だとしても、ちゃんと仕事はしろよ!!」

「はいはい、分かりました。ルドラがうるさいからちゃんと仕事をしますよ。……んんー」

男性は腕を上げて身体を伸ばすと、歩き出した。

ルドラと呼ばれた青年ははぁと溜息を吐いて男性の後を付いて行くが、その顔はどこかうれしそうに見えた。

場面が変わる。

あの綺麗だった広場は面影もなく、噴水も瓦礫になっていて、周りには赤黒くなった血溜まりと沢山の死体が転がっている。

そしてその場所はまるで嵐の前の静けさのようにあたりは静まり返っていた。

そこにあの二人の姿がある。

「ルドラ、もうこの国は終わりだな。僕がこの国を親から継いで数年……。皆は本当に幸せだったのだろうか。本当に、これで良かったのだろうか？」

「幸せだったに決まっているだろ。じゃなきゃ、とっくの昔にここから逃げてる」

男性はルドラに向かってそうか、それもそうだねと呟くと、やさしく微笑み、ルドラの頭を撫でる。

「ルドラも今までありがとう。この国を僕が引き継いで今までやって来られたのは君のおかげでもあるからね」

「なんだよ。気持ち悪いな」

ルドラはそう云うと少し顔を赤らめ、そっぽを向きながらどうついたしましてと呟いた。

「……そろそろ行かないとね」

そう男性が云うと歩き出し、その後ろを緊張した面持ちで、そして少し悲しそうにルドラが付いて行った。

アップテンポの曲が聞こえてくる。

その曲は少し前に流行った音楽で、耳元から聞こえてきた。

その音を止める為に自分の顔の近くに置いてある携帯を開き、止める。

何か今日も変な夢を見た。

昨日も変な夢だったし、そういえば昨日の夜は変な事が起こった。とまだ頭が回ってない状態で考える。

暫くするとようやく脳が働いてきた。

えっと、昨日の夜はなのはちゃんを追って行ったら、なのはちゃんが変な生き物と戦っていて、話すイタチのユーノと赤い玉、レイジングハートがいた。

その後は大変な状態になっていた場所から逃げて、ユーノと少し話して、なのはちゃんの家に送って、帰ってきたらこれまた大変な風になっていたかなえちゃんと夕菜さんがいた。

その夕菜さんにすがり付かれて、かなえちゃんが飲み終わった瓶に躓いて転んで。

……………あれ？その後が思い出せないや。……………まあ、いつか。

私はとりあえずベッドから下りて顔を洗うために洗面台に行こうと部屋を出た。部屋を出て、階段を下りるとお魚を焼いた香ばしい匂いがした。

階段を下り、洗面所に入ると具合の悪そうな夕菜さんがいた。

夕菜さんは吃驚した後、少し怯えて涙目になり、いきなり謝ってきた。

「昨日はごめんなさい！これからはちゃんと気をつけます！ですから許してください！！！」

夕菜さんはすごい勢いで土下座をした後、そう云った。

私は訳が分からずそのままキョトンとして、私を転ばしてしまっただからだと分かり、大丈夫だよと声を出さずにどうにか伝えるところを上げてくれた。

本当に許してくれるの？と今にも泣きそうな感じで聞いてきたので笑いながらこくと頷く。

すると、ありがとうと夕菜さんはそう云って笑ってくれて立ち上がった。くれた。

私はほつとして、夕菜さんは朝食を作っているかなえちゃんの手伝いにリビングの近くにあるキッチンに行き、私は顔を洗い、歯磨きをした後、リビングの方に向う。

リビングに着くと、もう朝ご飯が出来て並んであり、“日本の朝ご飯”って感じのご飯だった。

「おはよう、つばさ。もう今はブラックじゃないんだね」

かなえちゃんが挨拶をしてきて、私も口パクで挨拶を返すが…ぶらつく？何の事が分からずに首を傾げる。

だが、かなえちゃんはその事を教えてくれずにイスに座る。かなえちゃんの横にいた夕菜さんは顔が引き攣っていて、あははと乾いた笑いをしながらイスに座った。

なぜか教えてくれなさそうだったので不思議に思ったがとりあえずイスに座り、ご飯を食べる。

夕菜さんは二日酔いの為、軽い物を食べている。

ご飯を食べ終わった後、私は歯になんか詰まった感じがしたのでまた歯を磨き、まだパジャマだったので着替える為に自分の部屋に戻り、かなえちゃんは後片付けを、夕菜さんは私よりも早めに学校に行かなくてはいけないのでもう家を出て行った。

……まだ体調が良くなさそうだったけど大丈夫かな？

着替えが終わり、もう一度リビングに戻るとテーブルの上には紙が置いてあり、そこには文字が書いてあった。

「私はもう一眠りするからおやすみなさい。あと気をつけて学校にいつてらっしゃい」

私はそれを見て軽く溜息を吐くと、そういえばまだ学校の準備をしていなかったよね？と思いながら自分の部屋に戻る。

いつもの家を出る時間よりも少し遅くなった。といってもいつも決まった時間に家を出る訳じゃないけど……。

私はランドセルを背負い、白と黒のまだら模様の丸い玉のストラップが付いた携帯を首にかけると家を出るために玄関に行く。

かなえちゃんがいるから玄関のドアだけを閉めるとそのまま学校に行く。

歩いていると後ろから声を掛けられた。

「つばさちゃんおはよう！」

歩いていた足を止め、振り向くとなのはちゃんが手を振りながら駆け足でこちらに向かってきた。

私も笑いながら手を振ると頭の中に声が響く。

（おはようございます。つばさん）

私は吃驚して、なのはちゃんがユーノを連れて来ているのかと思い、なのはちゃんを見るとレイジングハートを渡してくれた。

（おはよう。なのはちゃん、ユーノ。もしかしてユーノを学校に連れて行くの？）

「違うよ。ユーノ君は家でお留守番だよ」

（えっ、でも声が聞こえてるよ？）

（念話は離れていても話すことが出来るんです）

（へえ、そうなんだ。便利だね）

「昨日は落ち着いてユーノ君とゆっくり話せられなかったから、こ

の念話で暇なときに話してくれるんだって」

ふうんと思いながら歩いているとなのはちゃんと別れる所に着いていた。

私はレイジングハートを返すとバイバイと小さく手を振り、なのはちゃんと別れた。

学校に着くとまずは教室に入り自分の席に座る。

すると雫ちゃんが私が来た事に気がつき、一緒に雫ちゃんと話していた山口さんも私の席に近づき、挨拶をした。

「つばさ、おはよう。何か昨日、どつかですごい事故があったらしいよ！」

「つばさちゃんおはよう。今ね、その事でみんな話題になってるんだよ！」

二人とも興奮したように云ってきた。

その事故って多分、昨日のあれの事だよね？確かにあの惨状はすごかったな、と他人事のように考えている間にいつのまにか雫ちゃんだけではなく、和夜君と他の子達も私の席の近くにいてその事故の話で盛り上がっていた。

チャイムが鳴っていた事にも気づかずにみんなで話していたら、先生が教室に入ってきた。

「はい、もうチャイムが鳴りましたよ。みんな、席に着いてくださいね」

先生の言葉でみんな席に着くいつものように挨拶をした。

「昨日、動物病院の近くで大きな事故がありました。怪我人とかは居なかったようですが、車とかには充分気をつけましょう」

先生はみんなが話題にしていた事故の事を少しだけ話して終わる。

その後は授業が始まると眠気が襲ってきて、私はその眠気と戦っていた。

（ジュエルシードは僕らの世界の古代遺産なんだ）

授業中の眠気と戦っていたら、いきなりユーノの念話が聞こえてきた。

どうやら今からあの変な生き物の事とかを話らしい。……授業中に。

別に私は良いのだけれど、なのはちゃんが良いのかな。

私の所も授業中って事はなのはちゃんのところも授業をしているのだろう。

私立の学校は勉強とか難しそうだし、厳しそうなのに。そんな事を思っている間にもユーノの話は続く。

（本来は手にした者の願いをかなえる魔法の石なんだけど、力の発現が不安定で、昨夜みたいに単体で暴走して、使用者を求めて周囲に危害を加える場合もある。そしてたまたま見つけた人や動物が、間違っ使用してしまっ、それを取り込んで暴走することもあるんです）

（どうしてそんな危険な物が、うちのご近所さんにあるの？）

なのはちゃんの念話も聞こえてきた。

なのはちゃんも授業中だけど別に良かったみたいだ。

（僕の所為なんです。僕は故郷で遺跡発掘を仕事にしているんだけど、ある日古い遺跡の中であれを発見して、調査団に依頼して保管してもらったんです。運んでいた時空艦船が事故か、何らかの人為的災害にあってしまい、21個のジュエルシードがこの世界に散らばってしまい、今まで見つけられたのはまだ、たったの1つなんです）

（じゃあ、あと20個か）

そうなのはちゃんが云うとチャイムが鳴った。

私は次の授業は体育だから着替えて校庭に行って、友達と話していると授業が始まるチャイムが鳴る。

すると私も思っていた事をなのはちゃんがユーノに聞いていた。

（…ちょっと待って。話を聞くかぎり、ジュエルシードが散らばったのは、別にユーノ君の所為じゃないんじゃない？）

（だけど、あれを見つけたのは僕だから。全部見つけて、あるべき場所に返さないと、駄目だから）

うーん、そういう考えもあるのか…。と思っているとなのはちゃんが話す。

……一応、私も何か話そうとはしているけど、無理みたいです。残念。

（なんとなく、なんとなくだけど、ユーノ君の気持ちわかるかもしれない。真面目なんだね、ユーノ君は……）

（えっ？）

今日の体育はドッジボールみたいだ。

……それにしても二人とも真面目なんだねえ。もうちょっと気楽に考えれば楽なのに。

まあ、無理だね。と表には出さないで、苦笑した。

他事を考えていた所為か、私は後ろから、ものすごいスピードのボールが来ている事に気づかずにいると、同じチームの人に危ないと云われ、私ははっとなり、振り返ると見事にボールが顔のど真ん中にあたった。

第5話

（えっと、昨夜は巻き込んでしまつて、本当に申し訳なかったけど、この後僕の魔力が戻るまでの間、ほんの少しだけ休ませて貰いたいだけなんだ。一週間、いや、五日もあれば魔力も戻るから、それまで）

（戻つたらどうするの？）

ユーノ君が云つた後、わたしは聞く。

（また、一人でジュエルシードを探しに出るよ）

（それはだゝめ）

（だ、駄目つて）

（わたし、学校や塾の時間は無理だけど、それ以外の時間は手伝えるから）

（だけど、昨日みたいに危ない事だつてあるんだよ？）

ユーノ君はわたしが思っていた通りに一人でジュエルシードを探すと言ってきたので、わたしも一緒に探す事を伝えたと危ないからと云ってきた。

思わず声に出して笑ってしまい、隣の席の子が不思議そうにこっちを見たけど構わずノートに黒板の文字を写す。

（だって、もう知り合っちゃったし、話を聞いちゃったもの。ほっとけないよ。それに、昨夜のような事が度々あったらご近所さんの迷惑になるしね。…ユーノ君一人ぼっちで助けてくれる人、いないでしょ？一人ぼっちは寂しいもん。わたしにもお手伝いさせて？それに、困っている人がいて、助けてあげられる力が自分達にあるのなら、そのときは迷っちゃいけないって、これうちのお父さんの教え）

（でも…）

ユーノ君はまだ、わたしが手伝う事をためらっている。

「うわぁ、うう、いてて」

わたしがユーノ君と念話でもう一度、話そうとしたら休憩時間になり、アリサちゃんがわたしの結んでいた髪を引っ張っていて、慌てていたらユーノ君と話せなくなった。

すずかちゃんはそれを見てくすくすと笑っている。

……アリサちゃん、これ地味に痛いからやめてよ。

暫くして学校も終わり、アリサちゃんとすずかちゃんと一緒に帰っている間にもう一度、ユーノ君と念話でお話をする。

（ユーノ君は困ってて、わたしはユーノ君を助けてあげられるんだよね。魔法の力で）

(…うん)

(わたし、ちゃんと魔法使いになれるのか自信がないんだけど…)

(なのははもう、魔法使いだよ。多分僕なんかより、ずっと才能がある)

(えっ、そうなの？自分ではよく分らないんだけど。とりあえず、いろいろ教えて。わたし頑張るから)

(うん、ありがとう)

ユーノ君はわたしが手伝うのをためらっていたけど、やっと手伝う事を許してくれた。

すずかちゃんとアリサちゃんと別れた後もユーノ君と話しをしていた時、ざわりつと変なものが身体に伝わった。

(ユーノ君、今のって)

(新しいジュエルシードが発動している。すぐ近く！)

(どうすれば!?)

(一緒に向おう。手伝って！)

(うん)

ユーノ君と話している間に、ジュエルシードが発動したらしく、急いでユーノ君とジュエルシードが発動した所へ向った。

ジュエルシードが発動した場所は神社で急いで階段を駆け上がる。

「なのは！レイジングハートを！！」

「うん！」

ユーノの言葉でなのはは息を切らせながら首に掛けていたレイジングハートを取り出して神社に着くと大きな犬みたいなモノがいた。

その姿は目が四つあり、その近くには赤い角のような物もあって、大きな牙で、人よりも大きな身体だった。

「原住生物を取り込んでいる」

「ど、どうなるの？」

「実態があるぶん手強くなっている」

「大丈夫、多分」

「なのは！レイジングハートの起動を！」

「え？起動って？」

「我、使命から始まる、起動パスワードの事！」

「そんな長い覚えてないよ！」

そんなやり取りをしている間にも犬の化け物はなのは達の方に突進して来ている。

「もう一回云うから繰り返して！」

ユーノはそう云うが間に合わず、なのはに化け物が噛み付こうとした瞬間、なのはが手に持っていたレイジングハートがピンク色に光り輝く。

「レイジング、ハート？」

《Stand by・Ready・Set ap》

光り輝いた後、レイジングハートは杖になり、ユーノは起動パスワード無しで起動させた事に驚く。

化け物は一瞬光った事により、足を止める。

「なのは！防護服を」

ユーノはそう云ったがなのは展開について行けず少しぼんやりしていると、足を止めていた化け物がもう一度なのはに襲い掛かる。

《Barrier jacket》

なのははピンクの光に包まれていたが化け物はそれに構わず突進した。

だがなのははダメージを受けている様子はない。

そしてさっきまで着ていた白い制服ではなく、それをあしらったような服装になっていた。

化け物は突進した後、まだ何が起こったのか分かってない様子のなのはに鳥居の上から襲い掛かるが、またピンクの壁に阻まれる。暫くの間化け物はその壁を突き破ろうと押し続けていた。

《Protection condition: all green
n.》

レイジングハートが云うと化け物のはじき返され、倒れる。

ユーノはなのはがノーダメージで受けている事に驚き、そして思っていた通りにすごい才能がある事分かった。

「いたたつていうほど痛くはない、かな？えっと、封印つてのをやればいいのかな。…レイジングハート、お願いね」

《All right・Sealing mode・Set
up.》

化け物がピンクのロープみたいな物に縛られると、化け物の額に英語数字が浮かび上がってきた。

《Stand by・Ready.》

「リリカル！マジカル！ジュエルシールド、シリアル16…封印！」

《Sealing.》

化け物はいなくなり、ひし形の宝石がゆっくりと落ちてきて、レイジングハートの中に入っていた。

《Receipt No. XVI》

封印をしてなのはは一息をつき、ユーノに向かって云う。

「これでいいのかな？」

「うん、これ以上ないくらいに」

なのはとユーノはジュエルシールドの封印が終わり、ほっとしてみると、どこからかくうーんと云う犬の泣き声がした。

なのは達は声があった場所を見ると、そこではつばさがジュエルシールドの所為で化け物になっていた小型の犬を撫でていた。

「つばさちゃん!？」

つばさはなのはに向って笑いながら小さく手を振り、また犬を撫でる。

なのははつばさがいる事に驚き、つばさの方へ向う。

（お疲れ、なのはちゃん。大活躍だったね!）

「いつからいたの!？」

（なのはちゃんが神社に着いた時からかな？）

「最初からいたの？」

（そうだよ？気づいてなかったみたいだったけどね）

そう、私は最初からここにいたのです。犬を撫でながらここにいて、
る訳を回想する。

私は学校が終わった後、友達と神社で遊ぼうと来たのはいいけど、
その友達が家の用事がある事を忘れていて、慌ててその友達は帰っ
て行ったのだった。

私は暇になり、ここら辺をぶらついていた。

犬の散歩に来ていたお姉さんの犬をぼーと遠目で見ていて、何か見た事がある石を銜えているなど思っていたら、いきなり犬が化け物みたいになっちゃって吃驚した。……関係のない話だがその友達とは雫ちゃんだ。

存分に犬を撫でたので放してやると、気絶をしている飼い主のお姉さんの方に行って、頬を舐めた。

そしたら犬が化け物になったショックで気絶していたお姉さんが起きる。

わたし達が少し遠くにいた為か気づかずにお姉さんは犬を連れて帰っていった。

その姿を私達は見送り、もう一度なのはちゃんとユーノにお疲れ様と云って、一緒に帰った。

一緒に帰っていたなのはちゃんとユーノと別れて、自分の家に着いてからも今日の事を振り返ってみる。

学校でドッジボールをしていて、ボールが顔に当たり、気絶をして、起きたらいつの間にか学校が終わっていたんだよね。

起きてもまだ、鼻のあたりが少し痛かったし。……油断していた駄目だね、ドッジボールは。

で、さっき回想したとおりです。

でも、あれは何だったんだろうな。ジュエルシードで化け物になった犬に襲われたときに、なのはちゃんみたいに壁が出てきたんだよね。ピンクじゃなくてグレー、じゃなくてシルバーの色だったけど。

だって、私は魔法が上手く使えないし、レイジングハートみたいな物も持っていないのに。

その後、丁度よくなのはちゃんがきて、化け物はなのはちゃんの方に行ったんだよね。

夕飯の時間になって、かなえちゃんの作ったご飯を食べた後、お風呂に入って、今月の新刊の漫画が出た漫画を一巻から読み返して、良い子が寝る時間をちよつとすぎたくらいの時間で寝た。

ここ二日は変な夢だったから今度は普通の夢がいいな。

でも、普通の夢って何だろう？などと考えながら眠った。

第5話（後書き）

なのはちゃんの視点で書こうとしたけど、上手く書けませんでした。
今度は上手く書けると良いな。

読んでくれて有難う御座いました。何かおかしなところがあったら
教えて下さい。

第6話

私は誰かと一緒にいて話をしている。

そこは日本ではなく、外国のどこかの飲食店で、そこそこ賑わっている店のようだった。

私と話している人は男の子で歳が私よりも5、6歳ぐらい上の離れている子だ。

そこで私は唐突に分かった。

これは夢で、昔の夢だという事に。

去年の夏休みの初めらへんに父さんに我俣を云って、父さんの仕事の見学として海外へ行かして貰ったのだ。

だけど、父さんの仕事の見学はあまり出来なかった。

私は着いて早々、迷子になったのだ。

その後、迷子になった私を日本語が上手で親切な親子が父さんと再会させてくれた。

その親子の母親は父さんの撮った写真集を持っていて、父さんのファンだったらしく、その親子と私達はとても仲良くなった。

私はその親切な親子の息子さんに町の案内や、遊んで貰ったりとして、あまり父さんの仕事ぶりは見られなかった。

でも楽しかったのを朧ながらも覚えている。

今の場面は私が日本へ帰る前日の所だろう。私は今にも涙を流しそうになっている。

「ちゃんと、また会えるよね？」

「会えるよ。今度はオレの方が日本に行って、会いに行くよ」

「本当に？」

「うん。そんなに心配ならこれを持っていて」

男の子は胸に掛けていた丸い宝石を私に渡して云う。

その宝石は男の子の父親が誕生日のプレゼントとして渡したらしく、男の子はそれをとて気に入っているものすごく大事にしていた物だ。

「オレが日本に行って、つばさとまた会えたときに返してくれればいいよ」

私はこくと頷き、まだ涙目だろうけど笑い返す。

「それにしても遅いな。皆どこまで行ってるんだろう？」

すると男の子は少し頬を赤くして店の出入り口あたりを見て云った。

私はそうだねと云い、顔が少し赤くなって大丈夫かなと思いがら、男の子が向いた方を見ると、出入り口の近くに座っている客達が無口論をしていると思っていれば、そのうちの一人が席を立ち、懐から黒い何かを取り出して……………。

そこで私は目を覚ました。

私は何故か目から涙が出ていて、不思議に思いながらも、夢の内容を思い出そうとしていた。

この夢は昔、といっても去年の出来事だということを思い出す。

でも身体が大きい男の人が黒い何かを取り出して……………の続きがどうしても思い出せない。

思い出そうとするとズキッと頭が痛む。

あの日の事を思い出そうとするけどいつも頭が痛くなるから諦める。

今でもずっと分からないままだ。

あの夢の続きも、どうしてあの日の事を思い出そうとすると頭が痛くなるのかも分からない。

父さんに聞こうとしてもあの日の話題になるととても辛そうな顔をするから聞けない。

だからあの日も含めて何日間の記憶が曖昧な部分が多く、記憶が無い事もある。でも日常生活には問題がないから深く考えていない。

だけど記憶が時々、曖昧というかばかりと穴が開いたように覚えていない時が今でもある。

本当に時々で片手で数えるくらいだから別に大丈夫だと私は思っているけど。

私は暫くの間ぼーとしていた。携帯がいつも起きる時間を告げるアラームが鳴り、少し頭が痛いけどベッドから下りて、顔を洗いに洗面所へ向う。

運よく私はかなえちゃんとは鉢合わせにならなくて良かったと思う。

今の私の顔はきつとひどくて、心配させちゃうから。

顔を洗い、いつものようにリビングに着くと、ついさっき起きたばかりで寝癖をまだ直していなく髪がボサボサかなえちゃんがキッチンに立ち、朝ご飯の用意をしていた。

……かなえちゃん、たとえ家の中でも、もうちょっと身だしなみを整えた方がいいのではないかと思います。

「つばさ、おはよう。ご飯、もうちょっと掛かるから待っていて」

私は笑いながらこくと頷き、いつもの席に座る。

暇だからテレビをつけてチャンネルをリモコンでいい番組がないか調べる為にコロコロ変えていると、焼きたての食パンが2枚ほどが皿の上に盛り付けてあって目の前に置かれ、その次にサラダが置かれる。

今日は洋風みたいだ。

パンの時は飲み物が普通、牛乳とかかもしれないけど、私のところはいつもお茶だ。

学校の給食や他の家のご飯の時の牛乳とか大丈夫なだけと家とかのご飯のお供の飲み物は絶対に普通のお茶だ。

紅茶以外のお茶なら麦茶でも緑茶でも良いんだけど。……お茶じゃないとなんか嫌なんだ。

そんな事を考えながら食パンにジャムを塗って食べていると、かなえちゃんが番組を変えてもいいのか聞いてきたのでこくと頷く。

テレビの番組をニュースに変えていて、そのニュースではあの黒モジャのせいで穴だらけになった事をやっているみたいだった。

どうやら車の事故ではなく原因が分からないとの事。

私はその原因を知っているけど信じてもらえないだろうな。

私は学校に行く為に家を出る。今日はなのはちゃんとは会わなかった。一人で登校をした。

学校に着き、自分の教室に入り、席に着く。

いつもなら、元気な声で挨拶が来るのに今日はなぜかよそよそしい。

あと、なんか怯えている？どうしてだろうなと考えていると、雫ちゃんがいつものように挨拶をしてきて私も挨拶を返す。

「おはよう！つばさ！」

「雫ちゃん、おはよう。ねえ、なんか他のみんなが私に対してよそよそしい感じがするけどなんで？」

「あー、昨日のドッジボールの事覚えてないの？」

「顔面でキャッチした後から覚えてないよ」

「そうなの？あの後ね、つばさが…」

雫ちゃんが話そうとしてキンコーンカーンコーンと学校中に響くチャイムが鳴る。

そして丁度よく夕菜先生も来て雫ちゃんは席に戻り、話が聞けなくなってしまった。

残念に思ったが、まあ良いか次の時間の休憩にでも聞けば。

その後、休憩時間に聞こうと雫ちゃんの所に行こうとしたら先生に用事を頼まれたり、今度は雫ちゃんに用事を頼んだりして、中々みんなが私によそよそしい訳を聞けなかった。

でも時間が経つに連れてみんなの態度は普通になっていき、別によそよそしくなった事は気にしなくなった。

でも何人かはまだよそよそしいというか変なものを見るような感じだったけど。

そしてそのまま学校が終わり、雫ちゃん達と一緒に遊びながら帰って、夕飯を食べて今日も一日が終わった。

なのはちゃん達は朝早くに魔法の練習をすることをメールで知らせてくれて、私も一緒に魔法の練習をする事をメールで伝える。

暫くしてなのはちゃんからのメールが返ってきて近くの公園で練

習をするとの事。

その後、何回かメールをする。

なのはちゃんとメールが終わって思ってた事がある。

念話があるんだからそつちでやればよかったんじゃない、と。

携帯のアラームをいつもより早い時間に設定してベッドに入る。

そつといえばかなえちゃんに朝早く、公園に行く事を伝えた方がいいのかなと思い、明日の朝でも大丈夫だよねと考えながら布団を被り、目をとじる。

第6話（後書き）

少し、遅くなりました。

なんか全然話が進まないなあ。

とりあえず読んでいただき、ありがとうございました。

第7話

朝、私はいつもよりも早い時間に起きた。今日からなのはちゃんと一緒にユーノから魔法を教えてもらうからだ。

顔を洗う為に一階に下りるとトイレから出てきたかなえちゃんと合った。

「おはよう。今日は早いね、どうしたの？」

私は挨拶を声を出さずに返して、かなえちゃんに公園に行く事を伝える為の携帯や紙とペンを持ってない事に気がつき、どうにかジエスチャーで伝えようとするその前に「今日は早めに学校に行くんだ」と少し違う事をかなえちゃんは云う。

学校に行くってそれにしても早すぎでしょとも思ったが私はまあ良いかと思い、こくんと頷いとく。

「そっか、なら気をつけていきなよ。この頃、物騒になってきたから。朝ご飯はどうする？食べていくならすぐに作るよ？」

首をふるふると横に振って朝ご飯はいらない事を伝える。

「でも、朝ご飯はちゃんと食べないと。どっかのコンビニとかで買って食べてね。一応、お金は置いていくよ。」

ありがとうと声を出さずに伝えると、かなえちゃんは徹夜でまたゲームをやっていたのか「よしっ、今度こそアイツを倒してやる！」と意気込んだ後、かなえちゃんが部屋に戻って行く。

私はそういえばまだ顔を洗ってないなと思い出し、顔を洗い、歯磨きもした後、着替えるために自分の部屋に戻る。

学校の用意もして、忘れ物も無さそうなので部屋を出る。途中でリビングのテーブルにかなえちゃんが用意した千円札を財布に入れる。

千円の傍に置いてあった紙には「ちやんとご飯は食べるんだぞー。気をつけていつてらっしゃい。今日の夕飯はハンバーグの予定」とかなえちゃんの字で書いてあり、ほかほかのハンバーグの絵も書いてあった。

私はそれを見て今日の夕飯はハンバーグかと思い、少し夕飯が待ち遠しくなった。

今日は良い日になりそうだな。

玄関に着いて靴を履き、扉を開いて声を出さずにいつてきますと云って家を出て、なのはちゃんとの待ち合わせ場所の公園へと急いだ。

公園にはすでになのはちゃんとユーノがいて、念話で話す。

（おはよう、なのはちゃん、ユーノ。もう始まってるの？魔法の練習）

「おはよう、つばさちゃん！ううん、まだだよ。わたし達も今着いたばかりだから」

「おはようございます、つばささん。まだつばささんには僕たちの魔法の事を教えていないので、まずはその事を簡単に教えますね」

（ありがとう。そういえば君、何歳なの？）

「ユーノ君はわたし達と同じ歳だよ」

（へー、そうなんだ。なら敬語じゃなくてもいいよ。気軽に話してね）

「うん、わかった」

（ちょっと話がずれちゃったね。…では、ユーノ先生、魔法の事を教えて下さい）

「僕達が使う魔法は…」

ユーノが話し出す魔法は、私が思っている魔法とは少し違うようで、何か難しいものだった。

魔法使いは魔導師とも云われていて、魔導師が持つ、魔力の源、

リンカーコアが必要らしい。

そのリンカーコアで大気中の魔力を取り入れて、蓄積し、外部に魔力を放出するそうだ。

魔法を出すには理数系の知識が必要でもあるらしく、魔法の構築や制御には重要みたいな事を云っていた。……あまり意味が分からなかったけど。

それを聞いて、私は魔法の習得は諦める事にした。

なにしろ私は文系で、理数系は嫌いで苦手だ。……なのはちゃんほど算数とかが得意ではないのです。

（なるほど、私は魔導師になれない事が分かりました。……なのはちゃん、ジュエルシード探し頑張ってね！応援してるから！！）

「えっ！つばさちゃん、どうして？」

（私はなのはちゃんとは違い、文系の人なのです。……だから無理です）

「頑張れば大丈夫だよ！一緒に頑張ろう？」

（……文系と理数系との間にはふっかい溝があるのだよ。なのはちゃん）

私は少し遠くを見ながらそう云うと、なのはちゃんはまだ私と一緒に魔法を習う事を諦めきれない様子だったけど、私がやらないと

決めた事が分かったのか、渋々なのはちゃん一人でユーノから魔法を習う。

「ごめんよ、なのはちゃん。出来るだけ魔法以外の事で助けるから、許しておくれ……。」

そして私は暫くの間、なのはちゃんの魔法の練習をベンチに座りながら見ていたら、早起きしたせい、少しうとうとしてきた。

「つばさちゃん、起きて。魔法の練習は終わったよ」

私はいつの間にか、というかやっぱり眠っていたらしく、なのはちゃんに起こされた。

「おはようつばさちゃん！」

なのはちゃんから二回目の挨拶を貰いながら、私は大きな欠伸をして、腕を上大きく伸ばすと肩らへんからコキッと音がした。そして私も二度目の朝の挨拶を返す。

「わたしはもう帰るね、ユーノ君の散歩だって云って来たから。そうだ！一緒に朝ご飯食べない？」

（うーん、今日はいいや。また今度食べに行くね）

「えー、前はよく一緒にご飯を食べてたりしたよね？この頃は一緒に遊んだりもしてくれないし……」

（それはそうだけど。学校の友達の約束とかもあるし、それに今日のはかなえちゃんが朝ご飯を作ってくれてるから今日は無理なんだ。……ごめんね）

苦し紛れにそう云ってしまふ。

ごめんなさい、嘘ついちゃって、と申し訳なく思いながらも、なのはちゃんにはうまく騙せれたようだ。

なのはちゃんはとても残念そうにしている、少し拗ねているような感じがした。

機嫌を直すためなのはちゃんとは今日学校が終わったら一緒に遊びに行く予定を約束して、少しは機嫌がよくなったかな？

どうしてこんな嘘を吐いた訳は少し、一人で居たい気分だったからだ。

さっき、うたた寝していた時に夢を見ていて、その夢が思い出せそうで思い出せないという、もやもやした変な感じがして少しの間だけ一人で居たいな、となんとなく思ったからだ。

とりあえず、なのはちゃんと途中まで一緒に帰り、朝ご飯を買うためにコンビニへと向う。そして公園のベンチで空を見ながらおにぎりを食べた後、学校に行った。

今日の放課後、ジュエルシード探しと云う名目で色々歩き回り、休憩と云って、翠屋とは違うお店でお茶をしたりとした。

……私のおごりで。

……少し、財布が軽くなりました。

第7話（後書き）

少し更新が遅れました。すみません。

魔法の事はN a n o h a w i k iを使いました。

ほとんどそのままですが。

何かおかしい部分があったら教えてください。

第8話

夜の学校は不気味だ。

いつもなら生徒や先生達が居て賑やかで明るいのに、夜になるととても暗く辺りはシーンと静まり返っている。

本当にオバケとかが出そうな雰囲気だ。

私はユーノと出会い、なのはちゃんが魔法少女になった時からいつもの様にジュエルシード探しをしていると、ユーノが近くにジュエルシードが暴走しそうになっていると云い、その場所に行ってみるとそこは私が通っている小学校でした。

（夜の学校って不気味だね。ねえユーノ、本当にここにジュエルシードがあるの？）

「うん、ここにあるよ。もうすぐ発動しそうな感じのジュエルシードがあるんだ。」

（そうなの？でも私はそんな感じしなかったけどなあ。一応この学校に今日も通ってたけど。それに一度ユーノもここに来た事あったよね？）

「僕の魔法でジュエルシードを見つけられるのは発動しかけの時か、もうすでに発動して、暴走を起こしてる時にしか分からないんだ。だから待機状態のものはなかなか見つけれなくて…」

ユーノはそう云うと落ち込んだのか、項垂れていた。私はなんと

か励まそうと思っではいるがどう云えばいいのか分からないので、とりあえず適当に浮かんだ言葉を念話で伝える。

（そうなんだ。でもそんなに落ち込まなくてもいいと思うけど？ユーノが居なかったらジュエルシード探しも上手く出来なくて大変な事になっていたかも知れないんだから。ねえ、なのはちゃん？……あれ？）

「えっ、何？つばさちゃん」

（ユーノが居てくれてとっても助かるよねって話）

「うん、そうだよ。ユーノ君はとってもすごいよね！」

「なのは、大丈夫？顔色が悪いよ？」

「だいじょうぶだよ？うん、だいじょうぶ」

ネガティブなユーノを励まそうとしたが私だけじゃ無理だろうと思い、一緒にジュエルシードを探していたなのはちゃんにもユーノに励ましの言葉をかけて貰おうと横を向いたら居なかった。

どうしていないんだ？と思い、後ろの方をみたらなのはちゃんが固まっていて、自分に云い聞かせる様に大丈夫と云っている。

なんでだろうと思ったがすぐに分かった。

そういえばなのはちゃんは幽霊とかダメだったなあ。

私はなのはちゃんの右手を掴み、一緒に夜の学校の中を歩く。

(こうすれば、少しは怖くないよね?)

「うん、ありがとう。つばさちゃん」

余程怖かったのか、なのはちゃんは右手で私の左手をしっかりと掴み、身体をくっつけてきて少し歩きづらい。

なのはちゃんと手を繋ぐのも久しぶりだなと思っていたとなのはちゃんが話しかけてきた。

「つばさちゃんは怖くないの?」

(怖いって夜の学校が?)

「うん」

(何回も夜の学校を来た事があるからなれちゃった。ユーノ、ジュエルシードがある場所はこっちであってるの?)

「うん、こっちにもう少しで発動しそうなジュエルシードがあるよ」

ジュエルシードがあるという場所はとうやら理科室方面らしい。

それにしてもユーノ、なんで学校の中に入ってから私の肩に乗っているんだろう。入るまでは自分で歩いていたのに。

「えっ、なんで何回も夜の学校に来てるの？」

（中に入るときに窓から入ったよね。そこね、一回友達と肝試しすることになって、友達がその窓にちよつと細工をして鍵を掛けなくしたんだ。それで修理されずにそのままなんだ。あとは何回か学校に忘れ物した友達と一緒に来た事があるよ）

肝試しの時の友達は何夜君と雫ちゃん和他二名の五人だ。

その時はほとんど何事も無かった。

そして忘れ物した友達というのは雫ちゃんと夕菜さんだ。

夕菜さんはなのはちゃんと同じように私に引っ付いてきたけど、物音がするたびに叫びながら私に抱き付いてきて、苦しかった。

雫ちゃんはテレビ番組で怖い話を見ていたらしく、怖いから一緒に来て欲しかったらしい。引っ付いては来なかったけど、ぎゅっと手を握りしめてきて手が少し痛かったのを覚えている。

ジュエルシードの場所に向って歩いていると、空気が何か変わったような変な感じがした。

「ジュエルシードの暴走体が来るよ！気をつけて！」

ユーノはそう云うと同時に結界を張る。そして理科室のドアを大

きな音とともに壊しながら出てきたのは隣のクラスの先生が名前を付けて私達の学年では半臓君と呼ばれている人体模型でした。

その半臓がものすごい勢いで私達の方に向って来る。

それもプロの短距離走の選手みたいに綺麗な動きで。

私達は回れ右をして半臓から逃げる。なにあれ、ものすごく不気味で怖いんですけど。

（ねえ、ユーノ！無機物にもジュエルシードってつくものなの！？）

「分からないけど。とりあえず早くジュエルシードを封印しないと！なのは！！」

「無理だよ！怖いよ！」

「でも、封印しないとずっと追いかけられるよ！」

私は少し後ろを見ると、私と手を繋いでいるなのはちゃんが必死に走っていて、その後ろでは完璧なフォームでものすごいスピードで走って来る半臓。

もうすぐ私達に追い付きそうだった。そうだね、怖いよねえ、普通は。

……さて、どうしようと考えていたら、なのはちゃんは私と繋いでいた手を離し、足を止め、いつの間にか変身をして杖になっていたレイジングハートを走って来る半臓に向けていた。

「シュート!」

なのはちゃんがそう云うとピンク色の数個の球体が半臓に向ってあたる。と思っていたがあたらなかった。

何でだろうと思ってなのはちゃんを見ると納得。そりゃ、目を瞑ってればあたらないうね。

「ちゃんと目を開けて相手を見ないとあたらないう!なのは!」

「そんな事云つても、怖いよ!」

「なのは!危ない!」

ユーノはなのはの側に行き、サポートをしようとしたが半臓はすぐ近くまで来ていてなのはちゃんに突進しようとしている。

私はまた、どうしようと考えていたら半臓は何故か近くに居たなのはちゃんは素通りで私の方に突進してきた。

(なんでこっちにくるのー!?!?)

私はまた半臓と鬼ごっこをする破目になった。

私と半臓との鬼ごっこは思ったよりも早めに終わる。私の体力切れで。

もうどうでもいいやと思い、立ち止まる事にしたからだ。

私が止まると半臓は急に止まらなかったのか壁にぶち当たり、半臓が壁に減り込んだ。

そのまんま減り込んでいて欲しかったけど半臓は出てきて、また綺麗なフォームで私に突進して来る。

それをどこか他人事の様に見ていて、ぶつかるなと思った瞬間、灰色の光が半臓を吹っ飛ばした。

私は何がなんだか分からなかったが、後ろからはちゃんとユニノが追いつてきた。

「はあ、はあ。つばさちゃん、はあ。大丈夫だった？」

（うん、大丈夫だけど。なのはちゃんの方が大丈夫？）

「なんとか、はあ、大丈夫、だよ？」

本当に大丈夫なのかな？と思っていたと何処からか、不機嫌そうな少年の声が聞こえてきた。

《おい、さっさとジュエルシードを封印しろよ。白いの》

「「えっ!?!」」

《聞こえているんだろ?ならさっさと封印しろ。動物でも白い方でもいいから》

声の元を辿ると私の胸辺りから聞こえてきていて見て見ると、首からぶら下げている携帯のストラップから声が出てきていて、そのストラップが微妙に動いている様だった。

それは去年の夏に預かっていた黒と白のまだら模様の宝石をストラップにしたもので、あの子はこれをデバイスだって事を知っているのかな?そう云えばあの子の名前なんだったっけ?と失礼で場違いな事を考える。

《せっかくオレが封印しやすいようにやっただからさっさと封印しろよ。発動しても知らんぞ》

ストラップの言葉で半臓の事を思い出す。

半臓が吹き飛んだ方を見ると、半臓は無残に散らばっていて、ジュエルシードが半臓の残骸の少し上に浮かんでいた。

「とりあえず、なのは封印を」

なのはちゃんはユーノの云う通りに、とりあえずジュエルシードの封印をする。

《封印したなら、さつさと家に帰るんだな。子供がこんな時間にくるついていたら捕まるぞ》

（そうだね。なのはちゃん、ユーノ、早く帰ろう？）

「いや、それよりもつばさ。何でそんなに普通に帰ろうとしてるの？！」

（それもそうだね。この半臓を片付けてからにした方がいいよね。でも壁の方は魔法で何とかなるの？）

「つばさちゃん、そう云う事じゃなくてね。あと、はんぞうって誰？」

あの後には半臓と壁はそのままにして置いて家に帰った。

ごめんよ、半臓。成仏してね。

そして私達はもう遅いからと云う事でルドラの事はまた明日の事。ルドラとはストラップのデバイスの事で、自己紹介は名前だけだった。

明日は学校が休みで土郎さんが監督をやっている少年サッカーの試合だから一緒に応援しない？と私も誘われていたからその時の合間にルドラが話すと云う。

だからさつさと家に帰って休めとの事。なので私はなのはちゃん達と一緒に家に帰った。

私が家に着くとかなえちゃんが玄関まで来てくれて「お帰りなさい、あなた。ご飯にする？お風呂にする？それとも、あ・た・し・ハート」と聞いてきたので、私はご飯はもう食べていたので普通にお風呂にすると携帯で伝える。

かなえちゃんは何かごねていたけど私はそのままお風呂に入った。

お風呂から上がったらゼリーを食べて、歯を磨く。その時にはもうかなえちゃんはゲームをやっていてどの選択で落とせるのかとか呟いていた。

今日は少し疲れたから早めに寝ようとベッドに行こうとするが読みかけの漫画があったなと思い出し、その漫画を読む。

するとルドラが声を掛けてきた。

《なあ、オレの事を聞かないのか？》

（え？何で？明日話してくれるんでしょう？なら明日でいいよ）

私はそのままページをめくる。

《……そうか。なら明日話すな》

（うん）

会話はそれだけで私は漫画を読み終わり、ルドラにお休みと云って布団を被る。

目を閉じるとお休みとルドラが声を掛けてくれた。

そういえばルドラってどっかで聞いたことがあるな、と思ったけど眠気には逆らえずにそのまま眠った。

第8話（後書き）

デバイスは少しだけ出ましたね。

多分次の話はルドラ視点も入ります。
名前はいつも適当です。

とりあえず、読んでくれてありがとうございました。

第9話

朝、オレは横で寝ているつばさを見て、溜息を吐きなくなった。

本当は関わる積りなどなかった。そのままつばさの携帯のストラップのままできて、ただ見ているつもりだった。

だけど、無理だった。

危ないと思った時にはもう手を出していた。……手はないけど。

人だったらとても大きな溜息を吐いているのだろうと思う。

多分、助けたのは同情なのだろう。つばさのあの時の事を知っているから。

本当なら機械のオレは感情なんてものはなかったはずなんだ。でも、アイツがオレを改造してこんなものを持たせやがったんだ。

久しぶりにもう遠い昔になくなったアイツを恨む。

「あんたさ、起きてるのか？」

もう一度、大きな溜息を吐きになると、声がした。

声の出所はすぐ近くで、先程まで寝ていたはずのつばさだった。

つばさはいつものにへらへらと笑う少しまぬけな顔と雰囲気じゃない。

つばさは布団を退かしながらオレに向かい、殺気を放ち、睨んでいて、全然別人みたいで驚く。だがつばさは時々、別人みたいになることを知っていたので、それ程は驚かなかった。

それに声の方は出ないはずだが元々は言葉が話せないだけで声は普通に出るはずだしな。

オレは言葉を返す。

《ああ、起きてるぞ。…何か用か？あと、お前はブラックの方で合ってるか？》

「かなえみたく、あたしを色で呼ぶな。それに用があるからあんたに話してるんだ」

《オレはお前の名前なんか知らないぞ。多分、かなえって奴もな。》

その言葉が意外だったのか少しの間キョトンとし、またオレを睨んできた。

「あたしはツバキだ。あたし達の間ではそう呼ばれている。それで、あんたの用はつばさのあの時の事を知っているかどうかだ」

《あの時の事ってのはもしかして馬鹿な大人達の喧嘩の事か？それともその後の馬鹿な大人の事か？》

「っ！知っているんだったら、その事をつばさに教えるなよ。絶対に」

《別に教えるきはないさ。……用はそれだけか？》

「ああ、そうだ。つばさにあの時の事を聞かれても教えるな。……もし教えたら、許さない」

ツバキはオレに睨んだままそう云うとそのまま布団を被り、眠った。

オレはまた溜息を吐きなくなった。

朝、携帯のアラームが鳴っているのを止めて時間を見る。

時間は平日にいつも起きる時間よりも少し遅い時間だった。でも今日は休日だしまだ寝れると思う、また寝ようとする和不機嫌な声が聞こえた。

《さっさと起きろ。今日は約束してたよな、白いのと》

誰だろうと思う、寝ぼけていて回らない頭で考えて思い出す。

……ルドラだっけ？あのストラップの名前は。

（おはよう。……ルドラだったっけ？）

《おはよう。ああ、そうだ。ルドラで合ってる。今日は約束があったよな。白いのと》

（白いの？……なのはちゃんのこと？そういえば約束してたね）

ルドラのおかげで約束を思い出し、ベッドから下りる事にする。

でも一階に下りると、朝っぱらから酔っ払っていたかなえちゃんに少しからまれ、家が出るのが遅れた。

なのはちゃんとの約束の場所に着くとなのはちゃん達はもう着いて、ベンチに座っていた。

それにサッカーの試合も始まるところみたいだった。

なのはちゃん達は私が来た事に気がつくと声を掛けてきた。

「おはよう！つばさちゃん。もうすぐサッカーの試合が始まるころだよ！」

「つばさ、おはよう。少し遅かったじゃない」

「おはよう、つばさちゃん。久しぶりだね」

「おはよう。ごめんね、少し遅れちゃって。そういえば久しぶりだね」

私は三人に見えるように携帯の画面を見せると、なのはちゃんが云う。

「別に気にしなくてもいいよ。こっちに座って一緒に見よ！」

なのはちゃんは隣の空いているところを指差して云ったので、私はそこに座り、土郎さんのチームを応援する。

アリサちゃんとすずかちゃんとはなのはちゃん繋がりで知り合った。

なのはちゃんから聞いた話だとアリサちゃんとすずかちゃんと友達になったきっかけはアリサちゃんがすずかちゃんにいじめをしていてそれを止めるためなのはちゃんがビンタをして、その後喧嘩。

それをすずかちゃんが仲裁して、それから仲良くなったらしい。

……なんか少年漫画みたいだね。拳で分かり合って感じで。

私はなのはちゃんの膝の上に乗っているユーノにも念話で挨拶をする。

（ユーノもおはよう）

（おはよう、つばさ。ところでこのサッカーっていうのはこの世界のスポーツなの？）

（そうだよ。この世界では知らない人はいないぐらいにメジャーなスポーツだよ）

（ユーノ君の世界にはこういうスポーツとかないの？）

（あるよ。でも僕はずっと研究や発掘ばかりであまりやってなかったけど）

（じゃあ、わたしと一緒にだね。スポーツとか身体を動かすのって苦手なんだ）

ユーノとなのはちゃんは念話で盛り上がっている間で土郎さんのチームのゴールキーパーが大活躍していた。

すごいね、あのキーパー。でもゴールに蹴っていた人はものすごく悔しそうで、よく見るとその人は私の友達の和夜君だった。

そういえばこの前助っ人でサッカーの練習試合をするとか云っていたな、と思い出す。

今日は土郎さんのチームの応援なので、悪いけど和夜君の応援は出来ない。でもどんまいと思っとく。

暫くサッカーを見ていたけど、思い出した。

（おい、ルドラ。そいえばなんで君はこの世界にいるんだっけ？）

（《よく思い出したな。オレの事、忘れられていると思っていたが》
《》）

（おい、ルドラも念話使えたんだ。うん、今思い出した）

（《やっぱり、忘れていたか。それに当たり前だ。何しろオレはそこいらにあるデバイスよりも優れているからな》）

なのはちゃん達も私がルドラに話しかけたので昨日の事を思い出したのかルドラに話しかけていた。

サッカーの方は土郎さんのチームが1点取っていた。和夜君には珍しく、とても悔しそうにしている。

（ルドラさんはレイジングハートよりも言葉とか普通に喋っているよね）

（《そうか？それよりも昨日オレに聞けなかった事を聞いてもいいぞ》）

（なんでルドラはそんなに偉そうなんですか？）

（《それはオレが優秀だからです》）

ユーノは少し考えていたのか私の携帯のストラップ、ルドラを見

ていて、少ししたらユーノがルドラに質問をした。

（ルドラはずっとこの世界にいたんですか？）

（《いや、元々オレはこの世界にはいなかった。ただある時にどう
いう訳か知らないがこの世界にたどり着いて、ここにいる。偶然に
な》）

（そうですか。前にいた世界は何処だったんですか？）

（《多分だが、お前と同じ所かもな。それと今はここが気に入って
いるから戻る気もないし》）

ルドラがここを気に入っていると云ってくれて、少し嬉しいと思
っている少し気になる事が。

（ねえ、ルドラはなんで今まで黙っていたの？）

（《なんとなくだ》）

（ふん、そうなんだ。でも今は話してるよね？）

（《そりやそうだろ。お前、目の前で襲われて死にそうになってい
るのを黙って見てられるのか？……と云ってもオレが起動できたの
はつい最近だけだな》）

（へ？そうなの？）

（《ああ、ちょっと故障しててな。魔力不足で自動修復も出来ない状態だったけど、お前の魔力を使ってどうにか修復出来る様になったんだ》）

へへ、すごいなと思っていて気がつく。

勝手に私の魔力を使ったんだ。まあ、いいけどさ。

サッカーは土郎さんのチームが2点目を取っていて、和夜君がいるチームは負けている。前半戦が終わったところだった。

サッカーの後半戦が始まりそんな時に私がいる事に気がついたのか、和夜君がこっちに来た。

「つばさ、来てたのか？しかも俺の敵チームの応援なんて。絶望した！」

「冗談交じりで笑いながらそう云ってきた。」

「つばさ、知り合いなの？」

アリサちゃん聞いてきて、そういえば和夜君の事知らなかったっけと思いながら、携帯で文字を打とうとしたら目隠しをされて打てなくなった。

びっくりして慌てて後ろを見たら、雫ちゃんがそこにいた。

「やつほー、つばさ。あと和夜、助っ人に来たよ。負けてるんだって?」

「ああ、2点差で負けてる。負けたら焼肉が遠くなる一方だ」

和夜君と雫ちゃんは二人でサッカーの試合の事を話していて、この試合に勝てたら焼肉食い放題の約束らしい。

で、負けそうだから雫ちゃんを呼んだ。雫ちゃんも運動神経良いしね。

目隠しがなくなったので携帯で文字を打つ。そしてなのはちゃん達に見えるように画面を見せた。

「この二人は私のクラスメイトで友達だよ。今来た子が川合雫ちゃん、サッカーに出ていたのが青井和夜君」

「前に云っていたつばさちゃんのお友達なんだ」

なのはちゃんがそう呟くと、サッカーの試合の話は終わったのか二人はこっちに来ていて、私を真ん中にして両腕をガッチリと捕まえていた。

「初めまして、つばさの大親友の川合雫と、」

「青井和夜です」

その行動になのはちゃん達はびっくりしていたがとりあえず自己

紹介をする事にしてみたいだ。

「つばさちゃんとは昔からの大親友の高町なのはです」

「アリサ・バニングスよ」

「初めまして、月村すずかです」

「悪いけど、もうすぐ後半戦が始まるからすぐに行かなきゃいけないんだ。それと、つばさを少し借りるね」

栗ちゃんはなのはちゃん達の自己紹介を聞くとそのまま私を自分のチームの所に引き摺って行った。

どうやらサッカーの後半戦には私が出る事になりました。

……応援していたチームじゃない方のチームで。

第9話（後書き）

題名少し変えました。なんとなく。
また変わるかも知れません。

何か無駄に長いです。

もっと文才が欲しいと切実に願います。

ありがとうございました。

第10話

何故か私もサッカーの後半戦に出る事に。

携帯はなのはちゃん達がいる場所であり、意思疎通できる物はノートとペン。

それで何とか出たかないと伝えただけど、無理でした。

出てくれる代わりに次の給食で出てくるゼリーとか私の好きな食べ物してくれると云う事に。そして勝てたら算数とかの宿題のノートを写させてくれるとの事。

それを聞いて私は俄然、やる気が出てきました。

サッカーの試合が終わり、結果は和夜君と雫ちゃんのプレーにより2対2の同点で、土郎さんのチームには勝てなかった。

……残念。でも給食の時間が楽しみです。

焼肉食べ放題の方は監督さんが頑張ってくれたご褒美に連れてってくれるそうです。

でも、私が出た意味あるのかな？とも思ったけど、一応1点はゴールに入れたので私も今日の夜の焼肉食べ放題に着いて行く事に。

……かなえちゃんにこの事伝えとかなきゃね。

試合が終わると、私達のチームは一時退散でその後に焼肉食べ放題だけど、土郎さんのチームはこれから翠屋で打ち上げみたいで私も誘われたけど敵チームにいたので行くのは無理となのはちゃん達に伝え、そのままなのはちゃんとは別れた。その後は雫ちゃん達に誘われたので一緒に遊ぶ事になった。

お昼ご飯を雫ちゃんの家で食べてその後、雫ちゃん達と遊んでいただけ疲れたので一旦、みんなで自分たちの家に帰る事になった。

その帰り道の途中に野良猫が私の方にきてにゃ〜と鳴き、甘える様に足に擦り付いてきた。

私は可愛いなあと思いながら雫ちゃんのお母さんから貰った煮干しをポケットから取り出し、封を空け、白い毛並みの猫にあげる。

猫は美味しそうに食べてくれて煮干しを貰って良かったなあと思っ
ているとルドラが話し掛けてきた。

《猫が好きなのか？》

（どうしたの急に？……まあ好きだよ。猫ってかわいいよね。犬も好きだけど、かわいいのはほとんど好きだよ。かわいいは正義だよ
ね！）

《確かに、かわいいのはいいよな。だけどお前がかわいいもの好き

とは思わなかったな。部屋がシンプルで人形とかあまり無かったし》

ああ、確かに私の部屋は殺風景だよねと自分の部屋を思う。

ベッドに本立てと机、あと小さいテレビだけ。部屋に入って見える家具はそれぐらいと、友達から貰ったぬいぐるみだけだしね。服は押入れの中にあるし、色は青や緑といった寒色系だっけ？が多いもんね。

（でも、私も女の子だからかわいいのは好きだよ？）

《女の子は木とかに登るのか？》

（登る子もいるよ。雫ちゃんも登ってたじゃん）

《そういえばそうだったな。だが普通は登らないぞ。普通は》

煮干しをあげながら白猫を撫で、ルドラと話をしていると、突然グラグラと地面が揺れた。

地震かと思ったが木の根っこの部分が出てきたりして、さっき木に登って木が怒ってるの！？と一瞬思い、突然横から灰色の光が出たと思うとそれに押されたような感覚がして、そこから数メートルぐらいの所まで転ばされた。

《おい、大丈夫か？急すぎて加減が分からなくてな》

（ルドラがやったの？……ものすごく痛かったんだけど）

《悪かったな。でも死ぬよりはいいだろ？》

どう云う事だろうと思い、周りを見てみると突然木が無かった場所に木が立っていて、その木の所為で建物が崩れ、瓦礫が沢山落ちていた。

（ねえ、何が起こったの？）

《ジュエルシードによって起こされたんだろう。人の願いだろうな、この場合は》

（こんなにも酷くなるの？何を願ったんだろう）

《まだいい方だと思うぞ。下手したらこの世界が無くなるしな。願いは知らん。例え願ったとしても間違つて叶えるからな、今のジュエルシードは》

（……そうなんだ）

私は少し落ち着かせるために一回深呼吸をして、もう一回周りを見る。

車がひっくり返っていたり、木の枝と枝の間に自転車があったり、家が半壊している物もあった。

そして気がつく、人がいない事に。

私はユーノが結界を張ったんだと思い、先程までいた場所を見ると、大きなコンクリートの瓦礫が落ちていた。

ルドラはこれが落ちてくるのが分かったから私の魔力で押したんだ。

大きな瓦礫を暫く見ていると赤いモノがあると気づく。

そういえばさっきまで私、何していたっけ？

そう、白猫に煮干しをあげていて……。

私は慌てて大きな瓦礫の所によると、先程まで煮干しをあげて、撫でていた白い猫はもう既にいなかった。

白かった毛並みではなくて、煤がついたのか少し黒い部分もあるが大部分は血の赤色になっていた。その上、押し潰されているからなのか血以外の液体もあるように見えた。

それを見て私は気持ちが悪くなった。その後にはもうあのかわいかった白猫はもういないんだなと思い、なんか胸にポツカリと穴が開いた感じになった。

そのまま、ぼーと血だまりを見ているとズキッと頭が痛くなり、何かが過ぎる。

そう、いつもの夢の続きだ。いつもは途中で目が覚めてしまう、その続き。

真っ赤な血の中に横たわる、あの子。

周りの大人たちはそこから逃げたりとわあーわあーと騒いだりしている。バアーン！大きな音が鳴ると女性が倒れるのを視界の端で見た。

私はあの子、そう、ディラン君だ。が、何かを云っている。

先程まで煩いほどに音は聞こえていたのに何故か今は何も聞こえず、ズキズキと頭が痛いし、意識もおぼろげになってくる。

景色が変わって薄暗い部屋になった。

そこで誰かが寝ていた。その誰かは大人の女性で知っている人だろうけど、思い出せない。

女性が寝ている向こう側には扉があり、開いていて、そこから明かりが入ってきている。

扉の所には男性が一人立っていて、その人も知っているはずなのに、誰だか思い出せない。

思い出すなと誰かが云う。誰だろう。

その声は知っているような気がする。

前はよく聞いていたような……………誰だったっけ？

でも、思い出したい。だけど、思い出したくない。

全然違う気持ちかせめぎあって、何だかよくわからないや。

つばさが猫の死骸を見て固まっている。

無理もないだろう。先程まで可愛がっていた猫が死んでしまったのだから。

とりあえず、ずっとここにいるのは駄目だと思い声を掛ける。

《おい、つばさ。何時まで見ているんだ。さっさと行くぞ》

声を掛けるが聞こえていないのかまだ見ているが何だか様子がおかしい。

つばさの顔色がどんどん青白くなっていき、息も荒い。

《大丈夫か！？おい！つばさ？！》

（だい、じょうぶ、だよ。ちょっと気分が悪くなったただけだから）

つばさは大丈夫だと云うが全然大丈夫そうには見えない。

だが、つばさは大きく深呼吸をして息を整えると、まだ顔色は悪いが、いつもの調子に戻ったようだった。

（お墓、作らないとね。でも、どうやってこれをどこかそうか？）

《……上の瓦礫を壊せばいいんじゃないか？》

（どうやって？）

《オレがサポートしてやる。まず、人差し指を瓦礫に指せ、そして指に魔力を溜め込むように集中して、それを撃つ》

つばさの指には灰色の光がたまる。

どちらかといえば銀色に近いみたいだが、その光が瓦礫を粉々にした。

思っではいたがつばさは白い子よりも魔力がある。

そのおかげで自動修復できるようにはなったが、まだ完全には直ってはいない。

（おお、霊丸だ。私も出来るようになったんだね！）

《……なんだ？そのレイガンってのは？あとそれが出来たのはオレのおかげだろうが。オレがいなかったらできないんだぞ？》

（幽白だよ。後で教えてあげるね。それに分かってるよ、ありがとう。さつさと猫のお墓作って、なのはちゃん達のところにいこっか？）

つばさはそう云うと猫の死骸を何とか地面から剥がし、近くの小さな公園の木の下に埋めて手を合わせていた。

それにしても異常だ。

なんであの死骸を見ても普通のままでいられるんだ？そんな事を思っていると、つばさが聞いてくる。

（ルドラ、なのはちゃん達は何処にいますか？）

《さあな、まだ完全にオレは直っていないから探知魔法はできないからな。だが大体分かるぞ。アイツ、魔力が強いからな。それを辿ればなんとかなるだろ》

（へえ）。そうなんだ）

そんなやり取りをしていると、ピンク色の線みたいなのが多数飛んでいき、そして暫くすると今度は線の様ではなく砲撃と呼べるような太いピンク色が飛んでいく。

その砲撃は一際大きい木に当たると他の木も無くなっていた。

そのピンクの砲撃は魔力の色から白い子どもの物だとわかる。

（これ、なのはちゃんがやったんだね。すごいね。なのはちゃん）

《……ああ、そうだな》

つばさの呑気な言葉を返して思う。

つばさも異常だが、あの白い子も魔法に関しては異常だ。

あの子のデバイスのおかげかもしれないがこんな短期間であの魔法が使えるとは……。

……この世界にもし、オレ達の世界みたいな魔法文化があつて、そして大人になったらどんな魔導師になるのだろうか？

オレとつばさは白い子とフェレットと合流すると白い子は落ち込んでいた。

何でも、ジュエルシードを持っているかもしれない人を分かつてはいたが気のせいだと思い、そのまま放置していて、街が所々壊したのは自分の所為だと思っっているそうだ。

責任感、強すぎだろう。しかも、ジュエルシード探しはお手伝い気分ではなく、今度は自分の意思でやるとつばさに云っていた。

……この世界の子供はこんなにもしっかりしているのか？確かまだ二桁の歳にもなっていない筈だよな？

……この世界の子供の精神年齢は異常だ。

つばさはその後、家に帰ってお風呂に入ると焼肉食べ放題に出かけていった。

あの猫の死骸を見た後にだ。普通は肉、食べられなくなるだろ、普通。

その事を云ったら。

（思い出させないでよ、せっかく忘れていたのに。まあ、でも少し気持ち悪くはなるけど。ご飯が食べられないほどではないよね。しかも猫の肉じゃないし）

《……お前、神経図太いんだな》

（そうかな？でも人間、多少は図太くなくちゃ生きてられないって、シゲじいとかも云っていたよ？）

《……限度っていうのもあるだろ》

……一番異常な精神を持っていた子どもはつばさでした。

第10話（後書き）

これ、ほとんど原作キャラ出てこないですね

どうしてこうなったんだろう

次は沢山オリキャラと絡めたいなあ。……無理だろうけど

……がんばろう

第11話

つばさの友達の手と和夜で学校の帰り道でふざけながら歩いていると、つばさが転ぶ。

頭を打ったのか、つばさの別人格が出てきた。

「……痛い。これはやりすぎだと思うよ。手」

「ごめん、ごめん！次はちゃんと気をつけるよ」

「後で、つばさに謝ってよ？」

手はつばさの別人格に謝ると、別人格は今度はつばさに謝るように云っている。

こいつは前にオレと話した人格のツバキとは違う人格みたいだ。

つばさとはまた違う笑顔をしていて、爽やか？な感じがする。

「なんかドッジボールに出てきた奴とは全然違う奴みたいだな。その時は喧嘩腰な奴だったけど……」

「それはそうだよ、僕はツバキとは違うからね。初めまして、つばさの副人格の一人のツカサだよ。よろしく、和夜。それと久しぶり、手」

「雫は前にも会った事があるのか？」

「うん、去年の冬頃だったかな？その時にツバキとツカサに会って、つばさが多重人格者だって分かったんだ」

そういえばつばさが携帯を忘れて慌てて家を出て行った事があったな。多分その時に雫に会ったのだ。

それにしても和夜は凄いな多重人格とか普通は慌てたりとかする筈なのに落ち着いている。

やっぱりこの世界の子どもは精神年齢が高いんだな。

……でも、こういう言葉もあるよな、類は友を呼ぶって。つばさも異常に発達しているしな精神。

雫達とツカサは話している間に別れ道になったのか、雫達とは別方向にツカサは歩いていった。だがそっちはつばさの家の方向ではなく、人気の少ない公園だった。

疑問に思っていると声を掛けてきた。

「ルドラ、ここはあんまり人が来ないからお話できるよ？」

《……なんの用だ？》

「僕はツカサ、よろしく。それと用件はつばさの事」

《……ツバキだったけ？そいつにも云ったが、あの事をつばさに云う積もりはないぞ？》

「その事じゃないよ。つばさをよろしくって事。ルドラはつばさが好きなんでしょ？なら死ぬ気で守って欲しいな」

《確かに嫌いではないが、そこまで好きでもないぞ？》

「ううん、好きなはずだよ？だって守ってくれたんだもの。というか守ってね？つばさを傷つけないように……」

そう云ってツカサは笑う。

爽やかな笑顔なのに何故か少し、怖く感じた。

……これは全力でつばさの周りの脅威から守れという事なのだろうか？

《……分かった。とりあえず、今のオレが出来る限りの事でつばさを守る。それでいいだろ？……それにしてもそんなにつばさの事が大好きなんだな》

「うん、それでいいよ。……それはそうだよ、僕達の主人格だしね。それに大好きより、愛していると云って欲しいかな？」

《…………そうですか》

ツカサは愛とまで云ったよ。凄く愛されていますね、つばさ。

ツカサの言葉に呆れていると、すぐ近くからジュエルシードがある事に気がつく。

《ツカサ、近くにジュエルシードがあるが、どうする?》

「そう? 何処にあるか分かる?」

《ちょっと待っつけ。……向かいのベンチの下》

ツカサはジュエルシードをベンチの下から見つけ、ジュエルシードを拾うと声がした。

「その宝石をこちらに渡して下さい」

振り返ると綺麗な長い金髪と赤い目をしたとても綺麗な容姿の女の子がいた。歳はつばさと同じ位だろうか。

「宝石ってこれの事? ……それと、渡さないって云ったら、どうする?」

ツカサはその女の子にジュエルシードを見せるようにして挑発めいた事を笑いながら云う。

「……力ずくでも奪います」

女の子はそう云うとバリアジャケットになり、色は漆黒でデバース部分の宝玉は金色の斧を持ち、すぐ動けるように構えている。

そしてバリアジャケットは黒いマントに、服の方も黒でどこか水着に似ている。正直、その格好はどうなんだろうと思うような服装だった。

「ふうん。別に渡してもいいけど、渡す代わりに約束して欲しい事があるんだ」

ツカサは無防備なまま女の子の方に近付く。

「これを探している女の子が二人と一匹いるんだ。一人の女の子は白いバリアジャケットを着ているんだけど、その子はとりあえず殺さないようにして欲しいんだ。でもね？もう一人の女の子は僕と同じ姿をしているけど、とっても可愛いんだ。で、その子は傷つけないで欲しいんだ。……約束、してくれるよね？」

「えっ？」

ツカサは女の子に渡そうとジュエルシードを持つ手を女の子の方に向けるが、女の子の方はよくわからないのかきょんとしている。

「これ、いらないの？」

「あっ、いいいますー！」

「そう。なら渡すね。……ちゃんと、僕が云った約束、守ってね？」

「っ！?……はい」

ジュエルシードを女の子の手の平の上に置くと、ツカサは女の子に背を向け公園を出て行く。

それにしても、何この人格、怖い。

爽やかな笑顔なのに時々怖く感じて、敵じゃなくて良かったと思う。

こつこつ奴は何考えているのか分からないから厄介なんだよな。

《いいのか？ 渡しても。つばさも探していた筈だったろ？》

「いいの。あの子の方が強そうだったし、つばさが無事ならそれでいいの。僕はつばさ第一だから他は気にしない」

《……そうですか》

そしてそのままオレ達はつばさの家に帰って行った。

私は何時の間にか家に帰っていた。

雫ちゃん達と久しぶりに一緒に帰っていた筈なんだけど、転んで、その後の記憶が曖昧だ。

最近は記憶がとぶ事が多い。

何か病気かなと思った事もあるけど、身体がだるいとか、そういうのは無いから大丈夫だろうとは思いたい。

一回、かなえちゃんに聞いてみた事があるけど、「ブラックとかが出るんだよ」と訳のわからない事を云ってきたし、まあいっか。考えるの面倒臭くなってきた。

ベッドの上でゴロゴロしているとなのはちゃんからメールが来た。

メールの内容は明日、すずかちゃんの家でお茶会をやるので雫ちゃん達も誘って来ませんかとあった。

とりあえず明日、雫ちゃん達が行けるかどうか分からないから明日になって聞いて分かったら連絡すると返信する。

雫ちゃん達は携帯を持ってないし、電話するにも私、喋れないしね。

それにしてもお茶会が楽しそうだな。

第11話（後書き）

今回は早く更新できました。奇跡ですね！

いつも早く更新できたらいいんですけど……

第12話

私は雫ちゃんと一緒にすずかちゃんの家の前にいます。

「うわぁー！！でっかい家だね！」

雫ちゃんは見たとたんにそう言葉を云って、見上げる。

私も初めてすずかちゃんの家に来たのでその大きさにびっくりして、頷く。

とりあえずチャームを押すとメイドさんが出てきた。

「つばさお嬢様、雫お嬢様ですね。いらっしやいませ。すずかお嬢様からお話を窺っております」

「お、おお嬢様！？……ええっと、ほ、本日はお、お招き頂き、ありがとうございます！」

「くすつ、私は月村家のメイド長を勤めさせて頂いております、ノエルと申します。どうぞ、こちらです」

お嬢様！？私達はそう云われ、しかも綺麗なメイドさんにだよ！に驚いて少し固まったけど、何とか雫ちゃんが慌てて和夜君から云われたとおりにお辞儀をして言葉を返すと、少し笑われた。

ついでにいうと私も慌てて雫ちゃんと一緒にちゃんとお辞儀はした。

ノエルさんに案内されながら歩くと改めてでっかい家だと思う。
本当に迷子になりそうだよ。

私達はキヨロキヨロしながら案内され、なのはちゃん達がいる部屋の前に来てノエルさんに扉を開けて貰う。

そこにはとつても広い部屋で全面ガラス張りの窓、これまた広いお庭が見えている。部屋の真ん中にお洒落なテーブルがあり、そこではちゃん達がお茶を飲んでお喋りをしていた。テーブルの上には美味しそうな色々な種類のクッキーもある。

お嬢様的な空間だね。私達とは世界が全然違うよ……。

それにしても色々な猫が沢山いるね。ここは猫の天国みたいだね。

私達が部屋に入って少し呆けているとなのはちゃんがこっちに来て、声を掛けてくれた。

「つばさちゃん！少し遅かったね？」

「ごめん少し色々あって。遅れてごめんね？」

「別に気にしなくてもいいよ。少し心配しただけだから」

私なのはちゃんに携帯の画面を見せると、すずかちゃんもこっちに来て話す。

「つばさちゃん、雫ちゃん、いらっしやい。急にお茶会に呼んでこ

めんね？」

「うっん、暇だったから別に大丈夫だよ」

「いやいや、ちょーど暇だったから良かったよ？呼んでくれてありがとう、月村、さん？」

「さんはいらないよ。好きなように呼んでね」

「うん、わかったよ。すずか」

「何時まで立って話してるのよ。こっちに座って話せばいいじゃない」

私は携帯で文字を見せて話して、雫ちゃんとすずかちゃんが話をしているとアリサちゃんが一人だけ座っているのが寂しくなったのか膝の上に猫を乗せ背中を撫でながら云う。

私はそれもそうだなと思い、テーブルの所に行こうとするとノエルさんが聞いてきた。

「では、お茶をご用意致しましょう、つばさお嬢様と雫お嬢様は何になさいますか？」

「え、ええっと、おまかせでお願いします」

「同じくおまかせでお願いします」

「かしこまりました」

雫ちゃんがオドオドしながら言葉を返すとノエルさんは落ち着いた様子で部屋を出て行った。

…… 凄いね、本物のメイドさんは。

とりあえず席につくと、アリサちゃんが聞いてきて、雫ちゃんが答える。

「そういえば、もう一人の男の子の和夜、だっけ？はどうしたのよ？」

「本当は来れる筈だったんだけど……。すずかの家には猫が沢山居るからってつばさに聞いたから、来れなくなっただ」

「和夜君って猫が苦手なの？」

なのはちゃんは首を傾げながら疑問を聞き、私が携帯を見せる。

「和夜君は猫、大好きだから絶対に行くって云ってたよ」

「なら何で来られなくなっただのよ？」

「和夜は猫アレルギーなんだよ。猫大好きなのにね。こっちに来る時にごねてたんだ。絶対に行くんだーって」

「猫が俺を呼んでいるーとかも云ってたよ。猫の写真をいっぱい撮ってくるからとか、色々云ったら渋々諦めてたけど」

「だから和夜を引き止めるのに少し時間が掛かってこっちに来るのも遅れたんだよね」

「へえー、そこまで猫が好きなのに可哀想ね……」

「アレルギーなら仕方がないよね……」

「和夜君、そんなに猫が好きだったんだ……」

和夜君が猫が大好きで猫アレルギーだと云う事を話すとアリサちゃんはずかちゃんは猫好きなのに猫アレルギーな事に同情され、なのはちゃんは和夜君が大の猫好きなのに少し驚いたようだった。

……和夜君は本当にここに來たがっていたんだよね。「死ぬ氣か！」って云ったけど「本望だ！」と返されたし。

話をしていると先程のノエルさんとは違う人がお茶を持って來た。

その人は明るくて可愛い系のメイドさんだ。テーブルにお茶を置こうとこちらに來るが猫に追いかけられていたユーノがメイドさんの足元でぐるぐると走っていたら、メイドさんはこけそうになり、お茶が入っていたトレイも落ちそうになるが、とっさにずかちゃんとなのはちゃんがメイドさんを支え、床に落ちそうだったお茶のトレイを掬ちゃんがキャッチ。メイドさんとお茶は三人の活躍により無事でした。

……ていうかユーノ、いたんだ。気づかなかったよ。

私達は今、何故かひろーいお庭に出てそこでおしゃべりをしています。

それと先程のドジっ子のメイドさんはファリンさんといい、ノエルさんの妹だそうです。しかもすずかちゃんの専属メイド。専属つて……

私は子猫を膝の上に置いて撫でる。毛並みがとても良くて触り心地がとっても良くて、猫天国です。

どの猫も毛並みとかが良くて本当にここの猫達は愛されて育てられているのがよく分かるよ。

……ここの猫になつてみたいな。ご飯もおいしそうだし。

雫ちゃんはクッキーを食べながら猫の写真を撮っている。和夜君用の……。

本当に残念だね、この猫天国に来れなくて。

……できれば雫ちゃん、そのデジカメのストラップを持って振らないでほしいな。

猫じゃらしじゃなくて一応精密機械なんだし、それ私の物だったような気がするけど。ちゃんと写真撮ろうね、飽きたのはわかるけど……。

猫と戯れていたけど、写真を撮るのを飽きた雫ちゃんと代わろうと膝の上の猫を退ける。

雫ちゃんが持っていたデジカメを今度は自分が撮ると伝えるとデ

ジカメを渡してくれた。

よし、可愛く猫を撮るぞ！と意気込んでカメラのレンズを猫の方に向ける、とざわりと変な感じがした。

（ユーノ君！つばさちゃん！これって……）

（うん、ジュエルシードが発動しかけてる！！）

（ユーノ、どうする？ここで発動したら、危険だよ？上手くここを離れてジュエルシードのところに行かないと……）

私はなのはちゃん達と顔を見合わせながら念話をする。

その事は他のみんなは気づいてないようで少し、ほっとした。

何かユーノは思いついたのか、なのはちゃんの膝の上から飛び降りて走り出す。

「ユーノ君？……どこに行くの？」

「どうしたのよ。なのは？」

「ユーノ君が何か見つけたみたい。わたし、探してくるね？」

なのはちゃんがそう云ってユーノを追って行こうと席を立ち上がって私は気が付く。

なるほど、そういう作戦か。確かにその方が自然だね。

「大丈夫なの？なのはちゃん」

「私も行くよ」

「つばさ、うちも行くのか？」

「大丈夫だよ。皆はゆつくりしてて」

すずかちゃんが心配して聞いてきて、私も一緒に行く事を伝える。

私も席を立つと雫ちゃんも一緒に行くと言ってきたが、断り、なのはちゃんと一緒に先にジュエルシードのところに行ったユーノを追いかける。

ユーノに追いつき、一緒にジュエルシードのところへと急ぐ。だが発動しそうになり、ユーノがここで暴れると色々大変だからと云い、結界を張る。

一瞬で空気、じゃなくて空間が変わったような感じがした。

結界が張り終わってすぐにジュエルシードが発動する。

発動して出てきたもの、それは大きな猫でした。

……確かあの猫はまだ子どもでまだ小さかったはずだ。でも周り

の木よりも大きくなっていて私は、いや、私達は大きくなった猫を見て呆然とした。

とりあえず、デジカメで撮って置こう。

大きくても何か可愛いし、きっとこんなのもう見られないと思うから。

第12話（後書き）

キャラの口調ってこれで合ってるのか不安です

次はどうしようかと不安です

特に戦う場面が……

不安ばっかですね

でも、頑張りたいと思います

読んでくれてありがとうございます！

第13話

つばさ達が友達の家遊びに行ったらジュエルシードが発動した。

今は発動したジュエルシードの場所に着いていて、そこには樹よりも大きな猫がいた。

つばさ達は啞然としていたが、その間にも猫は呑気に歩いている。

つばさは手に持っていたデジカメのレンズを大きくなった猫に向け、カシャッと写真を撮る音がする。

その音を聞き、まだ固まっていた白い子とフェレットが動き出す。

「あつ、あつ、あつ、あれは……」

「多分、あの猫の大きくなりたいてって云う願いが、正しく叶えられたんじゃないかな、と……」

「そ、そっか」

「でも、このままだと危険だから元に戻さないと……」

「そうだよね、すずかちゃんもこのままだと困っちゃうだろうし」

白い子とフェレットは困惑していたが、とりあえず猫を元に戻す事にしたようだ。

そして、つばさは二人の会話の中にも入らずにまだ猫の写真を撮っている。

《つばさ、何時まで猫を撮っているんだ？》

つばさに呆れて声を掛ける。

声を掛けられたのに気づかないのか返答がない。

もう一度同じ言葉をつばさに掛けてやると反応があった。

（ん、あと一、二枚撮ったら終わろうかな。それにしてもルドラ、今日はこれが初めての会話だね？）

《そうだったか？……それよりも、もう一人の魔導師が来るぞ》

白い子がバリアジャケットを着ようとしたら、大きくなった猫に金色の魔力弾が当たり、猫はよろめき倒れる。

魔力弾の出所を調べてみると少し離れた場所にいるようで、もう一度猫に攻撃をしようとしているのが分かった。

白い子も攻撃が来るのが分かったのか、すぐにバリアジャケット姿になり、猫の方へ飛んで行き、魔力弾の攻撃から猫を守る。

だが、相手は魔力弾を猫の足元に放ち、猫を転ばせて白い子の体勢を崩れさせ、白い子は地面へと下りた。

白い子は攻撃が来た方に構えていると、攻撃をして来た子が樹の

枝に下りる。

その子は魔力の感じからして思ったとおり、つばさのもう一人の副人格と会った子供だった。

……それにしても本当に水着みたいなバリアジャケットだな。

「……ロストログア、ジュエルシード。申し訳ないけど、頂いていきます」

まだ戸惑っていた白い子に黒い子が襲い掛かる。

黒い子はデバイスを斧の形にして足元を狙うが、白い子は靴にピンの羽をはやして上空へと飛ぶ。

黒い子は金色に光斧の魔力刃を白い子に飛ばし、上空へ飛ぶ。白い子は飛ばされた魔力刃をなんとか凌ぐ。

続けて黒い子が白い子に斧を振り下ろすが、レイジングハートで斧を振り下ろされないように受け止めていた。

「何で、何で急に、こんな……」

「答えても……多分、意味がない」

「……っ！」

二人は同時に離れ、白い子は倒れた猫を庇うように。

黒い子は樹の枝の上に。

《Device Form》

《Shooting Mode》

二人はにらみ合い、その場の空気は緊張し、ちょっとした事でこの勝負が終わる事になるだろう、黒い子の圧勝で。

（もふもふしてて、気持ちいい。みんなもやってみなよ）

気が抜けるような声がした。

声の出所は倒れている猫の方で、つばさが猫をもふもふしている。

……とても幸せそうな顔で。その行為と気が抜けた声でその場の空気の緊張感がなくなった。

「つばさ！今はそれどころじゃないって！！」

茂みの中で隠れていたフェレットが出てきてつばさに云う。

（あつ、それもそうだね。猫が大丈夫かどうかという心配な場面だよね）

《……それも違うと思うぞ》

（そうかな？）

つばさは場違いな事を云うと、また猫にもふもふとする。

これから戦いを始めようとしていた二人と他一匹は、もふもふしているつばさに呆氣をとられていた。

少ししたら猫の意識が戻り起き上がろうとしていて、二人と一匹もそれと同時に意識が戻る。

だが少し黒い子の方が早かったのか、すぐに砲撃を打とうとしている。

白い子もそれに気づくが遅く、とつさにシールドを張るがそのまま上空へと吹き飛ばされ、氣を失っているのかそのまま重力に従い落ちていく。

「なのはー!!」

（ルドラー!）

フェレットは吹き飛ばされた白い子を助けようと走り出し、つばさはオレの名を呼ぶとつばさは銀色の光に包まれ、そのまま落ちていく白い子の方へと飛ぶ。

（ふう、危機一髪。秘密の特訓が役に立って良かったよ）

つばさは背中から銀色に輝く大きな翼を広げ、白い子を横抱きにしてフェレットの近くの地面へと降りていく。

……つばさは自分の翼の色は灰色だと思っているみたいだが、オレはどちらかというと銀色だと思う。

（ユーノ。なのはちゃんを少しの間、見ていてね）

つばさは白い子を地面へと寝かしてユーノにそう云うと、猫に攻撃しようとしている黒い子の方へと向かっていく。

（ルドラ。私の魔力は好きなだけ使っていいから後は頑張って攻撃をなんとかしてね！）

《全部オレ任せかよ！？》

（うん！よろしくっ！！）

「えっ、つばさ！？」

フェレットは驚き、つばさの名前を呼ぶが遅く、オレとつばさは猫に攻撃をしようとしていた黒い子の所に着いており、攻撃を何とか防いだ。

いくらオレが有能だからって人使いが荒いな。いや、オレはデバイスだからデバイス使いか。

（おお、腕がしびれるー）

《そりゃ、防いだとしても受けた反動で痺れるだろう。それに電流もあるみたいだし》

それにしてもけっこう戦いなれているな。あの黒い子。

つばさのおかげ？で白い子は気を抜き、その隙に攻撃が当たって気絶をしたが、どちらにしても経験の差で負けるだろう。

つばさは猫をかばうような形でそのまま空中に止まっている。

「……退いて下さい。あなたを攻撃して傷つけたくありません」

（どうして？なのはちゃんの時と同じように攻撃してもいいと思うけど？）

「……あなたには傷つけないと約束をしましたから」

（誰に？）

黒い子はつばさの質問に答えないで、警戒も解かずにそのまま黙る。

律儀な子だな。副人格のツカサだったか？の約束を守っているなんて。

先程の白い子に攻撃する時も謝っていたし、本当はいい子なんだな。

（ふむ、とりあえず猫をどうにかしようか？）

つばさは少しだけ考え事をしていたみたいだったが、猫の方を見てまずはこの問題から片付けることにしたみたいだ。

猫は意識がはつきりと戻っていて、初め見た時と同じように呑気に歩いていた。

（出来るだけ痛くないようにしたいんだけど、なんかいい考えはない？ ルドラとその君）

「えっ？ わ、わたしですか？」

（そうだよ。その美少女さん）

「びっ、美少女？」

（うん、可愛いし、綺麗だし将来が楽しみだよな？）

黒い子は急に話を振られ驚き、美少女、可愛いと云われて顔を赤らめて、固まっていた。

なんかこのままだと話が進まなさそうだ。

《口説くのはそこら辺にしとけ。それと猫の方はどうしても少しばかり痛くなるぞ。まずは猫からジュエルシードを出さなきゃいけな

いし』

（口説いてるつもりはないけど？でもどうしても痛くしちゃうんだ。なら仕方ないか。……ルドラ、よろしく）

《はあ、結局全部オレかよ。……つばさ、オレを猫の方に向ける》

（了解！）

つばさはそのまま携帯のストラップになっているオレをぶら下げながら猫の方へと向ける。

オレは意識を集中する。

これは本来ならつばさがやらなきゃいけない事なんだが仕方がないと思いながらやる。

《霊丸》

オレはつばさ達に聞こえないように呟くと、つばさの魔力の弾を猫に向けて撃つ。

「に”やー！ー！」

銀色の魔力弾が猫の方に向かっていき、猫に当たると悲鳴を上げて倒れる。

すると猫から透き通るような青色の菱形の宝石、ジュエルシード

が出てきた。

続けて、ジュエルシードの封印をすると猫の大きさが元の小さな子猫のサイズに戻る。

つばさは地面に下り、猫の様子を見て眠っているだけだと知ると、ほっと息をついた。

封印したジュエルシードを拾うと黒い子にそれを投げる。

黒い子は突然に投げられたのを驚きながらもきちんとジュエルシードを掌の中に収めると、どうしてと云うようにつばさを見る。

（私を攻撃してこなかったお礼。だからそれを渡すね）

「……いいの？」

つばさはニコニコしながらこくんとうなずくと黒い子はありがとうと呟くと、こちらに背中を向け空へと飛んだ。

「ちょっと、つばさ！…なんでジュエルシードをあの子に渡したのさ！？」

（だから、お礼だよ。手加減もしてくれたみたいだし、あの子に勝てる気もなかったしね）

「だからって！…」

（そんな事よりも他のみんなが心配してるだろうから早く戻らないと）

「そんな事じゃないよ!！」

（少し疲れちゃったんだ。だからこの話は後でゆっく〜りでいいよね）

つばさは白い子の方へ行くと、フェレットが何かうるさく云っているが適当に対応しながら、白い子をおんぶすると気絶して眠っている子猫をどうしようと聞いてきた。

フェレットに持って貰え、と云うと無理との事。まあ、大きさからして無理そうだしな。

そんなやり取りをしてると、遠くの方から声が聞こえてきた。

「お〜い、つばさ! 遅いよ。いつまでイタチを探してるのさ。……
って、なのはどうかしたの?」

いつの間にか結界を解いていたおかげでつばさの友達の手がやってきた。

これで子猫をそのまま放置する事はなくなったな。

雫はつばさがおんぶしている白い子を心配そうに見て、困惑しながら側まで来ると、つばさは携帯で知らせようとしても、白い子をおんぶしていて両手が塞がっているの、つばさは目線で気絶して

いる子猫を見て、雫に苦笑しながら口の動きでよろしくと伝える。

「この子猫を連れて行けばいいんだね。うん！任せました！あつ、イタチもついでに連れて行くね。……じゃあ早く戻ろう、みんな心配してるよ」

雫はそう云うと子猫を大切に片腕に抱きかかえ、片手でガシッとフェレットを掴むと意気揚々と歩いていく。

フェレットは念話で「イタチじゃなくてフェレットなのに……」とか呟いていた。

フェレットもイタチの一種だから間違っではない。けどオレはそれを云わなかった。

つばさ達が戻ってくると、騒然となった。

白い子には魔法の事とかを内緒にすると云う約束をしていたので、つばさはフェレットを白い子と別々で探している途中で気絶している白い子と子猫を発見したと云い、多分子猫が樹に登っていて下りられなくなったようので、それを助けようとして落ちた感じなんじゃ、と嘘の話をした。

白い子が起きると念話で口裏合わせをして一応その場はなんとか乗り切ったようだった。

それにしても疲れた。

大きな樹の件ほどではなかったものの、また自分の修復が伸びたな。

あの件で無理して結界を張った所為で壊れた部分も直さなきゃいけないし、まだジュエルシードもほとんど見つけていないのに、その上あの黒い子の事も気になる。本当、やる事が多いな。

なんかまた問題が出てきそうな予感がするな。……はあ。

第13話（後書き）

前回更新したのがちょうど一ヶ月前

すいません。遅れました

それにしても暑いですね

この前バイト中に熱中症になった人がいるのでみなさん気を付けて
下さいね

水分はこまめに取りましょう

第14話

今日は高町家のみんな、すずかちゃんとお姉さん、そのメイドさんの二人とアリサちゃん、そして私の十一人で近場の温泉の宿で日頃の疲れを取る為にここで泊まる事になりました。

……あつ、ユーノもいるから＋一匹か。それにルドラとレイハさん入れるとさらに＋二機だ。

かなえちゃんはイベントがどうのと云ってこの温泉旅行を辞退した。

そして私は今、一人で旅館の部屋にいる。

本当ならなのはちゃんやすずかちゃん、アリサちゃん達と一緒に温泉へ入るはずだったんだけど、車酔いの後遺症が抜け切れなくて今部屋で休んでいる。

……まさか常備していた酔い止め薬が無くなっていたとは。

なのはちゃん達は一緒に入ろうと云ってくれたけど、なんとなく待たせるのは悪い感じがしたから先に入ってって伝えて、渋々ながらみんな先に入ってくれた。だから今は一人で部屋にいる。

《おい、大丈夫か？》

いや、一人じゃなかった。一人と一機だ。

(うん、大丈夫だよ。心配してくれてありがとう)

《そうか》

ルドラはそう云うとそのまま黙る。

暫くの間ゴロゴロしながら先週の出来事を思い出す。

子猫巨大化事件はなんとか恭也さん達を一応ごまかしたけど多分、何かあった事を分かってるな。その何かは分かってないだろうけどそれでも黙って見守ってる。本当、高町家は凄いなあとつくづく思う。

アリサちゃん達もそうだな。普通なら問いただすだろう。

それよりもどうしよう。なのはちゃんの約束、やぶっちゃた。ユーノと魔法、ジュエルシードの事を話しちゃったよ。雫ちゃんと和夜君に……。

仕方がなかったんだよ。だって、でっかくなった子猫のデジカメの画像を見せちゃって、何とかごまかそうとしたけど。いつの間にか話してたんです……。

ルドラにどうしようと聞いたけど「知らん」って云うし。

唯一の救いは二人とも最初の方は電波の人みたく私を見てたけど、結局ルドラのおかげで分かってもらえて、ジュエルシードを見かけたら場所を教えてくれるみたいな事を云ってくれたしね。本当にいい友達だよ。

でもその事をちゃんと云わないとねなのはちゃんに。……よし、今日云おう。うん、そうしよう。

そういえばユーノ驚いていたなあ。私が空を飛べるようになっていて。

なのはちゃんが空を飛べるようになるのを見て私も飛びたいと思ったんだ。だからルドラに頼んで自分で飛べるように教えてもらった。でも、まだルドラの助けが必要みたいで一人だけだと上手く飛べないんだよねえ。

本当は一人でも飛べるようになったらなのはちゃん達に教えたかったんだけど……。

ゴロゴロしながら色々考えていたらだいぶ具合も良くなってきたし、私も温泉に入りに行こう。

温泉に入る準備も終わり、温泉に入ろうと廊下を歩いていたらなのはちゃん達が前にいて、なんか話しているみたいだ。でも少し様子がおかしい。

アリサちゃんはなんか怒っていて、二人はそれを慰めている。

「何よあれ！昼間からお酒飲んでんじゃないわよ！！」

「アリサちゃん、いろいろな人達がいるんだから仕方がないよ」

「だからって、節度っていうものがあるでしょう！節度ってものがない！！」

「あつ、つばさちゃん。もう大丈夫なの？」

話的内容的に酔っ払いに絡まれたらしく、アリサちゃんが憤慨していて、なのはちゃんがそれを抑えようとしている。っていう感じがな。

少し遠くでそれを見ていたらすずかちゃんが私が来たことに気づいて声を掛けてくれた。

私は携帯で「大丈夫だよ。何かあったの？」と文字を打ち、見せる。

「なのはが酔っ払いの女に絡まれたのよ！」

「そうなの？なのはちゃん大丈夫だった？」

「うん、何も変なことはされなかったよ」

何もされてないとなのはちゃんは苦笑しながら云っていたけど、なんとなく気になったので念話で聞く。

（本当に大丈夫だったの？）

（大丈夫だよ？本当に何もされなかったし……）

（ユーノ、本当に何もされてなかった？）

（えっ？……その人が念話で大人しくしてなさい、見たいな事を云われただけだよ）

ユーノにも聞いてみると、まさか自分にも聞いてくるとは思わなくて少し驚いていたが、何があったか教えてくれた。

（念話で？その人も魔導師なの？）

（よくは分からないけど、あの黒い魔導師の子の関係者だとは思っ
けど）

（ふ〜ん）

何かあったんじゃないかと思っていると、何故か温泉の素晴らしさの話になっていたアリサちゃんが聞いてきた。

「つばさ、これからどうするのよ。わたし達はこれから卓球をしに行くけど、一緒に来る？」

「今からは温泉に入るつもりだよ。その後は考えてない」

「止めときなさいよ。さっきの酔っ払いも温泉に浸かりに行くって

「云ってたし」

「大丈夫、その人も温泉に入っていれば、きっと酔いも覚めるだろうしね」

「そうだといいいんだけどね」

「じゃあ、つばさちゃん。温泉から上がったら一緒に卓球やろう！」

私はなのはちゃんの誘いに笑いながら頷くと、手を振って温泉に入りに行く。

（つて、つばさ！危ないよ。もしかしたら敵かもしれないんだし！）

（大丈夫だよ。相手は私の事知らないかもしれないし、ルドラもいるし、何かあったらちゃんと呼ぶから。じゃあまたね。なのはちゃん、ユーノ）

温泉の方へ行こうとしたら、ユーノが止めてきたがそんな事は気にせずにそのまま温泉に行く。

脱衣所に着く。久しぶりの温泉だーと思っているとルドラが話してきた。

《敵がいるかも知れないのにいいのか？オレは中に入らないぞ。もしかして携帯も持っていく気か？》

（温泉に携帯はダメでしょ。一応、防水の携帯だけど。でも何とかなるよ。他のお客さんとかもいるんだし）

《樂觀的だな》

（そう？まあ、ありがとう）

《……そこ、お礼云うところか？》

私はそう云われ、そうなのかな？と考えながら早々に服を脱ぎ、タオルを持って浴室へと入っていく。

中に入ると結構広かった。

るるん気分です。まずはかけ湯をしてから湯船に入る。ちゃんとかけ湯はしないとね。この前銭湯でしない人を見かけたけどあれはダメだね。

はあ、気持ちいいなあ。と周りを見ていると広いのに珍しくお客さんが少ない。私を入れて五人くらいかな。

暖まってきたので、身体を洗う事にする。

……私は頭から洗う派です。

身体も洗い終わり、露天風呂に入り終わって、また中の湯船に入ろうとドアに手を掛けるとひとりでに開いて驚く。

他のお客さんがドアを開けたみたいで、私がすぐそこにいるとは思っていなく他のお客さんのおばさんも驚いていた。

「あら、ごめんなさい」

おばさんは申し訳なさそうにそう云うと私のお腹辺りを見て眉をしかめる。

私は気にせずにぺこりとお辞儀をするとそのまま中に入る。

先程のおばさんが見ていたであろうお腹を見ると脇腹らへんに少し大きな切り傷があり、他にも小さな傷が胸と背中にも少しだけある。おばさんはそれを見て眉をしかめたのだろう。

この傷はいつ頃付けられたのか私は覚えていない。いや、いつ頃かは分かっている。

去年の夏休み、私が父さんと一緒に旅行に行った時で記憶が抜け落ちている間だろうね。だけど誰にやられたのが全くもって分からない。

……考えていたら頭痛がしてきた。とりあえず、今は温泉を楽しもう。

中に入るとお客さんは露天風呂に入っていた人と湯船に入っている人、そして私になっていた。なんか貸仕切りみたいだなあ。

少しだけ冷えた身体を温めようと湯船に入ろうとしたら、先に入

っていた巨乳のお姉さんの頭にいきなり動物の耳が……。

えっ！と思ってもう一回見たらもう、何もなかった。

気のせいではないはずだ。

ジーとお姉さんの頭らへんを見ていたら、お姉さんと目があった。

「ななっ、なんだい？お譲ちゃん」

少し慌てた様子で引きつった笑顔のお姉さんが聞いてくる。

どう答えようと考えていたが私は喋られないのに気づき、この人にも念話が使えたらなと思って、ん？と何か分かった気がした。

（お姉さんがさっき、なのはちゃんを脅した人なんですか？）

とりあえず、念話をお姉さんにしてみて、お姉さんは驚いた様子でこちらを見る。

私はにこつと笑って湯船に入り、念話でもう一度話してみた。

（初めまして、悠木つばさっています。あの黒いバリアジャケットを着た子は、今いないんですか？）

「なっ！？」

お姉さんはビックリしたのか耳が頭の上に出てきた。

これは犬耳？その耳がピクピクと動いているから本物だ。

「あゝ。あんたがジュエルシードを渡してくれた可笑しな子だね」

お姉さんは少しの間、固まっていたけど落ち着いたのか質問には答えていないけど話してくれた。

それにしても可笑しな子だなんて、私はそんなに可笑しくなんてないのに。

「あたしはアルフっていうんだ。ありがとね、フェイトから聞いたよ。ジュエルシードを譲ってくれたんだって？」

（まあ、見るからに完敗だったですし……。強いですね、フェイトちゃんって子は）

「そうだろ？あたしのご主人様はとっても強いんだ！……でも良いのかい？一緒に捜している子は友達なんじゃないのかい？」

ご主人様！！？いったいあのフェイトって子は何者！？それともそんな趣味が！？といういろいろな意味で驚いていたけどアルフさんの質問に答える。

……………なんか私、毒されてるかもしれない。おもにかなえちゃんに。

（確かに友達だけど、私は危険なジュエルシードが無くなれば問題無しっていう感じだし。別に誰がジュエルシードを持っていようが

関係ないよ。あつ、でもそれをここで悪用する人だったら渡すつもりは無いけど)

「あつははは、そうかい。やっぱり可笑しな子だね。……あたしはもう出るよ。結構長くここに浸かっていたしね。そういえば念話ばかり使っているけど、どうしてだい？」

アルフさんは笑い、また私を可笑しな子と云うと湯船から出る為に立ち上がり、聞いてくる。

(私、今声が出ないからね。それと、少しお願いしてもいいかな?)

「そうなのかい?それは悪かったね。まあ、お願いは出来るかは分からないけど聞いただけならいいか」

(何で謝るの?……それでお願いって云うのはなのはちゃん、私の友達に大怪我をさせないで欲しいなっていう事で。出来るだけで良いんだ。戦うだろうから怪我は当たり前だろうけど……)

「お願いの方はどうなるか分からない。でも一応、フェイトにも云っておくよ」

(ありがとう。ついでによろしくとも云っておいて下さいね!)

アルフさんがフェイトちゃんに云ってくれるそうで少し安心かな?本当は戦わなければ良いんだらうけど、なんとなく無理そうだなと思い、アルフさんが出入り口に行くところを見ていたら、突然アルフさんはこちらを向き、聞いてきた。
いつの間にか犬耳はなくなっている。

「そういえば、あんたにそっくりな子を知らないかい？その子にもジュエルシードを貰ったってフェイトは云っていたんだけど……」

（そうなの？……知り合いにそんな子はいないよ。私、一人っ子だし）

「そうかい、ありがとね」

それを聞くとアルフさんは今度は本当に出入り口から出て行った。

それにしても私にそっくりの子か。どんな子なんだろう。

……何かのぼせそうだからもう上がろう。

私は温泉から上がり、なのはちゃん達と約束をしていた卓球をやるうとわくわくしながら浴衣を着ようとしていたら疑問に思った。

……あれ？左が上だっけ？それとも右が上？

（ねえ、ルドラ？浴衣って左が上で合ってたっけ？）

《あ？何の事だ？》

（浴衣って左が上か下かでどっちかが死装束になるんだよ）

《そうなのか？でもオレは知らないぞ、そんな事》

（……どうしよう）

私は途方にくれていると、温泉に入りに来たおばさんが私が困っている事に気づき、声を掛けてくれて親切に教えてくれた。

私が声が出ない事や身体に傷がある事にも驚いていたけど、詳しい事は聞かなくてくれて本当にいい人だ。

おばさんが云うには着物や浴衣等は「右前」が常識で、右側を前にするのではなく右側を先に身体につけるからなんだって。

「右前」って云うと身体に先につくのが左側でその後右側っていう勘違いが多いみたい。本当はその逆なのに。

へえ、そうなんだ。と思い、携帯で感謝を云うと、おばさんは「大した事じゃないよ」と云ってくれた。そのままおばさんは手を振り、私はお辞儀をして着替え終わった服とかを持って脱衣所を出て行く。

私は一旦部屋に戻り、着替えを置いてからなのはちゃん達が居る所へと急ぐ。

卓球は初めてだから楽しみだな。

第15話

つばさが温泉に入り終わり、今は卓球を楽しくやっている。

最初の方は空振りをしていたけど、段々上手くなっている。

一応は打ち合いが続くようになっていて、みんな楽しそうだ。

フェレットの方はつばさの空振りの時にラケットも一緒に飛んでいき偶然にもそのラケットに直撃して気絶をしている。

でも、つばさが本気で真面目に上手く、強くなろうと思えば時間は少し掛かるがみんなを負かす事が出来るようになるのだろう。

つばさは真剣にやるとものすごい集中力でそれを覚える。

それを知ったのは飛べるようになった白い子を見て、つばさが空を飛びたいと云い、オレに教えてと云われ教えていた時からだ。

最初は無理だろうと思いつながら教えていたがまずは集中力がものすごい。

基礎を教えている時に一回、酔っ払ったかなえのやつが絡んできた。

つばさはそれに気づいていたか分からないがそれを無視していて集中していた。とても騒がしかったのに。

その時にオレは我慢できなくて怒鳴ってやった。それでオレの存

在はかなえに知られたけど、喋る不思議なストラップで早々に片付けられて、少しへこんだ。

……つばさの家は何かおかしいと再認識した瞬間でもあった。

とにかくオレが云いたい事は、つばさが本気で物事に取り組んだらものすごい集中力と速さでそれを覚えたりする事が出来るという事が云いたいのであって、普段はテストで二十点とか取るバカな子なのにやる気があれば凄い子という……。

……………何云ってるんだろう。オレ。

まあ、とにかく物事には集中力が大事なんだ。

つばさは今はまだ飛ぶ時はオレの助けが必要だけど時間の問題だろうな。自力で飛べるようになるのは。

卓球もいつの間にか終わり、夕飯の時間みたいだ。

ご飯はとても美味しいのか、とてもいい笑顔のつばさだ。

別に、ご飯を食べているのはいいのだが、高町夫妻は何をやっているのだろうか。

子供が見ている前であくんと食べさせあいとかして、二人っきり

の時にやれ！と云いたい。

その上、それに張り合うかのように高町兄とその恋人もやっているし！何なんだこの空間は！？何かピンク色になっているぞ！！？

高町姉の方も一人で寂しいのかフェレットにかまいつけているし。はたから見たらもっと寂しい人だぞ！！

見てみる！それを見ていた子供のアリサとすずかの顔が赤くなっているじゃないか！！子供の目の毒だぞ！！それにメイドの一人も赤くなってるんだぞ！！

つばさや白い子も赤く……………なっていないですね。なんでだ！？

つばさの両隣は白い子とアリサで、アリサの隣にはすずかがいる。

そして向い側には高町夫妻がいて、桃色空間がすぐ側で見られます。

あつ今、高町父の口元についてるご飯粒を手を使わずに高町母は自分の口でそれを取った。

………爆発しろ！！！！

（《おい、つばさは平気なのか？》）

（へ？何が？）

（《この桃色空間の事だ》）

（桃色空間？……あー、私さ時々、高町家でご飯とか食べさせて貰うんだけど、いつものように食べさせあいっことかやってるから）

（《これ、いつもですか！？》）

慣れですか！？だから白い子も耐性があるんですね！！

そう驚愕していたら白い子がつばさに声を掛けていた。

「つばさちゃん、これ食べる？」

つばさはこくと頷くと極自然に出し巻き卵を白い子がつばさの口元を持っていきそれをつばさが食べた。それのお返しにとつばさは刺身を白い子の口元に運びそれを食べる。

……っってお前らもかぁー！！！！

アリサもそれを見て顔を真っ赤にして震えている。

「な、なな、あんた達なにしてるのよ！！？」

二人はきょとんと何故そんな事を聞くの？と云うようにアリサの方を見るが、アリサはまだ少し身体が震えている。

つばさは携帯を取り出し文字を打ち、見せる。

「アリサちゃんもこの刺身食べたかったの？」

アリサはそれを見て「違う」と云いたいようだったが、つばさにここにこ笑顔で目の前に刺身を出され何も云えないようだ。

アリサは仕方なくといった顔で頬を赤く染めたまま、つばさのお箸で口元に運ばれた刺身を食べる。

つばさがまた携帯で文字を打ち、見せる。

「おいしい？」

「……………ええ、おいしいわ」

「だよねえ」

つばさはアリサに刺身を食べさすと、自分もその刺身を食べて美味しいととても素晴らしいぐらゐの笑顔でアリサに同意をして、また違うおかずに手をつけ始める。

アリサは違うという事を云うのに諦めたのか何も云わずまだ顔を赤らめたままで、自分の目の前にあるご飯を食べ始め、それをジーと見ていたすずかにもつばさは気づいたのか刺身醤油皿にその刺身を乗せてすずかの所に行き、食べさそうとしていた。

すずかは驚いていたが、これまた顔を少し赤らめたまま、つばさから食べさしてもらっていた。

そしてまた「おいしい？」と聞き、すずかは頷くと笑顔で同意をすると、また自分の所に戻りご飯を食べる。

白い子はその光景を見て何か面白く無さそうにしている、それに気づいたつばさは念話で聞いていたが白い子は「知らない」と答えて少し機嫌が悪かった。

つばさはどうしてだろうとオレに聞いてきたが知らんと答えてやった。

つばさは少しの間、悩んでいたようだがご飯を食べているとその事を忘れていったのか、とても美味しそうに旅館のご飯を食べていく。

（《つばさ、お前は天然だな》）

（まあ、養殖ではないけどね）

高町家も十分おかしいと思い、つばさが天然だと再認識した出来事でした。

子供達もご飯を食べ終わり、その後も色々やっていたが、もう子供は寝る時間だ。大人達はまだ寝ないようだが。

子供はみんな眠ったものだと思っていたが、白い子とフェレットは起きていたようで念話で話をしている。

ついでに云うとつばさは四人の中で一番早く寝た。

(ユーノ君。起きてる?)

(うん。……………はあ、やっと出れた)

フェレットはアリサにわしづかみにされていた。

アリサは眠っていたのでフェレットは何とかアリサが起きないよう
に手の中から抜け出し、白い子の側による。

(昼間の人はこの間の子の関係者かな?もしそうならまたこの間の
ようになっちゃうのかな?)

(……多分)

フェレットは数秒の間黙っていたが話し出す。

(なのは。僕ね、あれから考えていたんだけど、やっぱりここから
は)

(ストップ!そこから先云ったら、怒るよ)

白い子はフェレットの話を中断させフェレットの頭に手を乗せ撫
でる。

「ここから先は僕、一人でやるよ。なのは達を巻き込めないからとか云うつもりだったでしょ」

(……うん)

(わたし、最初はジュエルシードを集めるのはお手伝いの気持ちだったけど、今はもう違う。わたしがやりたいと思ってやっている事だからやっているの)

白い子はそう云うとフェレットを持ち上げ、目線を合わせて云う。

(わたし達を置いて、一人でやりたいって云ったら怒るよ)

(うん)

フェレットが頷くとなのはは微笑むと少し眠ろうと云うが、フェレットは疑問があったのか聞く。

(ねえ、なのは。つばさはジュエルシード集めをどう思ってるんだろ?)

(さっき、わたし達って云ったけどつばさちゃんの事はごめん、よく分からないや。前はよく遊んでいたんだけど、去年の夏頃から一緒に遊ばなくなってるね。少しだけ前と様子が変わった感じがして……。ごめんね?)

(ううん、別に謝らなくていいけど。……そうなんだ。なのはとはとっても仲良しに見えてたけど、分からない事もあるんだね)

その質問に少しだけなのは落ち込み、謝る。それをフェレットは励まし、もう休もうと云い、なのはもそれに従い身体を休める。

それを見聞きしていたオレはなのはを少しだけ認めようと思った。

ジュエルシードをお手伝い感覚で集められるのは嫌だったしな。

それに元々オレは「力」を持つ奴が大っ嫌いだし、魔導師なんてもつてのほかだ。そんな奴等、滅んでしまえ！とも思っている。

その点、なのははまだまだ子供だし、つばさの友達だからな。

……フェレットはまだ認めるかどうかは分からんな。

今後に期待。

……期待しないけど。

多分つばさはジュエルシード探しに関してはフェレットが一人で探そうがどうしようが勝手に探すだろうな。オレを使って。

あれがとても危険だと分かっているみたいだ。

つばさは無意識に「力」を恐れているし、それで誰かが傷付く事にも恐れている。

それを自分の所為だと勘違いして。本当はそれは愚か（バカ）な奴等の所為なのに。

そいつ等が原因でなのはがつばさが前と違うように感じたんだろ
う。

つばさは自分が変わった事に気づいていないが。

なのは達が休んで少ししたらジュエルシードが発動しそうになる
気配がして、なのはは起きて急いで浴衣から洋服へと着替える。

(ユーノ君、いくよ!!)

(《おい、つばさはいいのか?》)

(うん、つばさちゃんは寝てるのに悪いよ)

(《そうか、気をつけろよ。なのは》)

(うん、ありがとう)

(なのは!早く!)

フェレットはジュエルシードの所に行く為にもう廊下に出てな
はを呼んで急かしていた。

なのは達が部屋を出て行くと、オレは一応念話で起こしてみる。

（《つばさ。ジュエルシードが発動して、なのは達はもうジュエルシードの所に行ったぞー》）

布団の中のつばさはもぞもぞと動いて、起きるかと思っていたが寝返りをうつただけだった。

これは起きないと思ったら、布団を退かし、起きた。

（《つばさ、なのは達の所に行くか？》）

「うん、行くよ。僕はつばさじゃないけどね」

起きたのはつばさじゃなくて腹黒のツカサだった。

ツカサは着替えずにオレが付いている携帯を持つと部屋を出て行く。

《着替えなくてもいいのか？》

「戦う訳でもないのにどうして着替えるんだい？」

《じゃあ、何しに行くんだよ》

「見物。まあ、あの子達と戦う事になったら高町さん達がまた負ける事になるだろうけどね」

《……だろうな》

ツカサはそんな事を云い、つばさとは違う笑みのまま走らず、歩いてジュエルシードの所へと行く。

ジュエルシードが封印され、戦闘を始めたのに気づき少し早めにオレ達は歩いたのだが、そこでは黒い子の斧形のデバイスがなのはの首に突きつけられて戦いが終わっていた。

レイジングハートがジュエルシードを一つだけ取り出し、黒い子に渡すと、二人は地面に降りる。

「あつ、見物に来たのにもう終わったんだ。もう少し早めにこれば間に合ったのかな？」

《……走ればよかったじゃないか》

「嫌だよ。疲れるのは」

《……そうですか》

「つばさちゃん!!?」

オレ達は会話をしながら二人の所に近付くと、なのはは寝ていた筈のつばさが来て驚き、つばさが雰囲気が違う事に気づき少し困惑をしている様子だった。

まあ、普通はそうだろうな。

「ああ、高町さんは初めましてだったね。で、そのフェイトさんだったわけ？はこの前ぶりだね」

「……何で私の名前を」

「つばさが温泉に入っている時に話していたお姉さんが云っていたよ。僕はつばさの副人格の一人のツカサといいます」

「えっ！ど、どういうこと!？」

ツカサは突然自分の事を話し始め、なのはは驚き、ツカサに聞く。

「そのままの意味だよ。つばさは多重人格者で僕はその中の一人の人格。でもつばさは代わっている時の記憶はないけどね。この事を知っているのは家族とか親しい人のみだよ。あつてもこの前、あいつが授業中に暴れたから一応クラスメイトもかな？」

ツカサは質問に答えると、なのはだけでなく、他のみんなが多重人格者という唐突な告白に困惑をしている。

普通、いきなりそんな事を云われたら困るだろう。しかも知り合いが全然違う雰囲気ですわられたら。

つばさとツカサはいつも笑っているけど笑い方が何か違う。季節に例えるならつばさは春で、ツカサは秋か冬かな。

《おい、あんたらはもう行かなくていいのか？用はもう済んだらう》

「そっだよ、フェイト。もう帰ろう」

「そっだね。……ツカサ、この前のジュエルシードありがとう。……後、君は出来るなら、もうわたし達の前に現れないで。もし次があつたら今度は、止められないかもしれない」

少し赤が強いオレンジ色の毛並みを持つ狼が犬耳、犬の尻尾を付けた人の姿になると黒い子に帰ろうと云うと、黒い子なのはに警告すると背中を見せ、そのまま行こうとする。

……やっぱりあいつは温泉の時にいたやつで、使い魔だったか。

「待って、名前！」

「フェイト・テストロッサ」

「わたしは」

黒い子なのはの言葉を聞かずにそのまま飛び立ち、その後続き、赤オレンジの狼だった女も飛んでいった。

「つばさ！この前のジュエルシードってどう云う事なんだ！？」

「だから、僕はつばさじゃなくてツカサだって」

「ジュエルシードをあの子に渡したのか!？」

二人が見えなくなるとフェレットは気になったのかツカサに問い詰める。

ツカサは気にしてないのか「うん、そうだよ」と云うとなのはに部屋に戻ると云い、フェレットは何かまだ云っているが無視してそのまま歩き出す。

「待つて、ツカサちゃん!!」

「……ちゃんづけはやめてくれないかな?呼び捨てでいいから」

「え、でも。………はい、分かりました」

ツカサに置いていかれそうになり、なのはは慌ててツカサの方へ急ぐ。

ツカサは「ちゃん」と呼ばれるのが嫌なのか苦笑いになり、呼び捨てでと願うがなのははどもる。

するとツカサは真冬の極寒のような微笑になり、なのははそれを見て分かったと云う。

フェレットもそれを見たのか押し黙る。

それを見てツカサは溜息を吐くと歩きながら話し出す。

「僕はね、つばさに何事もなければ他はどうでもいいんだ。つばさが傷付かなければ、ね。だからジュエルシードがなくなれば別に誰が持っていようが関係ない」

「だけどそれをあの子が悪用すかもしれないじゃないか！」

もう一度ツカサは溜息を吐く。

「テストロツサさんはそんな事しないよ。もしそんな事をするような子ならとつくの昔に高町さん達は重症になっているか、死んでるよ」

ツカサはそう云うと一人と一匹は息を呑む。

「君も分かっているんだろう？高町さんとフェイトさんの実力差を……。後はまあ、瞳。かな」

「うん、それはわたしにも分かったよ。寂しそうな瞳だった」

話しながら歩いていると、泊まっている旅館が見えて来た。

するとツカサは思い出したかのようになのは達に云う。

「ああ、そうだ。僕の事はつばさには黙っていてくれないかな？つばさはこの事覚えていないし、知らないから。だから黙っていてよ」

ツカサは先ほど見せた極寒の微笑を見せながら云うとなのは達を置いてそのまま部屋に戻り、つばさが寝ていた布団に入り眠った。

なのはとフェレットはツカサの微笑を見て少し足が止まったが「……はい」と呟いて足を進める。なのは達はツカサの後に続き、部屋に戻り布団の中に入った。

……なのははちゃんと寝れるのかな？と疑問に思ったのは仕方がないと思う。

次の日の朝、つばさは起きると昨夜の事は全く覚えていなかった。

第15話（後書き）

……ながっ!!

すみません。こんなに長くなってしまつて……

本当はもうちょっと短くするつもりが何故かこんなに長く……

何処で切ればいいのか分からなかつたんです

次は気をつけよう

ここまで読んで頂き本当にありがとうございます

第16話

ヨーロッパのお城みたいな所の廊下に私はいた。

どうしてここにいるんだろうと考えて周りを見る。すると前から足音が響いてきてこちらに来るようだ。

その人にここはどこか聞いてみようと思い、足音がする方へと向う。

ここはとても広く、やっと人影が見えてきてこちらへ来る人の事が分かってきた。

その人は男性で私と同じ黒髪の人で何処かで見たような人だ。

何処で見たんだろうと考え、思い出す。

夢だ。

前に夢で出てきた人だ。

……でもなんで？まあ、とりあえず聞こうと男性の元へと行く。

男性の目の前に行き、声を掛けようとしたら、まるで私がいなかったかのように通り過ぎ、男性は少し急いで歩いていった。

どうしようと思っている間にも男性は歩く事を止めず進んで行く。

こうなったらもう自棄だと思い、男性を追い越し、男性の目の前に行き、そこに立つ。だが男性の歩みは止まらない。

えー！と思い、ぶつかると思ったたら男性が私の身体をすり抜けた。

これまた、えー！と驚愕して気づく。自分が透けていく事に。

それが分かったと先程の事も分かった。

男性がすり抜けたのではなくて、私がすり抜けたんだと。

……って、私幽霊になったの！？いつの間に死んだ！？

あー、どうしようと思ひ、どうしようもないから男性について行くことと決め、ついて行く。

それにしてもここは広いなあ。本当にここ何処なんだろう。そう思いながら男性の後ろをついて行くと、前の方から誰かが来た。

「探したぞ。お前、何処に行っていたんだ！会議はもうとつくに終わってんだぞ！！」

前から来る人は男性がいる事に気がつく、ものすごい勢いで男性の所へ来るとそう云いながら怒鳴る。

だが、男性の方はそんな事にも意に介さないのか、輝くような笑顔を見せる。

「そんな事よりも、ルドラ！もう少しであれが完成するんだ！！」

「……はあ、そんな事じゃないだろうが。結構、重要な会議だったんだぞ」

「僕にとつてはそんな事なんだよ。それに会議は君がきちんとやってくれているし。おかげで僕は好きなように出来て、本当に大助かりだよ。ありがとね、ルドラ」

ルドラと呼ばれた青年はその輝くような笑顔に呆れたのか先程のように怒鳴らず、溜息を吐きながら話す。

男性の方はその言葉に明るく返し、感謝を云う。
するとそれを聞いたルドラは照れたのを気づかれないように溜息をつく。

ああ、バラですね。これは。

……何考えているんだろう、自分。

「……で、完成させたらどんな名前にするんだ？」

「もう決まっているよ。ジュエルシードっていうのにするんだ」

「お前にしてはまともだな。何時もなら変なのにするのに」

「えー、変かな。僕がつけた名前って。僕の猫の名前んだけどキョーバカとかルミョーソとか考えたんだ。でも僕の奥さんとかに却下されちゃってさ。いいと思うんだけどな……」

「……訳分からん」

猫の名前なんですかそれ、本当にそれにならずに良かったね。
そして奥さん、いい事したね！……ってどうかあの人ジュエルシードって云ったよね。それは、あのジュエルシードですか！？

「という事はジュエルシードって名前付けたのはフレアさんか」

「いや、違うよ。……やっと完成するんだ。僕の小さな頃の夢。どんな願い事をも叶える不思議なもの。僕はそれをつくる事が夢だったんだ。死んだ人を生き返らせる事もできるモノ。……どうしてできそうなのかも解らないけどね」

「解らないのに、出来そうなのか？……誰かを生き返らせるのか？」

「うん、なんとなくね。それにやらないよ。世の条理を捻じ曲げる事はしない。ただ、今は子供の頃からの夢だった事を叶えたかっただけさ」

ルドラが云ったフレアさんという人はこの男性の奥さんなのかな？と思いついて聞いていると、男性はここではない何処か遠くの方を見ながら話、ルドラは不安げに質問をする。
それを男性は穏やかな笑顔で返す。

それにしてもこの人がジュエルシードをつくった人なのかすごいなあ。

でもルドラってあのストラップの名前と同じだなあ。

私はそんな事を考えながら話しながら歩いて行く二人に後を付け、ふわりと身体が浮く感覚がした。

何？と思ったら、元から透けていた身体がさらにどんどん透けていく。

……えっ！？成仏？このやり取りを見ただけで？何で！？と驚愕をしているうちに意識がなくなる。

目を開けるとそこには某青ダヌキロボットのぬいぐるみがとても近くにありました。

あと一センチで顔に引っ付くくらいに。

ビックリしているとかなえちゃんの声が聞こえてきて、青ダヌキも離れる。

「おはよう、つばさ。もう朝でご飯出来てるよ」

私はこくと頷くと、青ダヌキを見て次になえちゃんを見る。それだけで私が何を云いたいのか分かってくれたのか教えてくれた。

「お姫様を起こすのは王子様の役目でしょ？」

青ダヌキが王子様役なの！？と驚いていると「だって、目に入っ
たのがこれだったんだもん」とかなえちゃんが笑いながら云い、か
なえちゃんは「下で待ってるね」と私の部屋を出て行く。

私はまずは顔を洗おうと思い、洗面所に行きながら先程の夢を思
い出す。

とってもリアルだったあの夢を。

そういえば、ルドラと同じ名前の人がいたなあと思い、ルドラに
先程の夢の事を話そうと思った。

（ルドラ、起きてる？）

《なんだ？》

（あのね、さっきまで見ていた夢がすごいリアルでさ。そこでルド
ラと同じ名前の人がいたんだよね。白い髪の長い人で、目が父さん
と同じ黒）

《！！？……その夢はどんな内容だったんだ？》

ルドラは珍しくその夢の事が気になったのか神妙に聞いてきた。

それを不思議に思いながら簡単に夢の出来事を話す。

（本当に不思議な夢だったんだ。……どうしたの？ 黙ったままで）

《……いや、別に何でもない》

ルドラは夢の話を聞いて、何か云うかなと思ったが黙ったまま疑問に思うが私は深くは聞かなかった。

顔を洗い終わり、かなえちゃんが作ったご飯を食べる。その間もルドラは黙ったまま。

いつもならかなえちゃんと話していたりするのに。

……主にルドラが突っ込み役で。

あの夢の話で黙ったからそれが原因だろうけど。話しなくなった話すだろうから、いつも通りにしよう。

「つばさ、いつてらっしゃい。ルドラをよろしくね！」

かなえちゃんのその言葉に頷くと、ルドラが突っ込む。

《いやいや、普通は逆だろ？》

「ちゃんとあつてるよー。いきなりツツコミとかしないように、つばさが監視しないと。喋る珍しいストラップだなんて知られたら……」。キヤー」

《そこまでオレは馬鹿じゃない！そして何で顔を赤くしている！！お前はいつたいどんな妄想をしているんだ！！？》

暫くしたらルドラはいつも通りにかなえちゃんとのやり取りをしていてもう大丈夫なのかなと思った。

学校の授業も終わり、雫ちゃんと和夜君とで一緒に帰ろうと学校を出ようとしたらベンツが止まっていた。

すごいなあ等と思いながら見ていると窓が開く、すると中には見知った顔があった。

アリサちゃんとすずかちゃんだ。

「つばさ、顔を貸しなさい」

アリサちゃんが私の顔を見るなりそう云ってきて、すずかちゃんは始終苦笑いをしていた。

私はビックリしていたが、なのはちゃんがいないのを見て何かあったのかなと思い、素直に従う事にした。

申し訳ないけど雫ちゃんと和夜君には二人で先に帰ってもらい、私はベントに乗る。

……あつ、酔い止め薬持ってない。

ベントはすごい。この車はあまり揺れなくて、それ程は酔わなかった。

……少しだけ気持ち悪いが、吐き気がないだけまし。

「ごめんね、つばさちゃん。この後私達、お稽古があるから車の中でしかお話できないの」

お稽古ですか。さすがお嬢様ですね。と感心しているとアリサちゃんも本題に入ってくれた。

「なのはがこの頃悩んでるみたいだけど、何かつばさは知っている？」

あ、やっぱりその内容か。

なのはちゃん見るからに悩んでますよ、ていう感じだったもんね。

さて、どうやって返事をしようか。文字とか見るとさらに気持ち悪くなるから携帯はダメ。

……ルドラにお願いするか？

（《オレは絶対に伝言役はやらないからな》）

ルドラが先に釘を刺した。

……まだ筆記の方がマシなのかな？と考えて私はペンを持ち、紙に書く。

「しってる。けどなのはちゃんに、ないしょだよっていわれてるからむり」

早めに書こうとしたら全部ひらがなになるけど、別にいいよね。漢字も書くのは苦手だし。

「……なんなのよ。何で、あんたは知っているのになのはの力にならないのよ！！なのはが悩んでるのに！！」

私は怒鳴られてビックリしたけど、また文字を書く。

「たぶん、なのはちゃんがじぶんで、かいけつできるとわたしは思っているから、かな？よくはわからないや」

「……あんたねえ！って何を笑っているのよ！！」

アリサちゃんはまだ怒っていて、私が笑っているのが気に入くないのかまた怒鳴る。

「うれしいなって。なのはちゃんをこんなに、しんぱいしてくれてるともだちがいて、わたしのともだちで、いてくれているのがうれしいなって」

「なっ……」

アリサちゃんは私が書いた文字を読んで顔を真っ赤にして口をパクパクしている。少し面白いなと思った。

すずかちゃんもなのはちゃんやアリサちゃん、私も友達でうれし
いと云ってくれて、私はありがとうとすずかちゃんも友達でうれ
しいよと伝える。

「ああー、もう。分かったわよ！待つわよ！！なのはが話してくれ
るまで！……」

アリサちゃんは大声でそう云う。

照れてるのがものすごくよく分かるよ。

私はありがとうと大好きだよと返すと、また面白いように顔を真
っ赤にしている。

すずかちゃんも私の真似をしてアリサちゃんに大好きと云う。

車に少し酔って、少しだけ気持ち悪いけど、なかなか面白かった。

途中で私は車から降りしてもらい、二人と別れる。

なのはちゃんと合流して一緒にジュエルシードを探そうかな？

……でもさ、何処だっけ？

第17話

（ねえ、ルドラ。ここからどう帰れるか分かる？）

（《知らん》）

（ルドラ、何か少し素っ気無いよ。かなえちゃんとはいつも漫才みたいな事をやっているのに……）

（《漫才なんてしとらん！アイツが変なことを云うからいけないんだー！》）

そんな事を念話で云い合いながらオレとつばさは歩いている。

つばさはアリサとすずかの車から降り、機嫌がよさそうに歩き出して暫くすると、オレに道を聞いてきた。

つばさは迷っているのにもかかわらず、何の迷いもなく歩いて行くので少し心配になる。

（いいもん、グスン。携帯で調べるから。ルドラのバーカ）

（《……何キャラだよ。お前》）

オレの問いにも答えず、首にぶら下がっている携帯を手に取り、いじる。

つばさは携帯でここら辺の地図を出せたのか方向転換をして歩き

出す。

（そういえばルドラには話したよね。今日の夢の事）

（《……ああ、聞いた》）

つばさが話してくれたその夢の出来事はよく知っている。

それはオレのもうずいぶんと前の記憶のものだからだ。

つばさとは何度もリンクをしているからオレの記憶がつばさの夢に出てきたのだろう。とてもリアルだと云う事は、それだけ深く繋がっていた事になる。

それにしても、アイツも出てきてのかぁ。つばさ達と同じくらい色々な意味で印象的な奴だったな。などと感傷に浸っていると、つばさが聞いてきた。

（あれって本当なのかな？ジュエルシードが人を生き帰させることが出来るって）

（《……ああ、本当だぞ。全部ジュエルシードを揃わないとダメだし、少し条件が必要だな。……誰かを生き帰らしたいのか？》）

（……うん、ちょっとね。会いたい人がいるんだ）

つばさは儚く、そして哀しそうに笑うが一瞬で元の笑顔に戻り、聞いてくる。

（でも、よく知ってるね。ジュエルシードの事）

（《……まあ、な》）

つばさの疑問にオレは上手く答えられず、つばさはオレが云いたくない事だと分かったのか、何も聞かなかった。

（ふう、やっと見知った道に出たよ。早く帰って、荷物を置いて、なのはちゃん達と合流しようか）

つばさは携帯を手から離すと少し早足で歩いていたが急に止まり、つばさは走り出した。

オレは急につばさが走り出した事に驚き、つばさが走って行く方を見ると車椅子の少女のタイヤが何かの隙間にはまったのか、そこから動けなくなっていて、そこから抜け出そうと悪戦苦闘をしていた。

つばさは車椅子の少女に近寄り、車椅子を少しだけ持ち上げてタイヤを隙間から出す。

すると、いきなり後ろで車椅子のタイヤを持ち上げられて驚いたのか、ビックリした表情でこちらを見るが、それは少ししたら笑顔になった。

「ありがとう」

少女は少し変わったイントネーションでそう云い、つばさも笑いながら携帯を取り、素早く文字を打つと画面を見せる。

「どういたしまして」

少女はそれを見て不思議そうにしていたので、つばさはもう一度、携帯で文字を打ち、見せる。

「ごめん。私、しゃべれないんだ。だから普段はこれで皆と話すんだ」

「そうなん？別に謝らんくてもいいよ。ほんま、ありがとうな」

「どういたしまして。どこに行くつもりなの？私、暇だから送って行くよ」

少女を見てオレは少し驚く。

車椅子の少女には魔法資質がある事に。

オレは少女に気づかれないよう、つばさに念話をする。

（《なのは達と合流するんじゃないかなかったのか？》）

（……別にまだ時間はあるから大丈夫だよ）

少女はつばさに話す。

「今日はもう、家に帰るところやから気にしなくてもええよ？」

「じゃあ、家まで送ってくよ。どこら辺なの？」

少女はオレと同時に話した為か、つばさは携帯を打つ速度が少し落ち、オレの返事も遅れていた。

「……なら、お願いしようかな」

「うん。私の名前は悠木 つばさっていうんだ。よろしくね」

「わたしは八神 はやてつていいいます。こちらこそ、よろしくな」

断るのは無理だとはやては感じたのかつばさの言葉に甘えることにしたようだ。

つばさは笑いながら自己紹介をすると、はやては嬉しそうに笑い、自分の名前を云う。

つばさは車椅子を押さずに横に行き、歩き出す。……普通は車椅子を押して上げるんじゃないのか？と疑問に思ったので聞いてみると（車椅子を押すのは慣れてないから無理）と返ってきた。

……押すだけじゃないか。

はやての方は気にしてないのか、はやてはつばさに向け楽しそう

に話し出し、そこで気が付く。

つばさはああ云っていたけど、本当は違っんじゃないのかと。

つばさは喋れないから普段は携帯の文字で話す。

車椅子を押していると後ろの方に行く為、はやてに文字を見せるには少し難しい。しかも初対面の人に車椅子を押してもらうのは嫌だろうと、つばさは考えたのではないのだろうか。

はやてと話をしている、つばさを見ると……いや、そうでもないかとオレは失礼にも思った。

つばさはあまり深く考えない性質だ。なんとなくでこういう行動をしたのだろう。

はやての話は読んだ本や料理の事、通っている病院での事が主で、学校には通っていないのか、学校の事は話題にでなかった。

つばさははやての話に頷いたり時々、携帯で聞いていたりしていた。

……前から少しだけ思っていたが、つばさって何気に聞き上手だな。

うまい事、相手が話したい事を聞き出している。

「あつ、わたしの家はここや。ほんま、ありがとうな」

「そうなんだ。こっちこそありがとう。今度はクラスメイトの友達

とか連れてくるね」

「うん、楽しみに待つとるな」

はやては家に着いたのか、その家の前でそう云い、つばさに笑顔でお礼を云う。

つばさもお礼を云い、友達を連れてくるという約束をした。

……短時間でよくここまで仲良くなれたな。

つばさは笑顔で手を振り別れる。

はやての方も笑顔だったが少し名残惜しそうだった。

（結構時間が経っちゃってるね。今日はなのはちゃん達と一緒にジユエルシード探しできないや）

（《そりゃ、道草くってたからな》）

（でも、はやてちゃんていう可愛い友達も出来たんだからいいよね）

……オレはもう何も云わない。

あたりは薄暗くなってきており、もう少しで暗くなり夕飯の時間になる。

（《ところで、帰り道は覚えているのか？》）

（ルドラが覚えているから大丈夫でしょう）

またオレ任せかよ！と思ったが、仕方なく道案内をする。

つばさが（この道知ってる）と云うまでオレの道案内は続き、や
っとオレはカーナビの役目を終えた。

その頃にはもう、辺りは暗くなっていて、急いで帰ろうと少し早
足でつばさは歩き始める。

歩き始めると突然、雲が出てきて雷も鳴り始めて、暫くして結界
が張られた。

黒い子かその使い魔が強制発動をさせ、そしてユーノが結界を張
ったんだな。やれば出来るじゃないか、フェレット。

……なんで大きな樹が出てきた時はやらなかったんだよ。ああ、
そういえばフェレットも怪我をしていたな。

そしてジュエルシードの光の柱がここからも見える。

（あそこにジュエルシードがあるんだね。でも、あの雷とかはなん
だったの？）

（《強制的に発動をさせる為に発生したんだよ。あの近くにいけば、なのはと黒い子に会えるぞ》）

（ふーん。じゃあ、あそこに行こう）

つばさはそう云うと二人のもとへ走り出した。

少ししたら二人の魔力光が見えており、戦っているみたいだ。つばさはそれを見ると先程よりも走っていた速度を上げる。

「フェイトちゃん!!」

ジュエルシードの近くに来ると、なのはの声が聞こえてきた。

つばさも聞こえたのか走っていた速度を落とすと駆け足程度になり、なのは達の姿が見えると歩き、足を止め息を整える。

つばさが息を整えている間になのはは話します。

なのはは「言葉にしないと伝わらない事もある」と「何も分からないままぶつかり合うのは嫌だ」と必死に伝える。

そしてなのははジュエルシードを探す切っ掛けや今は自分の意思でジュエルシードを探していると黒い子に話す。

黒い子は黙ってそれをいつでも攻撃が出来る体勢で聞き、なのはの話が終わると黒い子も迷いながらも話そつとする。

だが、それを遮るように割って入る声が聞こえてくる。

「フエイト！答えなくていい！！」

なのはと黒い子は突然入ってきた声と言葉に驚き、声がする方を見ていると黒い子の使い魔とフェレットがいた。

答えなくていいと云ったのは使い魔の方で続けて話す。

「優しくしてくれている人の所でぬくぬく甘ったれて暮らしているような、がきんちよになんか何も教えなくてもいい！あたしたちの最優先時効はジュエルシードの捕獲だよ！！」

なのははその言葉にも驚くが、オレは赤オレンジの狼の言葉に呆れた。

使い魔なら主人の云おうとしていた言葉に口を挟むなよ。教える教えないは主人の勝手だろうに。

黒い子はその言葉に従い、ジュエルシードのもとへ急ぐ。

なのはも黒い子がジュエルシードを取りに行った事にも驚くが、すぐに黒い子を追いジュエルシードの所へと急ぎ、杖になっているレイジングハートと斧になっているバルディッシュが同時にジュエ

ルシードを付く。

すると二つのデバイスにひびが入り、封印をしたはずのジュエルシードが光。

そして一瞬、光の柱が立ったと思ったと同時に大きな衝撃とジュエルシードの光が広範囲で広がる。

第17話（後書き）

はやてが出て来ましたね

でも今はあんまり出てこない予定です
ほとんど空気になります

それにしても地震、怖いです

自分、10階以上の建物に住んでいるので大きく揺れるのです

気をつけようにも災害はいつ起きるか分からないのでどうしようもないですからねえ

第18話

私はなのはちゃんとフェイトちゃんのデバイスがジュエルシードを捕らえて、どうなるんだろうと思っただけなら、急にジュエルシードが目も開けられないほどの光が輝き、大きな風が来たような衝撃も起こり、思わず目を瞑った。

光はすぐに収まり、目を開けてなのはちゃんとフェイトちゃんの方を見ると二人は吹き飛ばされていて、なのはちゃんは何とか着地していて、フェイトちゃんの方は辛そうに空中で止まっていた。

二人とも無事な事に安堵していると、封印したはずのジュエルシードが光。

フェイトちゃんは地面に降りると、飛び急いでジュエルシードの方へと行き、両手でジュエルシードを掴む。

《あのバカが。つばさ、行くぞ!!》

ルドラが呟き、怒ったような声で叫ぶ。

私はえっ！と驚いているとジュエルシードがフェイトちゃんの両手の中で光だし、本能的にヤバイなと思ったと同時にフェイトちゃんの方へと走り出していた。

ジュエルシードは光り続けていて、フェイトちゃんは「止まれ」と何度も云い、ジュエルシードを掴んでいる両手はジュエルシードの所為で血が噴出していて、立っているのも辛くなったのかフェイ

トちゃんは膝を付き、何かに祈るような感じになっていた。

私はジュエルシードを掴んでいるフェイトちゃんの手を上から掴み、ルドラにどうすればいいのか念話で聞く。

《つばさはジュエルシードに力を注ぐようにしとけばいい。ついでにこいつの手の傷も治しとく》

フェイトちゃんは驚いて何かを云っていたようだったが私は構わず集中をする。

暫くしてジュエルシードの光も治まる。

ルドラのおかげでちゃんとジュエルシードの封印が出来たようで一安心だ。

（ふう。……フェイトちゃん、手見せてね）

私はルドラがついでにフェイトちゃんの手を怪我を治すと云っていたけど、本当に治ったのか知りたくてフェイトちゃんの手を見ていいか聞くが、返事を待たずにジュエルシードの持っていない方の片手を広げたり、近づけて見ていたりしていた。

ちゃんと綺麗に治っているのが分かると私はフェイトちゃんの手を握ったままルドラに感謝を伝え、怪我が治ってよかったと思いいながらフェイトちゃんを見ると少し顔が赤くなっている事に気がつく。

「フェイト！大丈夫かい？！」

フェイトちゃんの顔が赤くなっていて大丈夫かと聞こうとしたらアルフさんがこちらにやってきた。

フェイトちゃんはアルフさんに大丈夫と返していたから、もう大丈夫なんだろうと考えていると、フェイトちゃんは頬を少し染め、困ったように笑いながら私にお礼をいい、手を離してと云ってきたので、そこで私は手を離れた。

（お礼はルドラにも云ってあげて。ほとんどルドラがやってくれた事みたいなものだし）

「そうなんだ。……ルドラもありがとう。君はとても優秀なんだね」

《そりゃあ、オレは神に選ばれたデバイスだから当然だ》

私が云った事にフェイトちゃんは素直にルドラにお礼を云うが、ルドラはそれに少し照れくさそうに冗談を云い、お礼を受け取った。

するとアルフさんもお礼を云い、思い出す。なのはちゃんに云っていたあの言葉を。

（アルフさん。さっきなのはちゃんに云った事なんだけどね？甘ったれたがきんちよっていうのは、ちょっと違うと思うんだ）

「なんだい？いきなり」

私が突然アルフさんに話を振ると訝しむように私に聞く。

（ちょっとだけ気になったことを云っただけだよ？確かになのはちゃんも優しくしてくれてる人達に囲まれているし、ぬくぬくなんだろうけど、甘ったれてはいないと思うんだ）

《ああ、確かにそうだな。つばさとは違って、なのはは生真面目で自分に厳しそうだしな》

私は本当に気になった部分を云うと、ルドラが同意をする。

（そうそう、ちゃんと宿題は期限内に出すし、学校もサボらないしね）

《……それを聞くとつばさ。宿題は期限内には出さずに、学校もサボった事があるように聞こえるぞ》

（宿題はちゃんと出しているだけいいんだよ。それに息抜きは大切だよ……。なのはちゃん達も、もう帰ろうか。お腹もすいたし、疲れたよ）

先程まで空気になっていた、なのはちゃんとユーノに向かい云うと、急に振られた所為かビックリし、フェイトちゃんとアルフさんの方も何故か驚き、ルドラは呆れたように溜息を吐く。

（ルドラ、溜息を吐くと幸せが逃げるって知っていた？）

《お前が出させてるんだろう》

(そうなの？んじゃ、帰ろうか)

《意味分かんわ！！》

(うん、確かに分かんないね)

《……っ！！………はぁ》

ルドラはもう一度、大きく溜息を吐くと、そのまま黙る。

私はフェイトちゃん達に(じゃあ、またね)と念話で声を掛け、手を振ると、そのまま私は家の帰り道につく。

なのはちゃんとユーノは私が歩き出し、暫くしてからなのはちゃんは駆け足をして私に追いつく。

「つばさちゃん、置いて行くななんてひどいよ」

(ごめんなさい。でも、置いて行くつもりはなかったよ？)

「そんな事よりも、ジュエルシードをどうしてあの子達の所に置いていったのさ！！？」

なのはちゃんは怒っています。というように、少し頬を膨らませ、私はそれに一応、謝る。

ユーノの方は何か怒鳴っている。

（別に、いいじゃない。封印は出来たんだし。そんな細かい事を気にしてると禿げて、大変な事になるよ？）

「なっ！細くないよ！！あの子達が悪用するかもしれないじゃないか！！それに、僕は禿げないよ！」

（そうかな？……それにしてもお腹すいたねえ、なのはちゃん）

「えっ、そうだね。……つばさちゃん、今日は一緒に夕飯を食べない？」

私はユーノの言葉を見殺し、なのはちゃんに話を振る。すると、無視をされたユーノはしょぼんと落ち込み、「僕は禿げないもん」と呟いていて、ルドラが《どんまい》と云っていた。

（今日は無理かな。桃子さんのご飯も魅力的だけど、もう、かなえちゃんが作ってるはずだし）

「……そうなんだ」

（今度、また食べに行っても良い？）

「……うん！その時は云ってね。お母さんに伝えてご馳走を作ってもらおうから！」

なのはちゃんの誘いを私が断ると落ち込み、私が次に云った言葉で、とっても嬉しそうに笑う。

……やっぱり、女の子は笑顔が一番可愛いよね。

なのはちゃんと一緒に帰っていると、聞きなれた声で、私の名前を呼ばれた。

「つばさ！となのはじゃん」

声の方を見ると、雫ちゃんがビニール袋を片手に持ち、こちらにやってくる姿があった。

「どうしたの？二人とも。こんな時間に」

「そういう雫ちゃんもこんな時間に買い物？」

雫ちゃんはこっちに来ると聞いてきて、なのはちゃんが私も思っていた事を聞いてくれた。

「ん？うちはお母さんの仕事今日は休みだから。で、珍しくお母さんが料理して、作ることになったんだけど、肝心のルーを買い忘れちゃってさー。そのルーを買ってきた所なんだ」

どうやら川合さんちの夕飯はカレーライスみたいだ。でも、ルーを家で作ればよかったんじゃないのかな？その疑問を携帯に打ち、雫ちゃんに見せる。

「それは無理だよ。だってお母さん、料理ヘタだもん。変な味になっちゃうよー」

雫ちゃんは笑いながらそう云い、何かに気がついたように私達に
ああ、と云う。

「つばさ達は青い宝石のジュエルシード？を捜していたんだよね。
大変だね～。じゃあ、また今度は一緒に遊ぼうね。なのは、ルドラ、
頑張ってね～！」

雫ちゃんは云うと、「早く、帰らなきゃ」と走って帰っていった。
私は手を振りながら、走って小さくなって行く雫ちゃんを見て、私
には頑張っつて云ってくれなかったけど、どうしてだろう。と考
えていた。

「……ねえ、雫ちゃんはどうして、ジュエルシードを捜しているっ
て分かってて、ルドラさんの事も知ってるの？」

なのはちゃんは普通に聞いてきた筈なのに、何故か怖く感じる。

そういえば、なのはちゃんに雫ちゃん達にはジュエルシードの事
とかを話したこと、云ってなかった。

（えっと、大きくなった猫の時に、写真を撮っていました。それを見せちゃいまして。誤魔化せなくて、ですね？全部話しちゃいました。……黙ってるっていう約束をやぶって、ごめんなさい！！）

私は変な日本語で説明をし、頭を勢いよく下げ、謝る。

なのはちゃんは最初の方は怖い感じがしたけど、今は怒ってないのか、何故か笑っている。

何でだろうと、少し頭を上げなのはちゃんの様子を窺う。

「ふふ、そんなに怒ってないよ。つばさちゃん。もう頭、上げてよ」

私はその言葉に従うと、なのはちゃんが誰に教えたのかとか聞いてきたので、それを教える。

（雫ちゃんと和夜君、かなえちゃんに、シゲじいだよ。それで大体の事を教えたよ）

「つばさちゃんのお父さんには教えてないんだ。あと、わたしの家族と友達にも」

（まだ、父さんは仕事中だし、心配をかけたくないから。それになのはちゃんは那些人達に教えて、迷惑をかけたくなかったんでしょ？）

「うん、そうだよ」

私は苦笑しながらそう云い、なのはちゃんも苦笑する。

別に教えた人達に迷惑をかけたいわけじゃない。ただ、かなえち

ちゃんとシゲじいには嘘が吐けなくて、雫ちゃん達に吐いてもすぐにはれたのだ。

……雫ちゃんは勘がよすぎるんだよ。しかも和夜君は言葉で追い詰めてくるほど頭がいいし。

《さっさと帰って、ご飯を食べるんじゃないのか？》

いつの間にか歩いていた足が止まっていて、ルドラがそう云うと、私達は歩き出した。

（そういえば、ユーノが静かだね）

「そういえば、そうだね。……ユーノ君？」

先程までジュエルシールドがどうのとうるさかったのに、静かだったので気になり、なのはちゃんがユーノを呼ぶと、返事がなく、周りを見るが姿が見えない。

きよろきよろと周りを見てみるけど見つけられない。すると、ルドラは見つけられたのか、近くの屋根の上を見てみると云い、見ると……そこには野良猫達に捕まえられて、意識を失っているユーノの姿がありました。

その中の、一匹の猫がユーノを銜えて、そこから立ち去ろうとしていて、私達は慌てた。

「ちょっと待つて、ねこちゃん！ユーノ君を連れて行かないで！」

なのはちゃんは突然、バリアジャケットになるとユーノと猫達がいる屋根の上まで飛ぶ。

猫達はいきなり飛んできたなのはちゃんにビックリしたのか、銜えていたユーノを放し、逃げていき、なのはちゃんは気絶をしているユーノを拾い、私の近くに降りる。

ユーノは意識が戻ったのか目を開いて、周りを見渡した。

「ユーノ君、大丈夫？」

「猫は！？」

（もういないよ？）

ユーノは叫ぶように聞き、私の念話でほっとすると、また気絶をした。

……いったい、この短時間で何があったんだろう。

（早く帰ろうか。なのはちゃん、送って行くよ）

「……うん、ありがとう。つばさちゃん」

私達は疲れたのか無言なまま、手を繋いで帰る。

帰り道の途中でルドラが（《猫ってすごいな》）と念話で私にだ

け聞こえるように弦き、私はルドラにその返事はしなかった。

なのはちゃんを家に送ると、桃子さん達が私を夕飯に誘うが、なのはちゃんに云った時のように断り、私は自分の家に帰っていった。

私が家の玄関をくぐると匂いが漂ってきて、今日の夕飯は私の家もカレーだと分かる。

「おかえり、つばさ。今日はシゲさんと一緒にご飯を作ってね、私はカレーを作ったんだー」

「おかえりー。そして、わしはうどんを作ったぞー」

かなえちゃんとシゲじいは私が帰ってきたのが分かり、玄関まで来るとそう云って来た。

私の今日の夕飯はカレーうどんです。

第18話（後書き）

……私はユーノのこと、好きですよ？

一応、そう言ってみます

読んで頂きありがとうございました！

第19話

ジュエルシードが小規模の次元震を起こした次の日の早朝。

つばさは早起きをしていた。

（おはよう。ルドラ）

《おはよう。今日はつばさが、ちゃんと起きたんだな》

（?うん、起きたよ?）

つばさは疑問に思いながらも返事をする。

つばさはなのはがジュエルシードを集めようと云った時から、体力をつける為に早朝のランニングをする事になっていたのだ。体力をつける理由は逃げる時には体力が必要だから、とつばさは云っていた。

まあ、理由はあれだが、感心はしていた。

……最初のうちは。

つばさは続く時は続くせに、飽きたらすぐ止める奴だから、時々でもやっているぶん、いいのかも知れない。

でも一応、毎日のように起きてはいて、ランニングをしている。ただ、人格が違うだけで。

ランニングの時の人格はツバキとかいう、口の悪い奴だが、いい子だ。

何故、ツバキが走ってるんだと聞くと「毎日走らなきゃ、体力はつかないから。だからあたしが走ってるんだ」との事。

ツカサはどうしたと聞くと、「あいつはこんな、めんどくさい事はしないし、そういう奴じゃない」と云っていた。

確かに、あいつは頭脳派っぽいしな。

それにしても身体は同じだから、ツバキが走っても体力はつくが、どうしても釈然としないな。何かずるい。

つばさは走っている。だが、コース変更をしたのか、自分の家を通り過ぎ、なのはの家の方に向っていった。

《おい、帰るんじゃないのか?》

(なのはちゃんの家に行つて見ようかなと思ってね)

つばさはそう云い、なのはの家の前に行くのを止め、家を見る。すると声を掛けられた。

「あれ?つばさちゃん、朝早くにどうしたの?」

声を掛けてきたのは美由紀で、つばさは携帯を持つと素早く打ち、画面を見せる。

……いつも思うが打つの、早いな。

「おはようございます、美由紀さん。なのはちゃんはもう起きているのかなあと思って」

「まだなのはは起きてないと思うけど。……そうだ。朝ご飯を食べていく？」

つばさは美由紀に朝ご飯を誘われ少し迷っているようで、オレは誘いに乗った方がいいと思う。

シゲじい、とつばさが呼んでいる爺さんがいいお酒を持って来たらしく、かなえと一緒につばさが起きる少し前まで飲んでいたから朝ご飯は自分で用意をしないといけない。

オレがそれを念話で云うと、つばさは美由紀と一緒に食べると伝え、それを美由紀は喜んでいた。

美由紀は練習をする為に道場の方へ行き、つばさは家に上がり、なのはの母親の桃子がいると思われるキッチンの方へと向った。

つばさがキッチンに着くと、桃子がいて、つばさが一緒にご飯を食べたいと伝えると、桃子も喜んでいた。

つばさは桃子にまだご飯には時間があるけど、どうすると聞かれて、つばさは桃子の手伝いをする伝えると、桃子はそれを嬉しうに受け入れた。

桃子はつばさに、そういえば、と云う。

「つばさちゃん、汗がいっぱい出ているみたいだけど、どうしたの？」

「こっちに来るまで少し走ってたんです」

「そうなの？じゃあ、シャワーでも浴びて、さっぱりして来ちゃいなさい」

「でも、着替えが」

「心配しなくても、なのは物を借りればいいわ。もし、なのは物が嫌なら、恭也のお古とかがあったはずだから……」

桃子は困惑をしているつばさを置いてけぼりに、シャワーを浴びさせる為につばさを浴室に連れて行く。

「つばさちゃんはおうちのお風呂の使い方とかは知っているわね？」

桃子の質問につばさは諦めたように苦笑をしながら頷き、桃子はタオルと着替えはすぐに持ってきて置いてく、と云うと脱衣所から出て行った。

何かすごいなとつばさに云うと、つばさは頷き、服を脱ぎ始め、脱ぎ終わると浴室に入って行く。

少ししたらシャワーの音がして、暫くすると鼻歌をしている桃子が入ってきて、タオルと服を置いていく。

つばさが五分くらいで、シャワーを浴び終わり出てくる。そして、身体を拭き、服を見て、固まった。

……オレも桃子が置いて行く時に固まったから不思議はない。

桃子が置いてった服はふりっふりの可愛らしい服で、色は黒と白が主な服だった。ゴスロリっていうんだっけ？こういう服は。

つばさは仕方なくそれを着る。というかつばさ、着方、分かるのか？と思ったので聞いてみる。

（分かるよ。何度かこういう服、着たことがあるから）

……何度もある？つばさはこういう服も着るのか！？

オレはつばさの着る服のイメージが全然違ったので驚愕をしていると、つばさが遠い目をして話し出す。

（私は好んで、こんな動きにくい服は着ないよ。ただ、かなえちゃんと夕菜さんが着させてきたんだ。一昨年ぐらいに、面白がって）

それを聞いて納得をする。だが、どうしてこんな服を桃子が持っているんだ？と疑問に思い、つばさに聞くと、かなえちゃんがあげたんじゃないかなと返ってきたので、あー、そうかもしれない思っ
った。

つばさがキッチンに戻ると、桃子が朝食の準備をしていて、つばさが戻ってきたのが分かると手を止め、こちらにやって来ると、つばさを抱きしめた。

「きゃー。つばさちゃん、可愛いわ。写真を撮りましょう！」

桃子はつばさを抱きしめながらそう云い、つばさは照れたのか頬を染め、少し困った顔をしていたが、とても嬉しそうでもあった。

桃子は写真を撮り、一応、満足をしたのか、つばさを解放して、朝食の準備をし始める。

つばさはこれまた、フリフリのエプロンを渡され、それをつける
と、桃子の手伝いをする。

料理の手伝いと云っても、とても簡単なものだけで、でもつばさは楽しそうにしていた。

だが少し気になる事があった。

桃子がつばさを見ていない時に、ほんの一瞬、どこか物寂しそうに、遠くを見ていたような気がした事が。

朝ご飯の用意が出来あがると、ちょうどいい時になのはや、他の人達もきて、皆、つばさを見て驚く。

それもそうだろう、ゴスロリのフリフリエプロンをつけた、珍しいつばさがいるのだから。

「つばさちゃん、可愛いー!!どうしたの!?!」

驚いていた美由紀がつばさを抱きしめながら云うと、つばさは困ったように笑いながら、桃子の方を見る。

「つばさちゃんが汗をいっぱい掻いていたからシャワーを浴びさせて、着替えさせたの」

「ナイスだよ。お母さん!!」

桃子がそう云い、美由紀は桃子に向って親指を立てて、つばさから離れる。

「つばさちゃん。似合っていて、可愛いよ」

「うん、とても似合っているね」

「つばさちゃん!とっても可愛いよ!?!」

恭也、士郎と続き、なのはが云う。

つばさは照れているのか、少し頬を染め、もじもじとしている。

「ふふふ、今日はつばさちゃんと一緒に、朝ご飯を作ったのよ」

桃子はそう云い、皆で早くご飯を食べましよう云う。

そして、みんなでご飯を食べ始めると、つばさの服の事等を話していたが、桃子と士郎がイチャイチャし始め、恭也が美由紀の制服のリボンが曲がってるぞ、などと云い、直してやったりしていた。

……恭也、確かお前、恋人いたよな！？などと突っ込みたくなかった。

つばさは普通に食べていたが、なのはがつばさを見ていて、目が合つと、笑いあつたりとかしていて。

オレはイチャづかず、普通に飯を食べねのかよ！！と思ったのは黙っとく。

朝食も食べ終わり、つばさは後片付けを手伝おうとするが、桃子に「つばさちゃん早く帰って、学校の用意をしなくちゃ」と云ってきたので、つばさはその言葉に従い、皆に挨拶をしてから高町家を出る。

（いやー。それにしても賑やかで、楽しかったよね）

（《確かにな、つばさの家とはまた違った、賑やかさだったな》）

（そうだよな。かなえちゃんとルドラのおかげで、うちも賑やかだし）

家を出て、つばさと念話で話す。

だが、オレは騒がしくはしてないぞ。かなえの奴が騒がしくして、オレがそれを抑える役目だからな。

（でもよかったよ。レイハさんが今日中には直りそうぞ）

（《まあな。一応、レイジングハートも高性能だし》）

（へー、そうなんだ）

つばさは桃子とご飯の手伝いとかしていた時に、少しだけ遠い目をしていたのを思い出し、つばさに問う。

すると、つばさはそうだねえ、と云いながら目を細くし、遠くを見るような目で少し寂しそうに、だが淡々と話し出す。

（私もお母さんがいたら、こんな風にお手伝いとかしてたのかなあ、とか思ってたんだよな、その時）

（《……そうか》）

オレは聞いてはダメな事だったかと悔やみ、それを悟られないよ

うに言葉を返し、気づく。

昨日、云っていた会いたい人は、つばさのお母さんの事だったのだと。

つばさの母親は、つばさが物心が付く前に亡くなったのだと、かなえから聞いた。

その時に、あの時の事を聞かれたが、オレは答えなかった。

とてもしつこく、かなえは聞いてきたが、オレは無言を貫き、かなえはそれに折れたのか、もう何も云わず、ただ静かにこう云った。

「つばさの事は同情でも何でもいいけど、側にいてあげて、困っていたら助けてあげて。あの子は私のたった一人の姉さんの子で、私の家族だから……」

それにオレは驚いた。

かなえはいつも、ぐうたらとしていて、不真面目な奴だと思っていた。

だが、その時はとても真面目な顔で、それでいて不安そうな表情をしていた。

かなえのその表情を見て、思わず「一応、出来る限りでいいならな」と答えたのだ。

そう答えた後、つばさがお風呂からあがり、オレとかなえがいる部屋に入ってくると、もうそこには不安で、でも真面目な顔のかなえはいなくなり、いつものぐうたらで、おちゃらけた、かなえがいた。

オレはその切り替えのよさにもビックリしていたが、つばさはとても大事にされているのだと分かったのだ。

つばさが家に着き、玄関を開けるとお酒の臭いがした所為か、つばさは顔を顰めたが、そのまま家の中に入って行く。

リビングに入ると、空の酒瓶を抱え、間抜けた顔をして寝ている大人二人。

そのうちの一人が、あの時、とても真面目な顔をしていたとは到底思えなくて、あの時の事はオレが壊れて誤った記憶なのか、とも考えたのは仕方がないと思う。

第20話

私はなのはちゃんの家から自分の家に帰ってきた。

玄関を開くと、ここまでお酒の臭いがしてきていて、リビングに行くとな案の定、かなえちゃんとシゲじいが酔い潰れていた。

まずは酔い潰れている二人に布団を掛けてやり、自分の部屋に戻り、服を着替える。

桃子さんから借りた、このふりっふりのゴスロリ服は、かなえちゃん分かるように、リビングのテーブルの上置いてあるものを退かし、綺麗にして、服を置き、「クリーニングに出して桃子さんに返して下さい」と書いた紙を側に置いというて、家の鍵を掛けて、そのまま学校に行く。

行く途中で、なのはちゃんに会うかなと思ったけど、会わなかった。

でもまあ、それはそうだろう。普通なら、もう授業が始まる寸前だし。

少し、のんびりし過ぎたみたいだ。……あの時、漫画を読むんじゃないかったな。

過ぎた事はしょうがないので、歩いて学校に行く。とりあえず、遅れた理由は、かなえちゃん達の介抱でいいよね。

一応、夕菜さんに学校を遅れる事をメールで送っとく。

学校に着くと、夕菜先生にやつぱり怒られた。

でも、先生にメールで連絡をしていたおかげか、そんなに長く説教をされなかったので、助かった。だけど、職員室に呼ばれて、今日の授業の終わりに雑用をやらされた。漫画を読んで遅れたとばれたからだ。

まさか、雫ちゃんに遅れた理由を、正直に授業中に手紙でやり取りしている時に、先生が後ろにいたとは思わなかったよ。

今日の授業が終わり、遅れた理由が、漫画を読んでいた罰として、今は図書室で本の整理をしています。

ただ、本を元の場所に戻しているだけだけど。
この作業は地味だよ。

（《だからあの時に、漫画を読まずに行っとけばよかったんだよ》）

（うー、だって読みたくなっただもん。仕方がないよ）

私が落ち込みながら地味な作業をしていると、ルドラが念話で話し出し、私はそれに、しよげるように返す。

（でも、この一冊でもう終わりだから、もう帰れるよ）

（《だが、今日もジュエルシード探しが出来ないな》）

（んー、そうでもないよ？ただ、なのはちゃん達と一緒に探せれないだけだよ）

（《なんでだ？》）

ルドラが聞いてくると、夕菜先生が図書室に入ってきて、私に声を掛けてくる。

「つばさちゃん、もう終わった？」

私は頷いて周りを見ると、私が本を元の場所に戻していた最初は、ちらほらと人がまだ居たのに、今は夕菜先生と私、ルドラだけになっていた。

「じゃあ、もうここ閉めるわね」

夕菜先生と一緒に図書室を出て、先生が鍵を閉めると聞いてきた。

「どうしたの？つばさちゃん。今日は遅れてきて、それにいつも以上に上の空だったし。何かあったの？」

さすが先生、よく見ている。いや、多分、ルドラと雫ちゃん、和夜君も分かっているのかも。

私の周りの人は、鋭い人達ばかりだから、私が今日、おかしいと分かったのだろう。

その、おかしかった理由はただ、桃子さんのお手伝いをして何故か、自分のお母さんの事を考えて、なんか、こっ胸の辺りが、もやもやとした感じが抜け切れなかったのだ。

私は夕菜さんになんて返そうと思っていると、雫ちゃんが私のラ

ンドセルを持ってやって来た。

「おーい、つばさ。もう終わったの？」

私は雫ちゃんに向って頷くと、先生が云う。

「ええ、悠木さんの用事はもう終わったわよ」

「そうなんだ。じゃあ、一緒に帰ろう。つばさ」

雫ちゃんは私のランドセルを渡してくれて、私はランドセルを受け取り、背負うと、夕菜先生が云ってくる。

「じゃあ、二人とも気をつけて帰るのよ。また、明日ね。悠木さんはちゃんと明日は遅刻しないようにね。さようなら」

「はい、先生。さようならー」

夕菜さんは先生の皮を付けて、先ほどの問いを聞かずに夕菜先生は職員室に行き、別れる。

すると、携帯にメールが来て、見てみると送り主の名前は夕菜さんで、内容を見ると「今日、つばさちゃんの家にお邪魔する予定だから、その時によかったら教えてね？」との事。

へー、今日は夕菜さん、家に来るんだ。……という事は、また家がお酒臭くなるな。

「どうしたの？つばさ」

「いやー、かなえちゃんとはどんだけお酒を飲むんだろうなあと思っ

て……」

「確か、今日は朝まで飲んでたんだよね？かなえさん、また飲むの？」

「うん、お客さんが来ると、いつも飲んでるよ」

雫ちゃんは「すごいねえ」と言い、私もそれに頷く。

《おい、つばさ。オレの疑問に答えてないぞ》

「ルドラ、起きてたんだ。……疑問？」

私も雫ちゃんと同じ様に首を傾げていると、少し怒ったような声でルドラが云う。

《だから、ジュエルシード探しの事だ！》

（ああ、その事ね。だって、なのはちゃんの所は門限があるけど、私の所にはないもん。だから、何時でも探せるよって云う、意味）

《……そうなのか？でも、何時でも、という訳にはいかないだろう》

（補導されちゃうもんね）

「……あのさ、二人で会話してないで、うちにも分かるようにしてよ！ルドラばっか話してしてるようにしか聞こえないよ！-」

ああ、そういえばと気づく。

雫ちゃんは念話が出来ないという事に。

「おい、何下駄箱で叫んでるんだ？ 雫」

突然、声が聞こえてきて見てみると、和夜君が野球でもしていたのか、バットとグローブ、ボールも持って、ランドセルを背負っていた

「聞いてよ、和夜！ ひどいんだよ、ルドラってば！！ つばさとテレパシーみたいなので話してて、うちも、つばさと話がしたいのに！！！」

雫ちゃんは和夜君に泣き真似をしながら、縋り付いて云う。

「そうか。確かにひどいな、ルドラが。だから雫、離れる。鬱陶しいから」

《……何で、オレの所為なんだよ》

和夜君は溜息を吐きながら、呆れたようにそう云い、雫ちゃんは素直に離れると、ルドラは啞然とした風な声で云った。

「私の家には門限がないよって話してて。それにしても和夜君はまだ帰ってなかったんだ」

「ああ、他の友達と野球をやってて偶然、雫を見かけたからな。ついでに、つばさも一緒だろうし、俺もつばさ達と一緒に帰ろうかなと思ってな」

「じゃあ、一緒に帰ろうか」

「よし！じゃあ、帰りながら一緒にジュエルシードを探そうよ！！」

私は二人に見えるように携帯の画面を見せ、ルドラとの話を簡単に説明し、さあ、皆で帰ろう。という時に栗ちゃんは楽しい事を思いついたっていう感じに話し、それ、いいかも。と私は考えていると、ルドラがダメだとはつきり云う。

和夜君もルドラに同意していたが、栗ちゃんがもう一度ジュエルシードを捜すと云い、こうなった栗ちゃんは梃子でも動かないと分かっているから仕方なく、和夜君も一緒に探すと折れてくれた。

《危険なんだぞ！分かっているのか！！》

「なんとなくな。突然、大きな樹が出てきたのはジュエルシードの所為なんでしょ？とつても危険なのは分かっているよ。その所為で家が壊れて、まだ困っている人がいるのも知ってる。本当なら沢山の人が死んでいたかもしれないという事も」

《なら！！》

栗ちゃんが神妙そうな顔で云い、ルドラは尚も言い募ろうとすると、栗ちゃんがそれを静かに遮る。

「だからと云って、原因も分かっているのに、そのままなかった事のように過ごすなんて、うちには無理。……つばさとルドラが一緒にらジュエルシードは封印できるんでしょう？なら、一緒に探したい。何も出来ないけど……でもっ！」

栗ちゃんは、手をぎゅっと握り締め、何かを我慢するように、辛そうに、云う。

ルドラは驚いたのか何も云わず、ただ黙っていた。

（ねえ、ルドラ。別にいいんじゃないかな？一緒に探すくらい）

（《だが、死ぬかもしれないんだぞ》）

（大丈夫。ルドラがいるし、危険になったら雫ちゃん達も、ちゃんとすぐに逃げるよ）

黙っているルドラに念話で話し、少し黙っていたが、ルドラが話し出す。

《はあー。……分かった。危ないと感じたらすぐに逃げるんだぞ。それにしてもお前らはオレを信用しすぎだ》

雫ちゃんはルドラにそう云われると、嬉しそうに笑い、云う。

「だって、ルドラなら大丈夫だって思ったから」

《……その根拠は？》

「ただの、勘です！」

雫ちゃんはどう顔で云い、ルドラはもう一度大きな溜息を吐く。

私は和夜君の方を見てみると、和夜君はほっとして少し笑っていて、それを見ていたら和夜君と目が合い、すぐに目を逸らされて頬を少し赤くし、照れたのか少し早口で話す。

「なら、安心だな。雫の勘はよく当たるし、それよりも早く探さないと、夕飯が遅くなるぞ!!」

「?何、赤くなってるのさ」

「別に、ただ暑いんだよ! いいから、早くジュエルシードやらを探すんだろ!!」

和夜君はすたすたと早足で外に出て、私は雫ちゃんと一緒に和夜君を追いかける。

それにしても、雫ちゃんがそんな事を考えていたなんて思わなかったし、もしかして、和夜君も同じ事を考えていたりするのかなと少しだけ考えて、そうなんだろうな、と思った。

この二人も一緒に探してくれるのは私は心強いと思う。

別に、なのはちゃんとユーノが頼りないという訳でもなんだけど、ただ、とても嬉しくて、そう思ったんだ。

……自分の事なのに、よく分からなかったけどね。

第21話

オレは雫と和夜を、危なくなったらすぐに逃げるという約束をし、つばさと一緒にジュエルシード集めを手伝うという事を許可して、今は三人でジュエルシードを探している真つ最中だ。

海沿いの道を歩き、先頭に歩いているのは、とても楽しそうな雫で、その後ろに、つばさと和夜が歩いているという形で歩いている。

《和夜、なんで雫が先頭なんだ？》

オレはこの中で常識人っぽい和夜に、雫には聞こえないように聞いてみる。

「雫はさっきも云ったように、勘がとってもいいんだよ。テストの選択問題とかだと、ほとんど満点に近いんだ。だから、雫が先頭」

《それもある意味すごいが、例えば勘がよくてもジュエルシード探しには関係ないぞ。テストは》

「関係あるよ。あいつと一緒にいると道に迷わないんだ。何でかは分からないけど。……よく迷子になる、つばさなら分かるんじゃないか？」

和夜は横にいるつばさに云う。

つばさはその言葉に、こくりと頷くと念話をしてきた。

（そうだね。私はよく迷子になるけど、雫ちゃんと一緒だと迷わな

いんだ。初めて通る道でも雫ちゃんと一緒だと、ちゃんと目的地に着くし、遠足で私が迷子になってた時も雫ちゃんが一番に見つけてくれたしね)

《……何で?》

(さあ? 雫ちゃんはただの勘だって云ってたけど)

ああ、だから雫が先頭なのか、納得。ってなるわけねえよ! 意味分からんわ! っっていうか、つばさ。どんだけ道に迷いやすいんだよ! ー!!

和夜は、つばさとオレの念話が終わったのかどうかを、つばさに聞くと、つばさは頷き、和夜はオレに云う。

「とりあえず、雫が先頭でジュエルシードを探せば見つかるかな、と思ったんだ」

いや、それで見つかったら、苦労はしないぞ。等と考えていると、つばさと和夜はいつの間にか足を止めていて、雫がこちらを振り返り、話し出す。

「ねえ! そんな所で話してないで、一緒に探検しようよ!」

《って、おい! ジュエルシード探しはどうなったんだよ!》

「ただの冗談だよ。でもうちだけ仲間はずれはやめてよね。寂しいじゃん」

雫は二人とオレにそう云うと、また自分が進みたい方向へと歩い

て行く。

つばさ達は雫を追いかけるように駆け足で雫の元へと行き、雫の隣に和夜、その後ろにつばさ、という感じで歩く。

「雫、どこに行こうとしているんだ？」

和夜がオレも聞きたがっていた事を聞くと、雫は軽い調子で云う。

「もう少し歩くとね、遊具はないけど公園っぽいところがあるんだ。で、そこに行こうかなって思ってた」

雫がそう云い終わる時に、ジュエルシードが発動しそんな気配を感じた。

そこは、つばさ達が行こうとしていた所の近くらしく、そこでジュエルシードが発動し、一本の樹が急激に大きくなり始る。

そして、フェレットも近くにいたのか、すぐに結界が張られた。

雫はいつの間か、つばさの手を握り締め、和夜は雫の反対側でつばさを挟むようにしており、片腕で二人を守るように少し前にいて、すぐにでも動けるようにしている。

本来なら、魔力がない二人は結界の中には入れないが、つばさが近くにいた為か、結界の中にいる。

一本の樹が大きくなるが、あの時の樹よりも小さいけれど、樹が枝を腕のようなモノに変え、動きだす。

それと対峙している、なのはが遠目でも見えたのか、雫がなのはの名前を呟く。

《お前達はここで大人しくしているんだぞ。つばさ、行くぞ!》
(イエッサー)

つばさは気が抜けるような返事を念話ですると、雫と繋いでいた手を離し、なのはの元へと走り出す。

つばさがなのはの姿がはつきりと見える所まで来たが、なのはは、つばさがいる事に気が付いておらず、樹と対峙している。

樹に黄色に輝く魔力弾が降り注ぐが、シールドを張られ、攻撃が通らない。

「今の攻撃はなのはがやったの?」

《いや、今の攻撃はフェイトっていう黒い魔導師だろう。魔力光がらして》

「どんな人なんだ?」

《今は、なのはとは敵同士みたいだが優しそうな子供だったな》

「ああ、つばさがこの前、云っていた子?」

《そういえば前に、つばさが雫に話して、いた、な……………?》

はて? オレは念話ではなく、誰と会話をしているんだ。と、やっ

と気が付き、声の方を見る。

「お、お前等！あそこで待ってるっていただろうが！！それに、危なくなったら逃げるっていう約束もしたはずだぞ！！！」

つばさの少し後ろには、雫と和夜が少しだけ息を切らして走っていて、つばさも気が付いていなかったのか、走るのを止め、少し驚きながら苦笑をしている。

オレが雫と和夜に向って怒鳴っているのに対し、二人は落ち着き、まるで当たり前のように返す。

「だって、大丈夫だと思ったんだもん」

「それに、俺達に何かあった場合、ルドラ達が近くにいて、守ってくれば安心だし、あの樹の方は、なのはと、もう一人の子に任せて貰えば大丈夫なんだろう？」

オレは、和夜の言葉にも一理あるなと思い、仕方なく一緒に行動をする事にした。

その間に、樹が根つこの部分を出し、鞭のように使い、なのはに当てようとするが、なのはは飛び、それを避けると、なのはは、もっと高く飛んで行く。

「つばさ！何で、この子たちもいるの？！」

フェレットはつばさ達がいる事に気が付いたのか、こちらにやつ

てくる。

「おお、イタチが喋ってるよ!」

「話では聞いていたけど、実際に見ると、変な感じだな」

（ごめんね。何か付いてきちゃった）

雫と和夜は呑気に云い、つばさは本当に申し訳なさそうに念話で話す。

《悪いがオレ等はこの二人を守るから、お前らで何とかしろよ。…まあ、あの二人なら楽勝だろうけどな》

オレはそう云いながら、樹と戦っている二人を見ると、もう決着が付きそうだった。

黒い子がまず、ブーメランのような魔力刃で、根っこの部分と枝を切り、なのはが砲撃で樹を攻撃する。だが、樹はシールドを張っているので、直接のダメージはない。

なのはは砲撃を出し続けているので、少しだけ樹が押し潰されるような形になり、苦しんでいる。

なのはに続くように黒い子も樹に砲撃を放つが、樹はまたもシールドを張り、耐えている。

樹は、ピンクの砲撃と、黄色の砲撃に耐えられなくなったのか、

シールドが壊れ、直接、二人の攻撃が当たり、樹が光り出すと、樹から青い宝石が出てきた。

「あれが、ジュエルシードか？」

和夜の問いに、オレはそうだと云う。

なのはと黒い子は同時にジュエルシードを封印すると、ジュエルシードが光輝き、封印は完了した。

封印をしたはずの二人は、警戒を解かず、黒い子は空に飛び、なのはと向かい合う。

「ジュエルシードは衝撃を与えたら、いけないみたいだ」

「うん、昨夜みたいな事になったら、わたしのレイジングハートも、フェイトちゃんのバルディッシュもかわいそうだもんね」

「……っ?! だけど、譲れないから」

黒い子は少し驚きながらもそう云うと、構えなおし、なのはは、「フェイトちゃんと話をしたいだけ、なんだけど」と云いながらも構える。

「わたしが勝ったら、ただの、甘ったれた子じゃないって分かって貰えたら、お話聞いてくれる?」

そう、なのはが云い、黒い子は小さく頷き、同じタイミングで二人はじりじりと近付いて行く。

雫と和夜は、そのやり取りを見ながら、こんな事を云っている。

「何か、あんまり思っていた魔法とは違うよね」

「ああ、なんていうか、”魔法”というより、”魔砲”って感じだな」

「そうそう。しかも、なんか、肉弾戦っぽい事をやるみたいだね。なのは達」

フェレットは固唾を呑んで見ているのに対し、二人はとても緊張感がなく、それを見たフェレットは呆れていて、つばさの方は自分もそう思っていたのか、うんうんと頷いている。

「雫はどっちが勝つと思う？」

「うーん。なんか決着は付かなさそう」

和夜が雫に二人の勝敗の予想を聞くと、雫は顔を顰めながら答え、オレは何でだ？と聞こうとした時、なのはと黒い子の方から転移魔法が発動する事を感じ取り、オレは思わず戦っている二人の方に意

識を傾けた。

二人はデバイスを振りかざし、二人のデバイス同士が当たる。と思ったら、間に誰かが入り込んできた。

「ここでの戦闘行動は、危険すぎる」

二人とも驚き、固まるが、突如として現れた、黒い髪に黒い目、黒い衣服の少年は、それに構わず話し出す。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせて貰おうか」

それを聞いたフェレットは「時空管理局？」と呟くと、つばさが、それは何？と念話で聞き、黒い少年と二人が空から降りると、オレンジ色の魔力弾が少年に数発、放たれた。

つばさ達はそれに驚き、フェレットも驚いた為に、つばさの問いに答えられず、どうなるのかと三人と一匹は、なのは達の方を見守る。

二人の戦いを見守っていた黒い子の使い魔の赤毛狼が、空からの最初の攻撃を上手い事、凌いだ少年に、またも魔力弾を狙いを定めて大声で云う。

「フェイト！撤退するよ、離れて！」

黒い子はそれに従い、空へと飛び、使い魔が魔力弾を打ち、なのは達には当たらずに地面へと当たる。

その衝撃でなのはと少年は下がるが、砂埃も出ているので視界も悪そうだ。

黒い子は空に浮かんでいるジュエルシードを取ろうとするが、砂埃の中から魔力弾が直撃ではないけれど、少し当たったのか黒い子は地面に落ちていく。

それを見たつばさは走り出し、オレを念話で呼び、オレはつばさの飛ぶ手助けをやって、つばさは銀色の翼をはやして落ちていく黒い子を横抱きにしてキャッチする。

そういえば、前にもこんな事なかったっけ？と考えながらも、黒い子を見ると、熱があるのか顔を赤らめて少し息も荒い。

つばさは赤毛狼の近くに下りて、少年には聞こえないようにして念話で云う。

（アルフさん、フェイトちゃんを連れて早く逃げてね）

赤毛狼は驚くが、つばさの言葉の通りに、黒い子をずり落ちないように背中に乗せるが、つばさの登場に驚いていた少年は我に返ると、デバイスを逃げる黒い子に向け魔力弾を撃とうとする。

それを阻むように、逃げようとする黒い子達と少年の間に立ち、なのはが両腕を広げる。

「ダメー！撃たないでー！」

なのはが庇った事に、少年はまたも驚いているその隙に、黒い子達は逃げて行く。

なのはとつばさは、逃げていく黒い子達を見送り、少年は追いかけるのは無理だと考えたのか、黒い子達を追わずに、そのまま空から降りてくる。

少年が地面に降りると、誰かが少年に向かい、ものすごい勢いで少年を蹴った。

少年は完全に油断をしていたのか、その跳び蹴りが、それはそれは綺麗に入り、少年は吹き飛ぶと、少し先にある海に、落ちた。

跳び蹴りをした人物、雫は肩幅よりも少し広げた足に、両手は腰に当て、とても輝く笑顔でこう云った。

「正義は勝つ！！」

……油断をしている相手に突然、跳び蹴りをするのは正義なのだろうかと、オレはふと思い、ぱちぱちと拍手をする音が聞こえ、その音の方を見ると、つばさが拍手をしていた。

……………何なんだこれ。

第22話

雫ちゃんは見事な跳び蹴りをいきなり、どこからかやってきた少年にくらわせて、とびっきりの笑顔で云う。

「正義は勝つ!!」

雫ちゃんの跳び蹴りが、あまりにも綺麗に入っていたので、私は思わず拍手をしてしまった。

和夜君は海に落ちていった少年の方を見て、手を合わせ、なぐむ
と等と呟いている。

……まだ、死んでないよ。

名も知らぬ少年が落ちていった海を見ると、ぷかくと少年が浮か
んできた。

それを見て、私は失礼ながらも、雫ちゃんによくやったと云いた
くなった。

せっかく、なのはちゃんとフェイトちゃんの決着が付くと思った
のにあの少年に邪魔をされて、私は少し怒っていたからだ。

「えっ、雫ちゃんに和夜君もいたの？」

「うん、なのはって飛べるんだね。いいなあ」

なのはちゃんは、突然の事に目を大きく明け固まっていたが、正気に戻ると、まずは栗ちゃん達がいる事に驚き、栗ちゃんは空を飛べる事に羨ましがる。

高所恐怖症の和夜君は羨ましがる栗ちゃんに、なんで飛びたがるのか意味が分からないと云って、栗ちゃんが和夜君は、高い所ダメなんだもんね」と返していた。

そのやり取りを横目で見ながら、私は空中に浮かんでいたジュエルシードを取って、ルドラに渡し、なのはちゃんに向って念話で、帰ろうかと云うと、なのはちゃんは海に浮かんでいる少年を見ながら困惑していて、なのはちゃんはあの人の心配をしていて優しいなあ。と思っていたら、その少年がものすごい勢いで海から上がり、息を切らしていた。

「さて、帰ろうか。夕飯の手伝いもしなきゃいけないし」

栗ちゃんは少年の息を切らしている様子を見ながら云うと、和夜君もそれに賛成して歩き出し、私はなのはちゃんの手を取り、一緒に帰ろうとする。

《おい、いいのかよ。あれをほっというて》

（んー。一応、無事みたいだからいいんじゃない？）

「別にいいんじゃない？見るからに平気そうだし」

雫ちゃんは口に出して云い、私は念話で雫ちゃんとほぼ同時にルドラに云う。

「良くないだろう！！？いきなり蹴飛ばしといて！！！」

少年が立ち上がり、蹴飛ばした雫ちゃんに怒鳴る。

「だって、いきなりやってきて、攻撃をして、訳分かんない事いうから」

「だからって、いきなり！！」

「ちょっと、すみませんね。こいつ馬鹿でよく、考えもせずに行動するもんで、ちゃんとこいつに云うときますから」

少年は雫ちゃんに詰め寄るが、和夜君が割って入り、雫ちゃんの口を手で押さえながら云うが、それでも少年の怒りはおさまらないのか二人に問い詰めようとしていると、少年の顔の近くに何やら半透明みたいな画面が出てきた。

何かすごいよ、これ！ホログラムとかだよ！！などと、びっくりしながら見ていると、女性が映っていて、話し出した。

『クロノ執務官。早く、関係者を連れてきなさい』

画面に映っている女性は、緑色の髪で、少年は母さんと呼ぶが、慌てて艦長と呼び直し、格好を正して私達に向い、云う。

親子なんだ、この人達。

「取り乱してすまなかった。時空管理局、執務官。クロノ・ハラオウンだ。先程の戦闘と、ロストログアの事を詳しく聞きたいので、船の所まで一緒に来て欲しい」

「別にいいけど、早めに終わらせて欲しいな。夕飯の手伝いもあるし」

半透明の画面を、まじまじと見ていた雫ちゃんがあっさりと云つて、えっ！とほとんどの人が驚く。

まあ、驚くのも当たり前だろう、クロノ君とかいう少年を蹴飛ばしといて、いい印象を持っていない筈なのに、普通は付いて行くだなんて思わないから。

和夜君が艦長と呼ばれた人に話し出そうとしていて、雫ちゃんが付いて行く理由は、和夜君が艦長さんに云う内容で分かるだろう。多分、私と雫ちゃんと和夜君は同じ考えだと思っし。

「あつ。ちゃんとお茶とか出ますよね？後、お土産になるものも欲しいです。出来れば食べ物で」

和夜君は微笑みながらも、ずっずっしくそう云つと、雫ちゃんと私を除く他の人達はその言葉に哑然とし、クロノ君は和夜君に詰め寄ろうとするが、艦長さんがそれを抑えて云う。

『ええ、分かったわ。では、クロノ執務官。その子達の案内をよろしくお願いね』

洪々ながらも、クロノ君は艦長さんの言葉に従い、私達を艦長さんの元へ連れて行く。

艦長さんの下へ行く為に船の中に入ると、そこはまるでアニメか映画の中で見られないような光景で、私達はきよきよとしながらクロノ君の後ろを付いて行く。

すると、クロノ君は今まで空気になっていたユーノ君に、元に戻ってもいいと話しかけ、ユーノは頷くと、身体が光り、人の形になる。

私はユーノが私達と同じくらいの歳の男の子になった！と驚いていると、なのはちゃんが少し間を置いてから、大きな声で驚愕の声を上げる。

ユーノが、二度目じゃなかったけ？と聞いたがぶんぶんと首を横に振り、なのはちゃんは初めてだと云う。

「なのはは、知らなかったの？このイタチが人間だって事に」

「うん、知らなかったよ！でも、何で雫ちゃんは驚いてないの？！」

「だって、なのはが驚きすぎで、逆にこっちが冷静になったよ」

私達がユーノの人間化に驚いて足を止めていると、クロノ君が先

を急ぐように云う。

クロノ君に連れられてきた部屋の扉が開くとまず、目に付いたのは盆栽で、思わず目を大きく明けてしまい、次に私が見たのは、かこんと音がした場所で、そこには鹿威しがあり、更に茶道の道具もあった。

確かにお茶で、何か違うと思ったけど、早めに話をして、終わらせよう。

なのはちゃんはまだ、驚いており、雫ちゃんと和夜君も初めは驚いていたが、今は好奇心旺盛に周りを見渡している。

私も一緒にきよろきよろと見ていたが、先程の半透明の画面に映っていた女性に促されて、一人一人、用意されていたお茶とお菓子のある所に座り、艦長さんがにこやかに話し出す。

「初めまして。この船の艦長、リンディ・ハラオウンです。あなたたちが何故、危険なロストログアを集めているのかを話していただけないかしら」

「その前に、俺達の疑問に答えてくれませんか？ロストログアとは何か。時空管理局とはいったい、どういったものなのかを」

和夜君が姿勢を正しながらリンディさんに聞き、リンディさんが答えてくれる。

その疑問に答えてくれているリンディさんには申し訳ないけど、馬鹿な私にはさっぱり分からない。

同じ馬鹿な雫ちゃんは初めから理解しようとしてないのか、お菓子の羊羹を食べ、その後は器用に正座しながら寝ていて、和夜君はちゃんと分かっているのか質問をしており、なのはちゃんの方はユーノ君に分かりやすくしてもらって、どうにか分かっているようだったが、私はユーノの話を聞いても分からなかった。

その後に、ユーノ君がジュエルシードを発見した事を話し、ユーノ君が責任感でジュエルシード探しを始めた事にクロノ君は、無謀だと厳しく云う。

後で、和夜君に聞いたら、時空管理局は日本で云うと、警察、裁判所、消防署などの組織が全部揃っている組織で、ロストログアは色々な世界のもつても危険なもので、核よりも危険なもの、との事。

「そういえば、あなた達の名前をまだ、聞いてなかったわね」

話が一段落し、私達の名前を聞いてきた。

まずは、なのはちゃんから自分の名前と年齢、そして通っている小学校を云い、次に和夜君が名前を云い、和夜君が寝ている雫ちゃんを叩き起こし、名前を云わせ、最後に私が念話で云う。

念話で云ったら何で、念話か。と聞かれたので、声が出せないと云うと、何故か申し訳なさそうな顔をされた。

その事に疑問を持ちながらも、ルドラにも自己紹介させると、ルドラは素っ気無く名前を云っただけだった。

リンディさんが自分のお茶にミルクと沢山の砂糖を入れ、ティースプーンで混ぜ、それを呑む。

私はそれを見て、びっくりしたが、海外では砂糖とかを入れて飲むという事を、テレビでやっていた事を思い出し、納得をするが、それでも砂糖は入れすぎなんじゃあと思う、だけど他人の好みだし、と考えなおした。

「これより、ロストログア、ジュエルシードの回収は時空管理局が全権を持ちます」

「君達は今回の事は忘れて、それぞれの世界に戻って、元通りに暮らすといい」

リンディさん、クロノ君と続けて云い、その言葉に私達は驚き、雫ちゃんが一瞬、立ち上がろうとしたのが分かったが、なのはちゃん慌てるように云う。

「でも、そんな!」

「次元干渉に関わる事件だ。民間人に介入して貰うレベルの話じゃない」

クロノ君が厳しく云うが、なのはちゃんは、でも!と云う。

「まあ、急にこんな事を云われても気持ちの整理も付かないでしょう。今夜一晩、話し合って、それから改めて、お話ししよう」

「送って行こう。元の場所でもいいね」

クロノ君はそう云いながら立ち上がると、雫ちゃんが忘れてた、という風に話し出す。

「お土産は?」

「ああ。それなら、ここにあるわよ」

リンディさんが座っていた場所の近くにあった紙袋を、私達に配る。

私達はお土産のお礼を云うと、そのままクロノ君の後に付いて行き、廊下に出ると突然、和夜君が止まり、リンディさんに振り返る。

「俺はあなた達の事が信用出来ません。ですので、俺達は勝手に行動させていただきます。何かその事で云いたい事がありましたら、

次に会う時に云って下さい。お土産、ありがとうございました」

微笑みながら云う和夜君の言葉に、雫ちゃんと私以外の人は驚き、リンディさんが何か云う前に扉が閉まる。

扉が閉まるとクロノ君が和夜君に突っかかるが、和夜君はそれを受け流し、雫ちゃんが早く帰らせると急かすので、クロノ君は少し苛立ちながらも、自分の役目を果たす為に、私達を送ってくれるみたいだった。

（クロノ君、私が念話をしている事を二人に気付かれないようにして。何で、和夜君があんな事を云ったのか、少しだけヒントをあげる）

（……分かった）

クロノ君が送ってくれている途中で、クロノ君に念話をする、クロノ君はいぶかしみながらも、返事があり、少しほっとする。

私はなのはちゃんとユーノ君にも聞こえるようにしていて、なのはちゃんとユーノ君は私の方を見ているが、その事に和夜君と雫ちゃんは気付いてないようだった。

（雫ちゃんと和夜君、そして私は怒っているんだ。だから、和夜君はあんな風に云ったんだと思う。怒っている理由は自分達で考えてね）

（なっ、君達が怒る理由なんてない筈だぞ。どちらかといえば、僕の方が怒りたい気分だ。僕を蹴飛ばしたのに、まだ謝って貰ってないし、しかもジュエルシードも渡してもらってないし）

（それは、自分が云った事をよく考えてよ。次に会う時に、何で怒っていたのかを分からなかったら、和夜君達は本当に勝手に動き回るから。それで困るのは、そっちになると思うよ。私だけじゃ、二人を止められないしね）

そう私は念話で云いながら、歩いていくと、転送装置の場所に着き、私達が船に入る前の場所に送ってもらった。

クロノ君は、まだ納得がいかない、という風だったけど、そのまま私達と別れた。

これである人達が、どう行動するかによって、雫ちゃんと和夜君の行動が決まる、筈。

何で怒っているのか分からなかったら、ジュエルシードはあの人達には絶対、渡さない事になりそうだ。

でも、分かったとしても……どうなるんだろうなあ。

私は少し不安になりながらも、帰路についた。

第22話（後書き）

すみません、少し更新が遅れました。

週に一回は更新したいのですが、中々うまく出来ないです。

読んで頂きありがとうございます。

第23話

つばさ達は時空管理局とかいう、訳の分からない組織の船から無事に下りると、皆で一緒に帰っている。

フェレットは、フェレットの方が楽だからと、フェレットの姿に戻っていて、それでいいのかと思ったが本人がいいと云うのだから気にしない事にした。

「つばさ。さつきさ、クロノっていう奴に念話でなんか云ってたでしょ」

雫は歩いている途中、つばさに向けて話し出し、つばさは携帯のボタンを素早く打ち、雫と和夜に見えるように画面を見せる。

「私達は怒ってますよって云ったの」

「ふ〜ん。それだけを云ったんだ」

雫は興味が無さそうに云うと、フェレットが聞く。

「あの、三人は何に対して怒っているんですか？」

雫はなのはの肩に乗っているフェレットに、もっと気楽に話してよと云うと、フェレットが素直に頷くのを見て、雫は話し出す。

「だってさ、いきなりやってきて、ジュエルシードはこっちで探すから、うち等は探すなって、怒るなって云うのがおかしいよ」

「それに、俺達に謝らなきゃいけない筈なのに、まだ謝ってもらってない」

どう云う事？とフレットがもう一度聞く。

「あいつらは遅れて来たんだぜ？なら、助けに来るのが遅れてごめん、くらい云ってもいいだろ？なのに、あいつらは謝りもしなかった」

だから怒っているんだと和夜は云い、雫がそれに続くように云う。

「その上、今までであった事を忘れるって、酷いでしょ。ジュエルシードのおかげで家とか壊されてるのに、それをなかった事にしろだなんて……。それに偉そうにして、何様のつもりなのさ！……あー、腹立つー！！」

雫はその事を思い出したのか地団駄を踏み、つばさはその光景を見て苦笑し、携帯の画面を見せる。

「でも、よく我慢したよね。一回、クロノ君を殴りかかろうとしてたでしょ」

「嫌だな。違うよ？うちはただ、蹴り飛ばそうとしてただだよ」

雫は笑顔でつばさに返した。

おいおい、そんな物騒な状態だったのかよ。

何か落ち着きがなくて、それはただ正座をしていて足が痺れているからだと思っていたが……。

まあ、確かに怒るよな。

あの騒動をなかった事にしろ、だなんて。

雫は途中で別れ、和夜はつばさの隣に住んでいる爺さんに用事があるらしく、一緒に帰っている。

和夜は先程、お土産に渡された物を、その爺さんと一緒に食べるそうで、その話が終わる頃になのはが迷うように云う。

「ねえ、つばさちゃん。どうしたらいいと思うかな？クロノ君達が云うように、ジュエルシード探し、やめた方がいいのかな？」

（なのはちゃんは、どうしたいの？）

つばさは念話でなのはに聞き、なのはは不安そうに話す。

「フエイトちゃんの事もあるし、わたしはジュエルシード探しを続けたい」

（なら、それでいいんじゃないかな？）

「えっ。でも、クロノ君たちは止めなさいって云ってたよ?」

つばさが当然のように返し、それに驚いているなのを見て、和夜が云う。

「なら、あいつ等にジュエルシード探しを協力して貰えばいいんじゃない?」

「えっ。協力?」

「でも、それは普通、逆で、管理局に協力させて貰う方なんじゃない?」

フェレットが疑問を口にすると、和夜は嫌そうな顔をする。

「あいつ等の協力なんかしたくないからだ。後は高町さん達の好きなようにすれば良いよ。俺も好きなようにやるから」

何か和夜、あいつ等の事、嫌ってんだな。

まあ、オレもだけど。

時空管理局、ていう名前からして大嫌いだな。

「そういえば和夜君、普通に会話に入ってきたけど、和夜君も念話ができるの?」

「できないけど、大体分かるだろ。話の重要なところ云ってるの、高町さんだけだったし」

和夜がそう云ので、なのはの言葉を思い出してみると、ああ、確かになのはの言葉だけで内容が分かるな、と気付く。

つばさ達はいつの間にか、なのはの家の近くまで来ており、和夜はなのはに云う。

「高町さん。あいつ等との話し合いの事が詳しく分かったら、つばさに教えるだけでいいよ。雫の方も、つばさに云つとけば大丈夫。つばさ経由で伝わるから」

「うん、分かった。でも一応、和夜君達の携帯の番号とか聞いてもいいかな？」

「ああー。俺と雫は携帯持っていないから無理だわ。俺の家の電話番号を教えても良いけど、ほとんど家に誰も居ないし意味ないぞ」

苦笑しながら云う和夜になのはは、そうなんだと云う。

「あつ。わたしの家、ここなの。送ってくれてありがとう。つばさちゃん、和夜君」

二人に向かって微笑みながら、なのはは云うと、和夜はお礼を云われるとは思っていなかったのか、驚いた様子で、顔を少しだけ赤

くしながら云う。

「別に、シゲじいの所に行くついでだから」

和夜はそのまま、すたすたと、つばさの家の方に歩いて行く。

（なのはちゃん、別に気にしないでいいよ。和夜君はただ、照れるだけだから。じゃあ、また明日。なのはちゃん、ユーノ）

和夜の様子を見て、不思議そうに見ていたなのはに、つばさが電話で云い、手を振りながら、先に行った和夜のもとへと急いだ。

和夜の様子を見て、これがツンデレってやつ、なのか？とオレは少し考え、そんな事を考えたオレも、かなえに毒されているなど思い、少し落ち込んだ。

つばさが和夜の隣に追いつくと、オレは、何そんなに急いでいるんだと聞いてみる。

「早くシゲじいの所に行つて、前に借りた本の続きを早く読みたいんだ」

そう和夜はむすつとした表情で云うと、もうシゲじいの家の前にいて、和夜はつばさに、またな、とむすつとした顔を和らげ、微笑

ながら云うと、和夜は爺さんの家のドアを普通に開け、中に入ってしまった。

爺さん、鍵を閉めてないのかよ。と驚き、その事をつばさに聞いてみると、和夜は爺さんの家の合鍵を持っていて、和夜だけではなく、つばさと雫も持っているそうだ。

爺さん、いいのかよ。子供に自分の家の鍵を渡して、と少し呆れた。

つばさが家に入ると、男性が出迎えてくれて、その人はかなえの旦那らしく、今日は一緒に夕飯を食べるみたいで、その後はつばさの家には泊まらずに帰るそうだ。

夕飯時になり、つばさとかなえ、かなえの旦那と少し遅れてやってきたつばさの担任教師の夕菜と一緒にご飯を食べると、いつも以上に騒がしい食事になった。

オレは何度か酔っ払ったかなえと夕菜に突っ込みを入れたかったが、何とか我慢をした。

だが、旦那の少しずれた突っ込みに耐え切れず、オレは思わず、突っ込みをしてしまい、夕菜と旦那にオレの存在がばれてしまった。

夕菜は酔っ払っていた所為か、オレの事は特に気にしていなかったが、お酒を飲んでいなかった旦那の方は結構びっくりしていた。だが暫くすると普通にオレと話とかするようになっていて、さす

が、かなえと結婚した物好きな奴だと思った。

その騒がしい食事も終え、つばさとかなえの旦那が後片付けをし、旦那は次の日も仕事がある為に帰っていく。

夕菜も確か、次の日も学校があつて、仕事の筈だけど、いいのだろうか、とも考えていたが、前にもこういう事があつたのを思い出し、いつもの事かと思い直す。

つばさがお風呂に入り、つばさが部屋に戻ると、なのはからメールが来た。

メールの内容は時空管理局にジュエルシード探しの協力をする事にして、明日の夕方に、つばさと雫達とも話し合いたいとの事。

つばさはそれに「わかった。雫ちゃん達にも明日学校で伝えとく。お休みなさい」と返して、すぐに眠った。

すると眠った筈のつばさが、むくりと布団から起き上がると、オレに聞いてきた。

「ルドラは、あの変な組織の存在は知らなかったの？」

爽やかな笑顔で聞いてくるつばさ、ではなくツカサに、オレは内心、溜息を吐きながら言葉を返す。

《ああ、知らなかったさ。オレがまだ、世界に関わっていた時には時空管理局なんてバカな名前の組織なんてなかった筈だしな》

「……随分と嫌っているんだね。……ところでルドラは僕達と出会う前は、どれくらいの間、何処にいたのかな？」

《オレが何処に居たか何て云っても分からないと思うぞ。それに、どれくらいの間なんて、長くそこに居過ぎた所為で分からねえよ》

ツカサは、オレの云う言葉に対して、ふふんと目を細め、あつさり返すと、また聞いてきた。

「ルドラはどう見る？あの組織。つばさにとって邪魔になると思う？」

《さあ、どうだろうな。オレは名前からして気に食わないが。……あいつ等にとって、オレはロストログアだろうからな。その事があいつ等に分かったらオレは強制的にあいつ等の所に行かなきゃいけないだろうな》

「なら、邪魔になるね。ルドラは、つばさにとって兄みtainな存在から貰った、いや、預かっていると思っっている物だから。強制的に奪われるのは、つばさにとって傷つける事になるし」

ツカサは、うんうんと頷きながら云い、オレに向かって「ちゃん

と普通のデバイスらしくしてよ」と云々と布団を被り、今度こそ本当に眠った。

つばさにとつての兄みたいな存在か。

確かに、あの少年はよく、つばさの世話をしていたな、少しの間だけだったけど。

それに、少年の家族もつばさによくしてくれていたな、と思いながら、つばさの寝顔を見る。

つばさの寝顔は呑気で、見ているこっちが、気が抜けそうな顔で眠っていて、そういえば普通のデバイスって、どんな感じだったっけ？まあ、レイジングハートみたいにしとけばいいか、と考えると、つばさの寝顔を見ながら、これからの事を少しだけ、オレは考えていた。

第23話（後書き）

更新、遅れてごめんなさい

次はもう少し、早めに更新できると思います

読んで頂き、ありがとうございました

第24話

朝になると、私はほぼ日課になったランニングをして、朝ご飯を食べ終え、学校へ行く為に玄関を開けると、そこには和夜君がいてびっくりした。

理由を聞いてみると和夜君は昨日、そのままシゲじいの家に泊まったそうで、着替えは確かシゲじいの所に置いてあるって前に聞いた事があったけど、今日の授業の教科書はどうするんだろうと思った。

そういえば、和夜君がシゲじいの家にお泊りセットが置いてあるよって話の時に教科書の事も云っていた筈、確か、教科書類は全部学校に置いていて、ランドセルの中身はほとんど普通の本や漫画とかだと和夜君が云っていたなあ。

ちなみ雫ちゃんもほとんどの教科書を置き勉していて、宿題の時にだけ必要なものを持ち帰っていたりしている。私の方は置き勉をしないので、ちゃんと真面目に持ち帰ってるよ。

「おはよう、つばさ。高町さんから連絡あったか？」

「おはよう。今日の夕方くらいに昨日の公園に集合だった」

和夜君に私は携帯で打ち、見せると、ルドラが朝の挨拶の後に、着替えとかあったのかよと聞いていた。

「最近は土日とか、平日も時々、シゲじいの所によく泊まっていたりするから、着替えはシゲじいの家に常備してる。そういえば、シゲじいの所に泊まっている時、つばさとは一緒に学校にはいってないな。時間が合わないからか？」

ルドラは和夜君の言葉に少し間を置いた後に、へーと返し、私は「そうだと思うよ。私の場合、登校の時間はほとんど決まってないしね」と返した。

そういえば分団登校の班の方は、大丈夫なの？と私は聞くと、俺が時々、いなくなるのが当たり前になっているから大丈夫だと和夜君は云った。

和夜君と一緒に学校に行く途中で雫ちゃんの班と合流し、一緒に行くと、何故か私が浮気者扱いされたりして、いつもよりも少し賑やかな登校になった。

私達は学校に着くと、雫ちゃんに昨日、リンディさん達と別れた公園で、なのはちゃん達と待ち合わせをしていると云うと、雫ちゃんがなのはちゃんの学校を見たいと云う事で「私達がなのはちゃんの学校に行くから、そのまま学校で待っていて」となのはちゃんの携帯にメールを打つ。

なのはちゃんの了解メールが届くと、雫ちゃんは私立ってどんな感じなんだろうね、とわくわくとした様子になり、そういえば私も初めて行くな、と考えると私もわくわくしてきて、まだ授業も始まっていないのに、早く授業が終わらないかなあと思っていた。

だが、和夜君が雫ちゃんと私のわくわくした感情に、横槍を入れる

ように「学校なんだからそんなに変わらないんじゃない」と云つてきて、雫ちゃんが和夜君に「ロマンがない！」と怒っていた。

私はその言葉を聞いて、確かにそうかもしれないと思って、先程のわくわくとした感情は急激に萎んでいくように感じた。

給食も食べ終え、後は午後に授業だけになったのだが、なのはちやんの学校が少し遠いということで、仕方なく午後の授業をすっぴんかし、なのはちゃん達が通う学校に向った。

後日、その事で私達三人は職員室に呼び出され、夕菜先生に説教と云う名の愚痴を聞かされたのは云うまでもない。

私達は少しより道をしながら、なのはちゃんの通っている学校に着くと、私立は凄いいと思いました。

校舎がでかいし、綺麗で、羨ましい。さすが私立、お金かけていますね。

雫ちゃんもこの校舎を見て、和夜君に「同じ学校でもこんなに違うじゃん」とドヤ顔で云い、和夜君は呆れながら「何で雫が威張っているんだよ」と呟きながら校舎を見て、まあ確かに凄い違いだな、と感心しながら云つた。

校門の前でなのはちゃんを待っていると、ちょうど授業も終わったのか、生徒が校舎から出てくる。

それにしても目立つな、私達。

私達は私服で、他の子は全員、制服なのだから、目立つのも当たり前だ。

周りの子はチラチラとこちらを見ていて、少しここに、いづらいなと、私は思っていたが、栗ちゃんと和夜君はそんな事も思っていないのか、卵焼きの味は甘い方としょっぱい方のどちらが良いのかと云い争っていた。

私は、どっちも好きだなあ。でもダシ味の方も良いよな、と考えていると、なのはちゃんとアリサちゃん、すずかちゃんが校舎から出てくるのが見えて、三人もこちらに気付いたのか、なのはちゃんが手を振り、笑顔でこっちに走ってきて、二人もなのはちゃんを追うように走ってくる。

私はこっちに走ってくるなのはちゃんを見て、漫画とかだところらへんで、こけるよなと思っていたが、そんな事は起きなくて、無事なのはちゃん達は私達の近くまで着いた。

「早いね、みんな。どうしてこんなに早く着いたの？」

「午後の授業をサボった」

栗ちゃんが軽く云うと、なのはちゃん達は驚いたのか「えっ！」

声を上げる。

するとアリサちゃんは呆れ、なのはちゃんが、それで大丈夫なの？と心配そうに聞いてきた。

「ああ、大丈夫だろ。授業に出なくても、頭が悪くても勝手に学年は上がるし」

和夜君が云うと、雫ちゃんと私はうんうんと頷き、それを見たアリサちゃんは溜息を吐きながら「あんた達ねえ」と呟き、なのはちゃんとすずかちゃんは苦笑いをしていた。

なのはちゃんと少しだけ話し合っていたら、どこかで見たことがある黒い高級車が目の前で止まり、運転手の人が出てきて、車のドアを開ける。

するとアリサちゃんが「これからあたし達、バイオリンのお稽古があるからまたね」と云い、アリサちゃんとすずかちゃんは車の中に入って行き、そのまま車は去って行く。

それを感じた風に見ていた和夜君が、昨日の時空管理局の人達の待ち合わせ場所に行こうかと云い、私達はそれに賛同して、なのはちゃんの通っている学校を離れる。

私達は待ち合わせの公園に行く途中で、フェレットの姿をしているユーノと合流して、喋ったりしながら一緒に行き、昨日の公園に

着くと、そこにはクロノ君がいた。

私達は、クロノ君に挨拶をすると、昨日の船の中にクロノ君にまた案内をしてもらい、昨日の部屋ではなく、普通のどこかの会議室を思い浮かべるような部屋で、机には人数分のお菓子とお茶が用意されており、リンディさんはもうその部屋にいた。

私達がリンディさんに挨拶をして、席に座ると、リンディさんとクロノ君は私達に来るのが遅れた事とかをきちんと謝ってきてくれて、雫ちゃんはそれに満足まで、とはいかないようだったけど、ちゃんと許して、クロノ君を蹴った事を謝っていて、和夜君の方は表面上、許しているようだったけど、内心どう思っているのか、よく分からなかった。

一応、私はリンディさん達を許しているけどね。

ルドラは公園に着いてからは喋ったりもしてないから、どう思っているのか分からない。

謝りタイムも終わり、次はジュエルシード探しの話になった。

「なのはさんとユーノさんは、私達にジュエルシード探しに協力をしてくれるそうです。ジュエルシード探しはこちらで探しますので、安心して家で待っていてください」

「俺達は俺達のやり方でジュエルシードを探します」

和夜君はにっこりと笑顔でそう云い、雫ちゃんはその言葉に頷く。

リンディさん達はそう云うとは思っていなかったのか驚いた様子で、クロノ君が怒ったように云う。

「君は馬鹿なのか？魔力も持たない君達がどうジュエルシードを探す気なんだ！？」

「それは、企業秘密です」

またにっこりと笑顔で返す和夜君に今度はリンディさんが厳しく云ってくる。

「ジュエルシード探しはとっても危険な事なの。あなた達が考えるように簡単な事ではないのよ」

「ちゃんと、分かってるよ。ルドラにも叱られたけど、それでも自分が住む所を守りたいの。ただ何もしてないと、もやもやして嫌なの」

「危険だと感じたらすぐに逃げるので平気です。それに、つばさとルドラもいるので大丈夫ですよ」

雫ちゃんはむすっとした顔で云い、和夜君がお茶を飲みながらそう云ってきて私は驚く。

私ですか！？

ルドラは別として、なんで私がいると安心なのですか！？そんなに強くないですよ！！？

そう思い、和夜君の方を見て、携帯で意見を書いて見せようとすると、雫ちゃんが「そうだよ！こっちは、つばさとルドラがいるから安全だよ！！」と云ってきて、びっくり。

二人とも、私を過大評価しすぎです。

そこまで云われた所為か、リンディさんとクロノ君は和也君達の方を見ていたのに、急に私の方を見てきて、いたたまれない気持ちになったが、クロノ君はもう一度、和夜君のほうを見て話し出す。

「だが、一般人がジュエルシード探しをするなんて危険すぎる」

「高町さんも一般人なのに協力させていますよね？なら、大丈夫ですよ」

「君達は何があつた場合に魔法も使えずにどう身を守るんだ？高町なのは、これまでの実績と身を守る術すべもある」

「魔法だけが身を守る術じゃありません、他にもやり方はあると思いますけど？それに、実績もつばさにもありますよ？つばさは高町さんと一緒にジュエルシード探しをしていたんですから」

「だとしても、子供達だけでジュエルシード探しは危険だ」

私も何か話そうとしようとはするが、中々、和夜君とクロノ君達

の話しに入れずにいて、私だけではなく、雫ちゃんとなのはちゃん、船の中に入ってから人の姿になっていたユーノ君もその中には入れないようだった。

雫ちゃんの方は最初から話の中に入ろうとはしないで、お菓子をパクパクと食べている。

私はそれを見て、自分のお菓子を食べ始める。

昨日は和菓子の羊羹だったけど、今日は洋菓子のショートケーキでとっても美味しくて、紅茶の方もいい香りで美味しい、落ち着かない様子のなのはちゃんとユーノ君に（ケーキを食べたら？）と念話で云う。

「いいの？つばさちゃん。話に参加しなくても」

（別に大丈夫だと思うよ？和夜君、頭いいし、このケーキおいしいし）

「そういう問題なのかな？」

ユーノ君は困惑しながら云うけど、私は別に気にしなくてもいいんじゃない？と念話で返しながらケーキを食べる。

それを見たなのはちゃんもケーキを食べ始め、それに続きながらユーノ君もケーキを食べた。

（ケーキ、美味しいでしょ？）と二人に念話をする「うん、美

味しい」と返つて来て、私が作ったわけでも、買つて来たわけでもないのに、嬉しく感じて、私はまた美味しいケーキを食べて、幸せだなあと思った。

私がケーキを食べ終える頃には、和也君達の話し合いも終わっていて、またもや眠っていた雫ちゃんを和夜君が叩き起こし、クロノ君の方は何故だか悔しそうにしている、リンディさんは苦笑しながら話し出す。

「じゃあ、これから、なのはさんのご家族にお話をしてから、つばささんのご家族にもお話をしましょうか」

（え、どう云う事ですか？）

「つばさ、話を聞いてなかったのか？」

私は首を傾げ、リンディさんに念話で聞くと、和夜君が代わりにそう云つてきて、何故か申し訳なく思えたから、念話でごめんなさいと云いながら頭を下げると、雫ちゃんが明るく喋り出す。

「うちはケーキを食べ終わったら、寝ていたので、話がさっぱり分かりません！！」

和夜君は大きく溜息を吐き、簡単に説明してくれた。

早めにジュエルシードを探す為には、学校を休まないといけない。そこで、なのはちゃんのお母さんに嘘を入れながら、ジュエルシード探しの事を話して学校を休んでもらえるようにする。

そして、ジュエルシード探しの事とかを全部知っている、かなえちゃんに私達の保護者としてジュエルシード探しに協力してもらう、との事。

他の条件として、リンディさん達の連絡をこまめにする事とかあるけど、とりあえず雫ちゃんと和夜君、私のジュエルシード探しを許可してくれるそうだ。

まさか、かなえちゃんも一緒にジュエルシードを探す事になるとは思わなかったな。

でも、まあ皆でジュエルシード探しが出来そうではよかったよ。せつかく、ルドラにジュエルシード探しをやってもいいって云われたのに、その日のうちに変な組織に止めさせられそうだったしね。

もし、ジュエルシード探しを止めていたら、暫くの間、機嫌が悪くなっていただろうな、雫ちゃんと和夜君。

私の方は魔法も使えるし（簡単な盾を張れるようになったけど）、ルドラもいるから、時空管理局とやらの協力は出来るだろう。

私はもともと、なのはちゃんに引っ付いて行動をする予定だったしね。

そういえば、さつき、念話が出来ないはずの和夜君と話を通じていたなと思い、その事を和夜君に聞いてみると、どうやら顔に出ていたらしい。後、ちょっとした仕草でも分かりやすかったそうだ。

第24話（後書き）

もうちょっと、クロノ達とのやり取りを書こうと思ったんですが、無理でした

上手く原作キャラのやり取りが書けたらいいのになあ

何かおかしい所があったら教えて下さい

ありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2644q/>

不思議な少女と奇妙なデバイス

2011年11月16日14時29分発行